

トランス次元

3D DREAM MAGAZINE

2018
12
Volume.103
DIGITAL EDITION

18
未 満

常識を改変されたヒロインは
宿敵の子種を自ら求めてしまう...

今号の
特集

催眠孕ませ

表紙&ピンナップ
テレホンカード
応募者全員
サービス

うるし原智志
FCT
Oni-noboru
ぼっしい

カラー
ピンナップ
COLOR PINSUP

【連載&読み切り小説】

懺悔×夏桜 蒼井村正×PINTA
きー子×ちうね 斐芝嘉和×ぼっしい
屋形宗慶×ねいさん 磯貝武連×さるちえ
下山ナンプラーの助×つづきますみ

【変幻装姫シャインミラージュ 外伝】

でいふーと×高浜太郎

ネトレ
異世界転移
Natore
Another World
Transmigration
異世界を定むる少女の物語

小説：上田ながの
挿絵：弥弛

新連載

試し読み版

【えっちマンガ】

白う〜風い
はふえ
李星
仁志田メガネ
火愚夜

ようむ 孕ませ

～夢魔狩り綾香が堕ちるまで～

い しば よしかず
小説 妻之嘉和
NOVEL

挿絵 ぼっしい
ILLUSTRATION

お堅い生徒会長兼退魔師による
突然の孕ませ懇願は
教室内をざわつかせ――

鼻先に迫る巨大な拳に向けて、

「シッ！」

短く息を吐きながら一歩前へ進む細身の美少女。

長く艶やかな漆黒のストリートヘアが一瞬、夜闇に光の弧を描き——制服のスカートを翻して旋回した少女の傍らに、空手部主将の巨体がドッと倒れる。御堂流八正拳、陰陽肘。

前に進めた左足を軸にして独楽のように回転しつつ左手で相手の拳を払い除け、同時に右足を相手の側面に滑らせて、脇腹に肘を叩き込んだのだ。

深夜、東堂学園の教室。

窓から差し込むわずかな月明かりが、散乱した机や椅子、そして手足を投げ出し昏倒している十人ばかりの男子の姿をぼんやりと浮き上がらせている。

文武両道で知られる全寮制の東堂学園の、柔道部、剣道部、空手部、ボクシング部——いずれも格闘技系運動部の猛者たちだが、綾香の敵ではなかった。実戦経験の差だ。

東堂学園生徒会長・御堂綾香は、御堂流退魔術の正統後継者として、これまでに数々の術師と対峙し死線を何度も潜ってきたのだ。

だから——。

「そこっ！」

叫んだ綾香の腕が背後に振られ、まっすぐ伸びた白い細指の先から金色に光る円環が飛んで、

——カシンッ！

闇を切り裂く軌道の途中でなにかに打ち当たり、あらぬ方向へ跳ねた。

真夜中の教室、その後方、縦に長い掃除道具入れ用ロッカーの前に、スウツと人影が現れる。

男だ。

黒いマントを羽織り、骨のように白く四対の目をもつ仮面に顔を隠している。

その仮面の中央、眉間から顎に向けて黒い亀裂が

走り——左右に割れて落ちた。

「……おかしいな。この仮面は気配を消してくれる呪具なのだが、なぜ分かった？」

仮面が割れてもなお影になつていてよく見えない顔に、苦笑のような笑みが浮かぶ。

「気配が消えていたからよ。この人たちの邪気が教室中に満ちていたのに、アナタがいるその場所だけは、なんの気配もなかった」

答えながら足を踏み換え、構え直す綾香。

その左右の手には独鉈杵——古代インドで生まれ仏具にもなった、双頭の短い手槍が握られている。さらに、親指側の穂先には、金色に光る細い円環が引っかけられている。

これも古代インドを発祥とする投擲武器・円月輪チャクラムと言ったほうが通りがよい。

元々は指に引つけて飛ばすのだが、綾香はこれを独鉈杵の穂先で回す。金属同士が擦れ合う清澄な音色が、次第に速まりながら循環する。

「なるほど、呪具が強力すぎたのか。盲点だったな、これからは注意しよう」

「アナタにこれからなんてないわよ、高槻先生！」

叫んだ綾香が左右のチャクラムを同時に飛ばし、男——社会科教師・高槻伸吾は間一髪、マントを翻して払い落とす。

「キミには驚かされてばかりだ。呪具の力で顔は見えていないはずなのに、なぜ私だと？」

「先ほどの仮面よ」

高槻の軽口に落ち着いた声で応えながら、綾香はすでに新たなチャクラムを用意していた。清涼な金属音を繰り返しつつ、机や椅子が散乱する教室の中さらに有利な立ち位置へ遷移。

「先生、前にみんなに見せてくれたでしょ。自分で掘り出した、とても珍しい品だって」

若くすつきりとした顔立ちで女子からの人気が高

い社会科教師・高槻は、発掘が趣味だという変わり者だ。専門は東南アジアで、古代呪具に詳しい。

「そうか、キミは私の話をちゃんと聞いてくれていたんだね。嬉しいな。あの仮面はクタイ王国の遺跡から出土したんだがヒンドゥ教とは別系統でね。だから私はそれ以前の……おっと！」

夜闇を切り裂いて迫る金色の環を、慌ててマントで払い落とす高槻。嬉々として喋り始めた社会科教師に向けて、冷やかな目をした綾香がチャクラムを投げつけたのだ。

「そんな話はどうでもいい。教えて、高槻先生。呪具を使って妖魔を呼び出し、生徒に取り憑けて、いったいなにするつもりだったの？」

「どうでもいいって、酷いな……」

「答えて！」

叫ぶ綾香の声が苦い。

昼間の教室で趣味の発掘について語る高槻は、子供のよう純粋な、真面目で大人しい研究者肌の好青年だったのに——だから綾香も、秘かに心を寄せていたのに——それが、なぜ？

奥歯を軋らせて睨みつける黒髪の美少女に対し、ニイッと邪悪な笑みを浮かべる高槻。

「別に難しいことじゃない。力を得た者はそれを使わずにはいられない。キミと同じさ」

「一緒にするな！」

叫び様、チャクラムを投げつける綾香。

おそろく今度も、呪を帯びたあのマントで払い落とされるだろう。

だからチャクラムは四だ。

左右の手から金色の円環を放つと同時に綾香は身を屈め、バネのように跳躍して高槻に突進。

「うお……ッ！」

マントを翻しかけた男が、自分目がけて一直線に駆けってくる美少女に驚愕の表情を見せ——それが一

瞬にして、闇に消える。

「ッ!」

ハツと足を止めた綾香の頭に、ふわりと触れる柔らかな布。

マントを被せられたのだ。

「チット!」

慌てて払い除けた綾香は、次の瞬間現れた光景に、ほんの一瞬だけ目を奪われた。

(なに、これ……奇麗……)

視界を埋め尽くす、紫色の透明な輝き。

紫水晶で作られた大振りなリング——結合状態の男女の性器を模した呪具が、鼻先に突きつけられていたのだ。

(……って、そんな場合じゃない! 高槻は……)

すぐさま我に返り、目の前にある呪具を独鈷杵で払い除けようとする綾香。

しかし、その切っ先はなにもない空間を虚しく掻いて——。

* * *

「——さん、御堂さん!」

「ッ!? はいっ!」

名前を呼ばれていることに気づき、慌てて立ち上がる綾香。

(こ、ここは……)

見回してみれば、いつもの教室。

教壇には社会科教師の高槻伸吾が苦笑を浮かべて立っており、綾香の周りには普段どおりのクラスメイトが不思議そうな顔を見せている。

「キミが授業中に居眠りとは珍しいな。生徒会の活動が忙しいのかな?」

「い、いえ……」

高槻の問いに、綾香が赤面して首を振ると、周りから一斉に声が上がった。

「いくら御堂さんでもボウツとしてしまうことくら

いありますよ!」

「つていうか、いま先生が話していたのはいつもの発掘ネタでしょ? そりゃ眠くなりますって!」
「御堂さんを責めていないで、さっさと授業に戻ってください!」

見目麗しいだけでなく真面目で優しく落ち着きのある綾香は、学園中の人気者だ。男子からも女子からも慕われていて、だからこうして守ってくれる。好青年の高槻も教師の中では割と人気が高いほうなのだが、綾香にはとても敵わない。

「分かった分かった、授業に戻るよ」

驕然とした教室に苦笑を向け、ヒラヒラと手を振った高槻は、しかし次の瞬間真顔になり、

「……どうしたんだ御堂さん? 顔が真っ赤だぞ」

心配そうに首を傾げた。

自分の席で立ったままだった綾香は——。

「う……う……」

赤らむ頬を俯け、内側に向けた膝をカクカク震わせながら、小さく呻く。

(あ、熱い……身体が……燃えるッ!)

臍の裏側、女性にしかない臓器・子宮が、いまにも燃え出しそうなくらい熱い。欲しい、欲しい、欲しい——牝の欲望が際限なく膨れあがり、真面目な生徒会長の理性をじわりじわりと侵蝕する。

昨晚、夜の教室で高槻に見せられたリングの効果だ。破壊と再生を司る神・シヴァ神のシンボルは、本来は多産や豊穣をもたらす呪具なのだが、それを紫水晶——人間の思念波を吸収・増幅して放射する魔石で作った結果、「孕みたい」という欲望を異様に高める呪具となった。

その力をまともに浴びた綾香は、

(ほ、欲しい……子種が、欲しい……ッ!)

限界以上に膨れあがった牝の本能に身体ばかりか思考まで支配され、淫欲の塊となっていた。

きっちり着込んだ制服の内側で、乳房が火照り乳首が勃起する。臍の裏側では精子を渴望する子宮が狂ったように煮え滾り、そこに連なる肉穴、すなわち膣が、熱く硬く太くたくましい男根を求めて浅ましくいやらしくもどかしそうに蠕動する。

「だ、大丈夫? 御堂さん……?」

傍らの席から心配そうに覗き込んでくるクラスメイトが、煩わしい。

牝に用はない、欲しいのは牝だ。

牝、男——ペニス、男根、淫棒——精子。

(欲しい、欲しい欲しい欲しい……あの青臭くてドロドロとした、白い粘液が……欲しい! 苦くてしよっぱつて喉にざらつく、あの濃密な精液……)

本来の綾香であれば、男性器から迸り出る白濁液を渴望することなどあり得ないし、ましてその匂いや味、喉越しを愛おしく思うことなど絶対にない。

いやそれ以前に、そんな匂いや味や喉越しをなぜ知っているのか? 東堂学園生徒会長・御堂綾香は、潔癖症なくらい綺麗好きで、下ネタを耳にしうものなら絶対零度の視線で睨みつけ、相手にこのうえない罪悪感を植えつけてしまうほど清冽な聖少女だったはず——。

これも、高槻の仕業だ。

リングの呪力で綾香の思考を攪乱した高槻は、さらにいくつもの呪具を用いて強力な催眠下に置いた。完全な操り人形と化した美少女は、いやらしい社会科教師に命じられるまま、己が昏倒させた男子生徒たちのペニスをしゃぶり、精液を呑み干して、その匂い、味、喉越しを一夜にして知り尽くした。白い細指も柔らかな掌も、紅い唇もブリツとした舌も細い喉も、滾る男根の熱い硬さを覚えていた。

もちろん催眠下での出来事だから、その記憶はいまはない。

ないが、しかし——。

「ほ……ほし、い……」

「んん？ 欲しい？ なにが欲しいんだね？」
教壇から、素知らぬ顔で訊ねる高槻。

次の瞬間、机の端を掴んで立っていた綾香が顔を跳ね上げ、

「子種が……欲しいッ！」

切実な声であられもなく叫ぶ。

教室中が一瞬、水を打ったように静まり返り――。

「な、なにを言ってるんだ、御堂さん！ キミ、みんなの前で、そんな大声で、こ、子種って……」

高槻が狼狽する振りをしながらした念押しをきつかけに、クラスメイトが一斉に沸く。

「違うよ先生、御堂さんがそんなはしたないこと、言うわけがないでしょ！」

「きつと聞き間違いだよ、うん、絶対にそうだ！」

「子種じゃなくて、ええつと……こ、コダマ？」

「それより保健室に……御堂さん、顔真っ赤よ！」

ほとんど全てが綾香にとつて好意的な声だが、しかし高槻の術によつて淫らな欲望を掻き立てられている綾香本人には意地悪な言葉でしかなかった。

高槻に操られて男根や精液の味や感触を知った、

という記憶がないから、その欲望は純粹に、己の内

から湧き起こった切実な欲求なのだ。これを満たす

ことが最優先で、羞恥や常識などはどうでもいい。

「聞き間違ひなんかじゃありません！ 私は子種が

欲しいの！ 子種、精子……せ、精液……！ 私の

中に射精して！ お願ひ、お願ひだから！」

叫んでいるうちに居ても立ってもいられなくなり、

机を押して床にしゃがみ込む綾香。

なにをするのか、とクラスメイトたちが呆然と見

守る中、綾香は片方の手で制服の胸をただけ、同時

に深く折り曲げた膝を大きく左右に開く。

はだけられたブレザーと捲れ上がったスカートの

下から現れたのは、細い身体を締めつける競泳用水

着。少しサイズが小さいのか、若々しい乳房や小気

味よく括れたウエスト、そして股間の柔らかな肉

の形が、クッキリ浮き上がって見える。布地が白い

ので、ほんのり赤らんだ柔肌が透けてなんとも言

えず艶めかしい。

「な……なんでそんなものを……」

「身体が疼いて疼いて仕方ないから、これを着込ん

で締めつけていたんです」

本当は高槻の催眠術によつて着せられたものだが、

いまの綾香にとつては「自らの意志で着た」という

記憶が真実だ。水着の裏地に喰い込んで淡い快感を

発している勃起乳首や、きつい股布にしごかれて淫

らな熱を帯びてしまった恥ずかしい割れ目が、綾香

にとつての全てなのだ。

「でも、でも……それも限界！ お願ひ、だれか……

……ここに子種をッ！」

悩ましい声で哀願しながら、衆人環視の中、膝を

開いた美少女生徒会長が己の股間へ手を伸ばす。股

布からはみ出た火照る肉に細指を添え、息を呑ん

で見つめる男子たちの前で自ら大きく割り開く。

――ぬちゃあ。

歪んで伸びた柔敵の内側に、いやらしく濡れ光る

ピンク色の媚肉。

傍から首を伸ばしていた女子たちが悲鳴を上げ、

男子たちは思わず生唾を呑み込んで、教室はいっそ

う騒然となった。

その中で――。

「待て、落ち着け、御堂さん。キミはどうしてそん

なに子種が欲しいんだね？」

呪を帯びた高槻の声が穏やかに通る。

綾香の脳内で錠が開き、催眠術で刻み込まれたセ

リフが己の言葉として流れ出す。

「なにも不思議なことではありません。私は牝です。

牝の種を腹に宿して子を産むのが牝の役割――」

「いやキミ、牝ってそんな……」

「どんな言葉に言い換えても無駄です、先生。私は

気づいてしまったんです。早く孕みたい、己の腹に

子を宿したい――孕むことこそ牝の悦び。みんなの

子種をこの穴に受けて、みんなの赤ちゃんを孕め

たら、どんなに幸せでしょう！」

唾然とするクラスメイトたちの前で、恍惚の表情

で語る綾香。

普通の少女であれば、高槻はもつと簡単にこの状

態にできた。呪具で呼び出した妖魔を取り憑けるだ

けでいいのだ。しかし綾香は退魔師としてしつかり

とした備えがあったため、複数の呪具を用いて思考

を攪乱したり催眠術をかけたりと、面倒な手順をい

くつもこなさなければならなかった。

しかし、もう大丈夫。

ここまでくれば、あとはどこまで墮せるか試すだ

け――教壇の高槻は秘かに北叟笑み、

「だ、だれの子でもいいって言うのか？ キミはい

つたい、どうしてしまったんだ……？」

狼狽した振りをしながら呪を重ねる。

「そう、だれでもいい……うん、クラスのみんな

の子が欲しいッ！」

高槻の呪に感応して、卑猥な言葉を吐く綾香。

その間も、己の秘裂に触れた美少女の白い細指は

いやらしく蠢き続けている。競泳用水着の股布から

掻き出した肉敵の内側、甘酸っぱく香る牝蜜に濡れ

た鮮やかに紅い粘膜を、ぬちゃにちゅぬちゃにちゅ

と淫らにしごき続けている。

「早くう……早くうっ！ みんなの太くて熱くて硬

いオチンチンを、私のココへ……熱く濃くネバネバ

とした精液を、私の中へ……！」

「い、いいの？」

前のめりになって訊き返す男子を、

「いいわけないでしょ！」

真つ赤になつて止める女子。

だがそれを、綾香の上擦った声がきこえた。

「いいの、いいのよ。だつて牝は、子を孕むモノだから……子を孕むためには精を注いでもらわなければならぬし、そのためにはペニスを挿入してもらわなければならぬし……」

「で、でも、御堂さん、こんな場所……」

なおも止めようとする女子の肩に、訳知り顔の高槻がそつと手を置く。

「こうなつてしまつてはもうどうしようもない。御堂さんの求めに応じてあげよう」

「しかし、先生……」

「いや、私もこんなのはおかしいと思うが、しかし見てごらん。御堂さんが辛そうだ。これ以上我慢させたら、壊れてしまうかもしれない」

高槻が話している間も、綾香は己の秘裂を掻き回し続けていた。息はますます上擦り、身体はさらに火照つてしまい、もう片方の手でもどかしそうに制服を脱ぎ始めている。

「は、早く……お願い、私、私……我慢できないの……意地悪なんかしちゃ……イヤッ!」

媚を含んだ甘え声でオネダリしながら熱っぽく潤んだ瞳で流し目を送り、群がる男子たちを誘惑。流れるような動きで四つん這いになり、腰を捻つてスカートを脱ぎ落として、現れた尻を高くと突き上げ発情した牝猫のようにクイッ! クイッ! と右に左に打ち振り始める。

「こないやらしい御堂さんは見たくない。いつもの御堂さんに早く戻つて欲しい……そうだろ?」

真面目腐った顔で呪を含んだ言葉を紡ぎ、生徒たちの心を操る高槻。

「そのためには、御堂さんを満足させなければならぬ。子を孕みたいというなら、望み通り孕ませてあげるのが一番だ」

「つてことは……」

「ああ、犯つてあげなさい」

高槻が鷹揚に肯くと、男子たちが一斉に、おおと獣のように吼えだす。四方八方から伸びる手を、高槻の声がコントロールする。

「おおと、乱暴なことはダメだぞ。出席番号順だ。我慢できないヤツは口や手で抜いてもらえ」

「やった、僕イッチバーン!」

「ちえっ! 早くしろよ!」

「お、俺はお口で……御堂さんのお口で……!」

昂奮に顔を輝かせた男子たちが、順番を待ちきれずに次々とベルトを弛め、限界寸前まで昂つている男根を次々と振り出した。

林立する淫棒の群れに、女子たちが悲鳴を上げる。だが、顔を背ける者はほとんどいない。男子と同じように高槻の呪に囚われ、淫らな好奇心を高められているから、両手で顔を覆いつつ指の間からこっそり覗いているのだ。

一方、綾香は――。

「やうんっ!? あ、くうんッ!?」

逸る男子の手に競泳水着の股布をグイッと掴まれ、仔犬のような声を上げた。

「あ……ご、ゴメン、痛かった?」

「ううん、違ふの……その逆。私のアソコがグチュツとなつて……みんなのオチンチンを見て、余計に敏感になつちやつたみたい。ちよつと擦れただけでピンピンしちゃうの!」

照れ笑いを浮かべた綾香が、細い肩越しに潤んだ流し目をくれないながら、背後の男子に向けてグイッグイッと尻を振る。

「お願い、そつとズラして。でないと私、挿入される前にイッチちゃうかも……あんッ!? や……ダメ、そつとして……ああんッ!」

綾香の哀願を無視し、水着の股布を乱暴に掴んで

動かす男子。火照つて潤んだ美少女の柔肉が、ずれ動く薄布に揉みしこかれてぬちゅっ! くちゅっ!

「いいの、いいのよ。だつて牝は、子を孕むモノだから……子を孕むためには精を注いでもらわなければならぬし、そのためにはペニスを挿入してもらわなければならぬし……」

「で、でも、御堂さん、こんな場所……」

「お、俺はお口で……御堂さんのお口で……!」

昂奮に顔を輝かせた男子たちが、順番を待ちきれずに次々とベルトを弛め、限界寸前まで昂つている男根を次々と振り出した。

林立する淫棒の群れに、女子たちが悲鳴を上げる。だが、顔を背ける者はほとんどいない。男子と同じように高槻の呪に囚われ、淫らな好奇心を高められているから、両手で顔を覆いつつ指の間からこっそり覗いているのだ。

一方、綾香は――。
「やうんっ!? あ、くうんッ!?」
逸る男子の手に競泳水着の股布をグイッと掴まれ、仔犬のような声を上げた。
「あ……ご、ゴメン、痛かった?」
「ううん、違ふの……その逆。私のアソコがグチュツとなつて……みんなのオチンチンを見て、余計に敏感になつちやつたみたい。ちよつと擦れただけでピンピンしちゃうの!」
照れ笑いを浮かべた綾香が、細い肩越しに潤んだ流し目をくれないながら、背後の男子に向けてグイッグイッと尻を振る。
「お願い、そつとズラして。でないと私、挿入される前にイッチちゃうかも……あんッ!? や……ダメ、そつとして……ああんッ!」
綾香の哀願を無視し、水着の股布を乱暴に掴んで

無意識のうちに手が上がり、赤黒く照り光る淫棒に白い細指を絡みつける。しつとり汗ばんだ柔らかな掌で滾る肉棒を握り締めつつ、

「んあ……んちゅっ!」

細い首を捻つて伸ばし、もう片方の手で掴んで引きよせた男根の筒先に無我夢中のキス。

「うあッ!? み、御堂さんが……御堂さんの唇が、俺のオチンチンに……ッ!」

「お、俺のにも、お願いしますうっ!」

「んちゅ、んちゅ……ふはあッ! いいよ、うん、みんなしゃぶつてあげる……みんなの精液、全部全部呑んであげる! だ、だから……早くうっ!」

焦れつたように腰を振る綾香の背後で、濡れ濡れマンコ弄りに興じていた男子がようやく満足したらしく、揺れる尻を両手でガチツと押さえ込んだ。

「じゃあ、憧れの生徒会長のオマンコ……いっただ

上田ながの×弥弛のタッグによる
異世界ファンタジー始動!



ネトラン 異世界転移

Neforare
Another World
Transition

身体を差し出す少女騎士

第一話 異世界で結ばれた二人

小説 NOVEL うえだ 上田ながの 挿絵 ILLUSTRATION みち 弥弛

「夏凛……ずっと、ずっとキミのことが好きだった。だから……その……えっと……ば、僕……僕と付き合って欲しい」

学校の中庭にて、久嶋奏多^{くしまなほ}があたりっ
たけの勇気を振り絞って蓬萊夏凛^{ほうらいかりん}に告白したの、うだる様な暑い夏のある日のことだった。

ただ言葉で好きだと伝えるだけじゃない。自分本気だと、この告白は心の底からのものだと言情や態度でも伝える様に、長い黒髪をポニーテールにした夏凛の切れ長の瞳をジッと見つめる。膨らんだ胸元に、制服の上からでも分かる程キュッと引き締まった括れ、スカートの覗き見えるムチツとした太股——まるでモデルの様に綺麗な身体付きだ。見慣れていても緊張してしまふ程である。それでも決して目を逸らさず、夏凛を見つめ続けた。

そんな奏多に対し、夏凛は驚いた様に瞳を見開き、ジツとこちらを見つめてきた。いつも凛とした物静かな表情を浮かべている夏凛とは思えない程、動揺を感じさせる表情である。

だが、そうした異常は一瞬だけのことだった。すぐに夏凛は表情を引き締めると、瞳を刃の様に鋭く細めた上で奏多を見つめ返してきた。

「奏多……それ、本気？」

鈴の音の様な声で問い返してくる。少しだけ普段よりも冷たい響きを感じさせる声色だ。剣道部で風紀委員——武士子と同級生達から呼ばれて恐れら

れていることはあるだけの気迫を感じて。それでも決して目は逸らさない。

「……その目、本気だね」

そのお陰か、想いは夏凛に届く。夏凛の視線からは険がとれた。だが、そのかわりに浮かんだものは、少しだけ苛立ちを感じさせるものだった。

「でも、なんで？ 私は風紀委員として、これまで我が校の男女交際を取り締まってきた。その私に告白なんて無駄だって、分かっているでしょ？」

苛立つだけじゃない。悲しそうな表情も夏凛は浮かべた。

「分かっている。うん……知ってるよ」

そんな彼女の言葉に首を縦に振った。「だったらどうして？」

「……そんな理由簡単だよ」

一度目を閉じ、大きく息を吸うと、改めて夏凛を見つめ直し——

「抑えきれなくなったから。夏凛が好きだっていう気持ち。本当に夏凛のことが好きなんだ。夏凛と付き合いたい。夏凛と恋人同士になりたいんだ」

重ねて想いを伝えた。

夏凛の強い意志を感じさせる瞳が一瞬揺らぐ。

「分かっているの？ 私達はもう……」

これまでとは違う関係になるんだよ——

これまで夏凛とは姉弟の様に、兄妹の様に育ってきた。家族みたいな幼馴染みだ。その関係がこれで変わってしまう。それは痛いほど理解している。

「うん、分かっている。正直それは怖いよ。でも、この気持ちを抑え込んだま

まの方がずっと怖い」

「……奏多」

「僕じゃ……駄目かな？」

「それは……」

夏凛は一瞬口籠もる。そして迷う様に視線を泳がせた。が、それは本当に僅かな時間であり、やがて黒髪の幼馴染は「駄目じゃ……ない」と普段からは考えられない程小さな声でポツリツと呟いた。

「……でも、それでも駄目……。だって……」

弱々しく夏凛は呟いた。拒絶の理由をさらに口にしようとする。

瞬間、奏多の脳裏に昔の記憶が蘇ってきた。

夏凛の父親が出て行ってしまった日の記憶が……。

妻が別の男と関係を持っていた。それを知ってしまった、夏凛の父は妻子を捨てて姿を消した。

父を失った母の血が自分に流れている。あの日以来、夏凛はそれを強く意識する様になった。結果、男女交際などを強く否定する様に……。

自分には母の血が流れている。だから付き合えない。多分幼馴染みはそう言いたいのだろう。

「関係ないっ!!」

そんな夏凛に対して奏多は叫んだ。

「……奏多……」

「僕にとって大事なものは夏凛が夏凛ってことだ！僕は夏凛が好きだ！大好きだ！僕の恋人になって欲しい」

い!!」

ただ真つ直ぐに自分の気持ちをぶつけた。

「奏多……奏多はずっと一緒にいてね。ずっとずっと……いなくならないでね」同時に思い出す。父親がいなくなってしまった後、泣きながら自分にそう言ってきた夏凛の姿を……。

「ずっとずっと……一緒にいるよ。何があっても、僕だけはずっと夏凛と……一緒に……」

あの時した返事をもう一度口にする。「奏多……」

夏凛も思い出したのか、瞳を見開いた。

そして、ポロポロと涙を流した。

「夏凛？」

いきなりの涙に少し焦ってしまう。だが、焦る必要なんてなかった。

「大丈夫。大丈夫だよ奏多……。そのなんというか、気持ち……凄く嬉しくて。だから……その……」

涙を拭いながら、想いに対し夏凛が答えを口にしようとする。しかし、その瞬間、異変が起きた。

カアアアアッ!

「え？ あ……なに……これ？」

唐突に奏多と夏凛が立つ地面が強烈な輝きを放ち始めた。

「なに!？」

夏凛も戸惑った様子で地面を見る。

そこには六芒星を思わせる幾何学模様が描かれていた。まるで魔法陣である。先程まではなかったものだ。一体

何が起きているのかがまるで分からない。ただ、なんだか猛烈に嫌な予感があった。

「夏凛ッ！」

慌てて夏凛に駆け寄る。彼女の手を取った。

「ここから出るよっ！」

この魔法陣の上にはいけないと本능が警告を発する。夏凛を引っ張ろうとした。けれど、その動きよりも早く魔法陣がさらなる輝きを放つ。

「ま、眩しっ！」

「くっ！ か……奏多ああああっ！」

そのまま二人は光に呑み込まれ——
「この世界」から姿を消した。

「一体……何が？」

目が眩んでいる。しかし、光は収まっている様子だった。だんだん視力が戻ってくる。

「奏多……大丈夫？」

聞き慣れた夏凛の声が聞こえてきた。

「うん。大丈夫。夏凛は？」

「私も問題はな」

視力が回復する。夏凛の姿が視界に映った。言葉通りどこも怪我などをしている様には見えない。そのことに奏多は心の底からホッとした。

「やりましたね姫様。成功です」

「……そのようですね」

男女の声が聞こえてきたのは、そんな時のことだった。

「え？」

反射的に視線を向ける。

するとそこには数人の男女が立っていた。

一人は腰まで届きそうなほど長い金色の髪の毛の小柄で、気品を感じさせる少女だ。高い鼻に、碧い瞳、艶やかな唇——精巧に作られた人形の様にも見える顔立ちだった。間違いなく日本人ではない。

身に着けている衣装も異様だった。

ピンクを基調としたドレスを着ている。明らかに普段着とは言い難い格好だ。けれどハリボテの様なコスプレをしている感じはしない。なんとというか衣装がよく馴染んでいるのだ。生活感を感じるといふか……。その上頭の上には王冠を思わせる様なティアラまで載せている。一言で言うならば王女様といったところだろうか？

しかも、そうした異様な服を身に着けているのは先頭に立つ金髪少女だけではなかった。

少女のすぐ隣に立っているやはり金髪の男はローブとしか言い様のない長尺の服を着ている。その上手には杖まで握っていた。こちらは魔術師にしか見えない。ただ、魔術師らしくなく身体付きはかなり大柄だ。どちらかと言うと細身で小柄な奏多よりも、一回り大きな、男らしいスタイルである。

さらにその後ろには揃いの「鎧」を身に着けた男達が五人もいる。彼らが手にしているものは槍だ。灯りを反射して輝く穂先は、間違いなく本物だろう。鎧に槍、まさに「兵士」といった出で

立ちだ。

「どういうこと？ お姫様に魔術師に兵士って……なんでこんな連中が学校につて……え？ あ……そういえばここ……」

そこで気付いた。

「学校じゃ……ない？ どこ……ここ？」

先程までいた学校の中庭ではない。周りに広がるのは草原だった。草原の中に配置された台座の様な場所、そこに描かれた魔法陣の上に奏多は夏凛と共に立っていた。

反射的に救いを求める様な視線を夏凛へと向ける。だが、夏凛の方も明らかに困惑していた。困った様子で奏多を見ている。

しばらくそのまま見つめ合う。しかし、答えは出せない。結局二人揃って自分達を見つめてくる一団に対して「一体何が起きているのか？」と問いかける様な視線を向けた。

「あ……ま、まずいっ！」

兵士の一人が空を見て声を上げたのはそんな時のことである。つられる様に全員でそちらへと視線を向けると

「なんだ……アレ……」
空中には化け物が浮いていた。

化け物——そう、間違いなく化け物だ。身体の色は緑。背中には蝙蝠の様な翼が生えている。腰から伸びるのは尻尾。顔は——トカゲを思わせる爬虫類染みたものだった。アニメや漫画、

映画でしか見ることがない様な化け物である。

「……奏多」

瞬間、夏凛は反射的にといった様子で奏多を庇う様な体勢を取った。我ながらちよつと情けない。

化け物はそんな夏凛を見つめ——

「……異空騎士。やつてくれたな人間ども」

ポツリと呟いた。

その言葉は明らかに日本語ではない。しかし、何故かその意味を奏多は理解することができた。いや、奏多だけではない。

「異空騎士？」

夏凛も理解できたらしく、化け物が発した言葉を反芻する。

「まあいい……脅威になる前に始末するだけだ」

そうした夏凛の言葉に返事をすることもなく化け物は咄くとバサツと翼を羽ばたかせた。同時に動き出す。一気に夏凛に向かって急降下してきた。

「させるかっ！」

だがその時、魔術師風の男が叫んだ。やはり日本語ではないが意味が分かる。「炎の矢よ、我が敵を穿てッ!!」

魔術師風の男が杖を掲げた。すると杖の先端から炎の矢が化け物に向かって放たれた。

「邪魔だっ！」

その矢に対して化け物が右腕を突き出す。すると暗く輝く壁の様なものが出現した。炎の矢はそれに阻まれ、四

散する。

「今だ！ いけっ！」

けれど魔術師はそれを予測していたらしい。動じることなく兵士達に命じる。

「おおおおっ!!」

その命に従い、兵達走り出した。化け物との距離を詰める。宙を舞う化け物に対し、彼らは槍を突き出した。

「無駄だ」

だが、化け物は槍を回避した上で、タトーンと地面に降り立つと「はあああああ！」凄まじい氣勢を発した。

ドンッ!!

魔物の身体を中心に爆発の様なもの起きる。途端に兵士達は吹き飛ばされた。彼らは地面を何度も転がる。そして、そのまま動かなくなってしまった。目と口を開いたままで……。

「え？ まさか……」

死んだ。死んでしまった？

呆然としてしまう。身体が動かない。夏凛も同じだ。奏多を庇う様な体勢のまま硬直している。

「ま……まだだ！ 魔力嵐よ！ 我が敵を葬れ!!」

そんな奏多達とは違い、魔術師が再び呪文の様なものを唱えた。いや、魔術師だけではない。

「聖なる光よ——魔を滅せよっ!!」

王女様も同じ様に呪文を口にする。途端に強烈な嵐が巻き起こり、王女の指先からはレーザーの様に光が放たれた。

「無駄だ！ 人間如きの魔法など、魔族たる俺には通用しない。消えろっ！」

その嵐が、光が、化け物——魔族が一言呟いた途端、消滅する。

「吹き飛ばっ！」

その上で魔族は腕を振った。再び衝撃波が起きる。それを受けた王女と魔術師も吹っ飛ばされた。

「ぐ……うぐう……」

ただ、先程の兵士達の様に命までは失ってはいない。二人は倒れた状態で苦しそうに呻いた。とはいえ、動けそうにはない。

結果、魔族の前に奏多は夏凛と二人で立ち尽くすこととなった。

「異空騎士よ……これで終わりだ」

魔族が呟く。とても冷たい声。その声は——間違ひなく夏凛に対して向けられたものだった。

（異空騎士ってなんだ？ 分かんない。全然分かんない。でも……でもっ!!）

目の前の魔物——怖い。あまりにも怖すぎる。けれど、怖がつてばかりな

どいられない。狙われているのが夏凛ならば……。

「死ねっ」

魔族が一言呟く。同時に右腕を夏凛に向かつて伸ばした。その掌から——

黒い光が放たれる。魔力弾としか名付けようがない弾が……。それは真っ直ぐ夏凛に向かつて……。

「さ、させるかああああっ！」

アレは危険だ。当たれば死ぬかもしれない——それくらいのは分かっ

た。できれば逃げ出したい。しかし、逃げるわけにはいかない。守らなければならぬ。自分が大好きな人を……。だから！

「え!?」

これまで自分を庇う様な体勢を取っていた夏凛を守る様に、彼女の身体を抱き締めた。

刹那、凄まじい衝撃と痛みが走り

——奏多は意識を失った。

夏凛は吹っ飛ばされた。自分を抱き締める奏多と共に……。地面に叩き付けられる。強い痛みが走り、一瞬息が詰まった。だが、それだけだ。それ以上の苦痛はない。奏多のお陰であの黒い弾の直撃を受けずに済んだからだろう。だが、奏多は……。

「か、奏多っ！ 奏多っ!!」

自分を抱き締めたままの奏多の名を呼ぶ。だが、返事はない。奏多は完全に意識を失っていた。

一瞬恐怖感が膨れ上がってくる。先程の兵士達と同じ様に奏多が死んでしまっているのではないかと、という恐怖感が……。

だが、奏多は意識を失ったままではあるが「げほっ……げほっ」と咳き込んだ。どうやら死んではないらしい。そのことに少しだけホッとする。

「ほう……今の死なんのか。ただの小僧かと思っただが、どうやら思った以上に魔力を内包している様だな。だが、まあ……次は間違ひなく殺すがな」

けれど、安心して居る暇などなかった。魔族が冷たい言葉を向けてくる。殺す——決して言葉だけではない。本気の殺意を感じることができた。

（殺す……奏多を……殺す?）

僅かだが想像してしまふ。奏多の死を……。

すると、それだけで夏凛の胸は今にも砕けてしまふ様な程に強く痛んだ。考えただけで涙さえ出そうになつてしまふ。

（そんなこと……させない。させるわけにはいかない。絶対に……）

失いたくない——強い思いが膨れ上がる。

（守る。奏多は絶対に私がっ!!）

相手は化け物だ。間違ひなく人間を遥かに超える力を持っている。人に天敵というものが存在するのなら、きつとアレのことを言うのだろう。正直怖い。けれど、それ以上に奏多を失うことの方がもっとも恐ろしい。

だから——魔族に対する恐怖心を夏凛は消した。奏多をその場に寝かせる、と、ゆっくり立ち上がる。その上で真直ぐ魔族を刃の様に鋭い目で睨んだ。

心の中に「その言葉」が浮かんできたのはそんな時のことである。その言葉は——

「聖衣装着!!」

ほとんど無意識の内に夏凛は口にした。

カアアアッ!!

瞬間、夏凛の身体が凄まじい光を放

た。

瞬間、夏凛の身体が凄まじい光を放

った。

「ぬおおお！」

魔族さえも戸惑う輝きだ。

その光の中に——これまで身に着けていた制服が溶ける様に消えた。

ツンと上向き加減の掌から少し零れ落ちそうなくらい大きな乳房が、キュッと引き締まった括れが、張りのあるヒップが剥き出しになる。生まれたままの姿を晒した。

そんな肢体に光の粒子が絡み付いてくる。その光が変化し、スーツの様なものを造り出した。ブレザーを思い起こさせる衣装。乳房が、括れが、ヒップが包み込まれた。

全身に力が充ち満ちていく。これまで感じたことがない程の力……。そんなものを感じつつ、夏漂は魔族の前に降り立った。右手に光の粒子で作り出した漆黒の刀を持った状態で……。

「……変化した……だと!?」

呆然と魔族が呟く。

「これって……」

夏漂も驚き、思わず自分の身体を見つめた。

一体自分の身に何が起きたのか?まるで理解できない。こんなこと生まれて初めてのことだ。だが、それでも本能で理解する。この力ならば化け物とだつて戦える——と。

「何が起きているのかは分からない。でも……すべきことは分かる。お前を斬って——奏多を守るっ!!」

幼馴染みを守るためならばなんだつ

てできる——命を刈り取ることだつて。

強い覚悟を刃に込めた。それに反応する様に、漆黒の刀身に走る紅いラインが血の様な輝きを放つ。溢れ出す強い力を感じつつ、切っ先を向けた。

「斬る……斬るだど? たかが人間如きがこの俺を? 舐めるなよ小娘っ!!」

魔族の全身から強大な瘴気の様なもの漏れ出した。しかし、気圧されはしない。引くわけにはいかない。

守るという想いを込め、刀の柄を強く握り締める。同時にダンツと地面を蹴った。一気に魔族との距離を詰める。まるで弾丸の様な速度だ。ただの一蹴りでしかないというのに、一瞬で敵の懷に飛び込む。

「なっ!?」

驚いた様子で魔族は瞳を見開いた。それ程までの突進力。明らかに人のソレではない。しかし、夏漂自身に驚きはなかった。これくらいのことではできると何故か確信できていたからだ。

「一瞬で終わらせる」

「な……舐めるなよ人間っ!!」

対する魔族が怒声を発した。いや、言葉だけではない。強大な魔力まで噴き出させてくる。先程兵士達を吹き飛ばした衝撃波を、今度は夏漂に対して撃ち放ってきた。

ドンツ!!

爆発音が響き渡る。同時に凄まじい衝撃が夏漂の全身を襲ってきた。

「ははは! 異空騎士といえどこれで

終わらだ!!」

勝ち誇った様に魔族が笑う。

だが——

「終わるのはお前の方よ!」

静かに魔族に告げる。懷に飛び込んだ状態のままで……。

「なっ!?」

まさか耐えられるとは思ってもみなかったのか、魔族の表情が凍り付いた。とはいえ、それも本当に僅かな時間だ。

「くっ! な……舐めるなあああッ!」

魔族が腕を振り上げる。その手に強大な魔力が集中していくのが何故か理解できた。強い力。アレを直撃させられたら命はないだろう。

それでも夏漂は動くことなく——

「ヒュッ」

短く息を吐くと同時に構えていた剣を水平に放った。ヒュバツと魔族の下腹部を斬る。

「がっ!」

傷口から紫色の血が飛び散り、夏漂の身体に降りかかった。

（熱い）

刃を通じて肉を切った感触が伝わってくる。血の熱気が身体中を包み込んでくる。命を奪おうとしている——そんな感覚が膨れ上がってきた。だが、剣を止めるつもりはない。奏多を守るために!

「はああああああッ!!」

間髪いれずにザシユウツと袈裟懸けに斬り裂く。

「グガアアアアアッ!!」

魔物の口から凄まじい悲鳴が上がった。

そして魔物は——まさに塵の様に消滅した。死体さえ残すことなく……。

「や……や……や……」

何が起きているのか? まだ理解できない。ただ、それでも自分が勝ったということは理解できた。少しかたッと肩を落とす。が、それは本当に僅かな時間だ。夏漂は剣を投げ捨てると、すぐさま倒れ伏す奏多に走りよった。

「奏多っ! 奏多っ!!」

抱き起こし、名を呼ぶ。だが、返事はない。奏多はぐったりとしたままだ。

「いやだ。奏多……私は奏多を失うなんて嫌だ! 一緒にいてくれるって言ったでしょ!? ずっと一緒に……」

「何度も名を呼ぶ。必死に幼馴染みの名を……」

その瞬間、カアアアツと自身の身体が強い輝きを放った。その輝きが奏多を包み込む。

すると——

「あ……え……か、夏漂?」

ゆつくりと、幼馴染みが目を覚ました。

「ああ……奏多。良かった……奏多……奏多あ」

そんな彼をギュッと強く抱き締める。良かった。本当に良かった——と。

「……無事だった様で本当に良かったです」

背後から可愛らしい声がかげられた

のはそんな時のことだった。一度奏多を放して振り返る。立っていたのは金髪の少女と魔術師だった。

「……色々説明してもらおう」

この異常事態にこの二人が関わっているのは間違っていないだろう。

「もちろん。分かっています。すべて説明させていただきます」

少女は静かに頷いた。

「私はレイリアラムアストラルと申します。ここ、アストラル王国の王女です。で、こちらは」

「ジェイドフォンラドリウム……アストラル王国の宮廷魔術師です」

アストラル王国——聞いたこともない名である。それに魔術師……。

「……ここは……異世界ということですか？」

名乗った二人の言葉に、奏多が反応した。

「貴方達……えつと……」

口籠もった金髪少女——レイリアに対し、夏凛は奏多と共に名を名乗った。

「夏凛様、奏多様……から見ればそういうことになりますね。確かにここは異世界です。私が……貴方達をこの世界に召喚しました」

「……召喚って……なんのために？」

「戦ってもらうためです。異空騎士として……魔王と魔族達と……」

そう前置きをする、レイリアはこの世界が置かれている状況について説明してくれた。

彼女の言葉によると、現在アストラル王国は滅亡の危機に瀕しているらしい。かつて戦いの末に封じられたと言われる魔王が復活したために……。

「魔王はその魔力で魔族を生み出し、この世界の諸王国に対して攻撃を仕掛けてきたのです。人間の命を喰らうために……」

レイリアのこの言葉にジェイドが補足してくれた。彼の話によると魔族の主食は人間が死ぬ瞬間に発する絶望のことだ。魔族にとつて人間は捕食対象なのである。

「魔族達の攻撃により、諸王国は次々と滅ぼされていきました。そして次は我がアストラルというわけです。だから……私は貴方達を召喚したのです」

「何故？」

「かつて魔王を封じた存在——それは異空から現れた騎士。異空騎士でした。異空騎士の力は魔族すら凌駕する。魔王さえも封じることができるのです」

「そう言うレイリアは夏凛を見つめてきた。なんとなく言いたいことを理解する。」

「つまり……私が異空騎士だと？」

「はい」

「あり得ない——と、否定することはできない。先程自分が発揮した力を出し出す。服装も制服から変化したままだ。つまりこれが異空騎士の力……」

「お願いします夏凛様。アストラルのために異空騎士としての力をお貸しください」

レイリアが深々と頭を下げてきた。

「私からも頼む」

いや、レイリアだけじゃない。ジェイドも……。

「いや、しかし……」

チラッと奏多を見る。奏多も困った様な表情を浮かべていた。が、困惑していたのは僅かな時間だ。奏多はすぐさま表情を引き締めると——

「話は分かりました。その上で聞いたんですけど、たとえばそのお話を拒否した場合、元の世界に帰してもらえないんですか？」

そんなことを尋ねた。

その問いにレイリアは一瞬表情を硬くする。痛いところを突かれたとでも言いたげな顔だった。

「それは無理だ」

すると、王女のかわりに魔術師が口を開いた。

「無理？ それで帰れないってことですか？」

「ああ、そうだ。お前達は帰れない。アストラルに伝わっているのは召喚術のみだからな」

「……そうですか」

ガクッと奏多は肩を落とした。その顔は今にも泣き出しそうなものに見える。そうした奏多の表情に酷く胸が痛む。

「本当に帰る術はないの？」

夏凛は奏多にかわって重ねて尋ねた。

「ありません」

横に振る。
「ないって……勝手に喚び出しておいで無責任すぎる。奏多には向こうに帰る理由があるのに……」
奏多が落ち込んでいるのには理由がある。その理由は家族だ。奏多には病弱な母と、二人の妹達がいる。家族の面倒を見なければならぬ。久嶋家は奏多がいなければ普通の生活だつて……。
「勝手なことは承知しています。しかし、国を……国民を守るためです。力を貸していただきたい」
ジェイドが夏凛を見つめてくる。奏多に対するどこか無礼な口調とは違い、夏凛に対しては丁寧な口調で、慇懃に……。
そんな彼に対し、すぐさま返事をすることなどできなかった。なんと答えるべきかと黙り込む。するとそんな夏凛にかわって「分かりました」奏多が頷いた。
「奏多っ!」
幼馴染みの選択に驚いてしまう。そんな夏凛に対し、奏多は弱々しいけれど笑みを浮かべた。
「母さん達は心配だ。でも、心配しても帰れない。だったらさ……やれることをしよう。困ってる人がいるのなら見捨てては置けないから……。戦ったのは夏凛なのに僕が返事するのは申し訳ないけど」
「……奏多は昔からそうだね」
頼まれたら断れない。そのせいで

色々背負うものが……。でも、そういうところが……。

「お前には聞いていない。俺が聞いているのは……夏凛様、貴女です」

が、奏多の選択に対し、魔術師はどこまでも冷たい言葉を口にした上で、夏凛へ視線を向けてきた。

「私？ どういう意味？」

ジェイドに対して不快感を覚えつつ、問う。

「簡単なことです。我々が必要としているのは夏凛様です。奏多とか言ったか？ お前には異空騎士としての力はない。だからお前などどうでもいい」「ど、どうでもいいって……お前っ!!」

強い怒りが溢れ出す。拳を握り締めた。それではなんのために自分だけではなく奏多まで召喚したのか！ 反射的にこの男を殴ろうとする。

だが、その瞬間――

「あ……な、なに？」

異変が起きた。

「これ……あ……ち……力……か……」
身体中から力が抜けていく。立っていることもできそうにない。

「夏凛っ!」

「……か……なた……」

目蓋が重い。抗い難い倦怠感に全身が包み込まれていくのを感じつつ、夏凛は意識を手放した。

「こ……ここは？」

どれだけの時間が過ぎただろうか？

夏凛は意識を取り戻した。視界に天井が飛び込んでくる。外じゃない。どうやらどこか部屋の中にいるらしい。

「起きたか夏凛！ 良かった」

「あ……奏多……」

目覚めるとベッド脇には奏多の姿があった。ホッとした様な表情を浮かべている。いや、奏多だけじゃない。レイリアもいた。

「……先程はジェイドが失礼を致しました」

申し訳なさそうにレイリアが頭を下げてくる。そんな彼女に一体何が起きたのかを問う。するとレイリアは「魔力切れです」と説明してくれた。

「異空騎士の力は魔族さえも凌駕する程に凄まじいものですが、その分力の消費は大きい」

「つまり……力を使いきって私は気絶した？」

「そういうことです」

自分の身に何が起こったのかは理解できた。因みにここはアストラル王国の王城らしい。

ゆつくりと身を起こそうとする。だが……。

「これ……まだ身体が重い。魔力って奴が回復しきっていないってこと？」

「はい」

「えっと……回復までにはどれくらい時間が？」

夏凛にかわって奏多が尋ねる。その問いに対し、レイリアは首を左右に振った。

「自然回復はしません」

「しないって。それじゃあどうするんですか!」

「……そのための奏多様です」

「え？」

レイリアが奏多を見つめる。王女の視線に幼馴染みはきょとんとした表情を浮かべた。

「どういう意味？」

今度は夏凛が奏多のかわりに問う。

「異空騎士は……想い合う相手と身体を重ねることで魔力を補充できるのです」

「身体を……重ねる？」

一瞬意味が理解できなかった。

「……簡単に言えば……性交です」

「――へ？」

夏凛の頭の中は、王女の一言で真っ白に染まった。

*

「お願いします。我が国を……この世界を救ってください。お願いします」

そう言い残してレイリア王女が部屋から出て行ってからどれだけの時間が過ぎただろうか？ 室内には沈黙が広がっていた。

ただただ静かな時間が過ぎる。

そんな沈黙を――

「それで、夏凛はどうする？」

奏多は自分から破ることにした。

「どう……って？」

「その……この国のために戦う？」

「それは……」

夏凛は一瞬口籠もる。その上で「奏

多はどうしたい？」と質問を返してきた。

「僕？ 僕はその……なんとも言えないよ。心情としては助けてあげたい。

でも、僕には戦う力がない。戦うのは夏凛だ。だから決められない。ごめん」力を貸してと頼まれた時に答えることができたのは自分にも力があると思

ったからだ。だが、その考えは間違っていた。戦えるのは夏凛だけ……。だからこそ決断を下すことはできない。情けない……。

「……謝る必要なんかない。私を想ってくれていることは分かるから」

「……ありがとう」

「それで……私の選択だけど……。私は……戦う」

「いいの？」

「帰れないならそれしかないから。困ってる人を見過ごすのだって嫌だし……。それに……この国の連中に恩を売ることができれば、もしかしたら帰る術を探してもらえるかもしれない。だから戦う。小母さんや芳佳達には絶対に奏多が必要だしね」

芳佳というのは妹の名前だ。

「……ありがとう夏凛」

自分のことを夏凛が思ってくれている。それが奏多には嬉しかった。

「でも……えっと……その場合……」

ただ、この選択には問題がある。それはつまり、戦い続けるには魔力の補充が必要ということ……。

「うん、その……分かってる」

42

最愛の母から
凶刃が迫る!!

私と戦いなさい
悠美!!

ママ!!
どうして生きて...!?

いえ
それよりも

何故私とママが
戦わなければ
いけないの!?

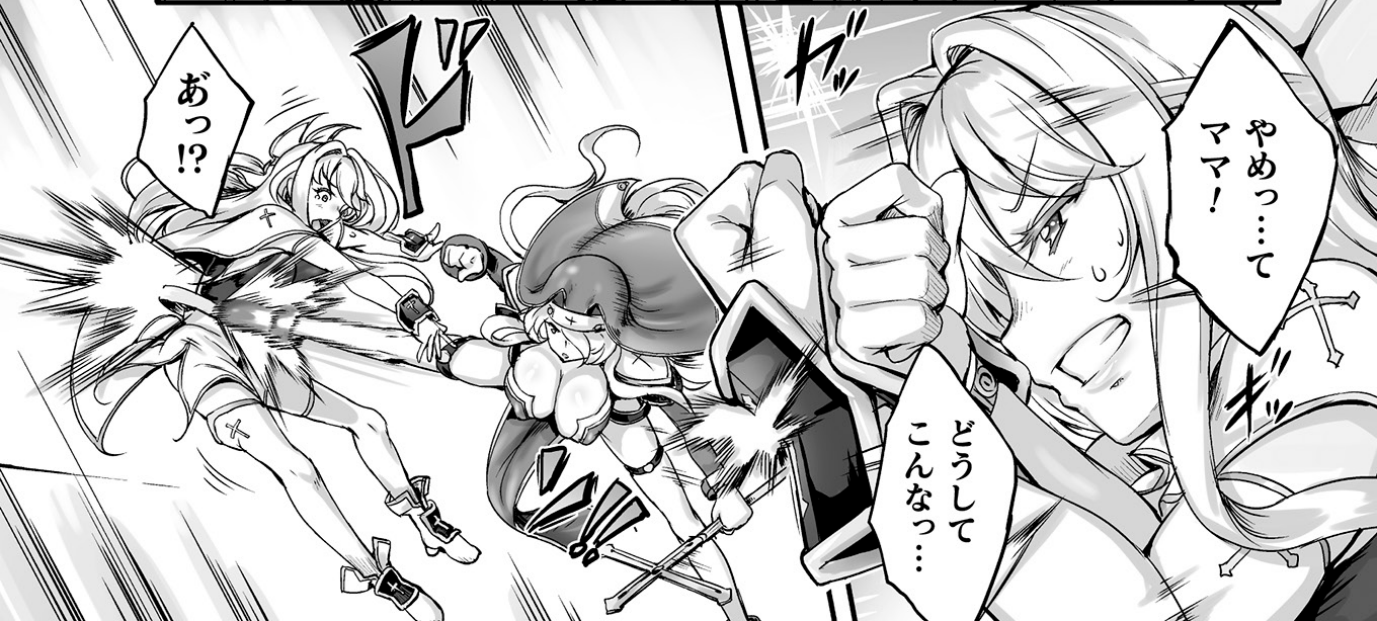
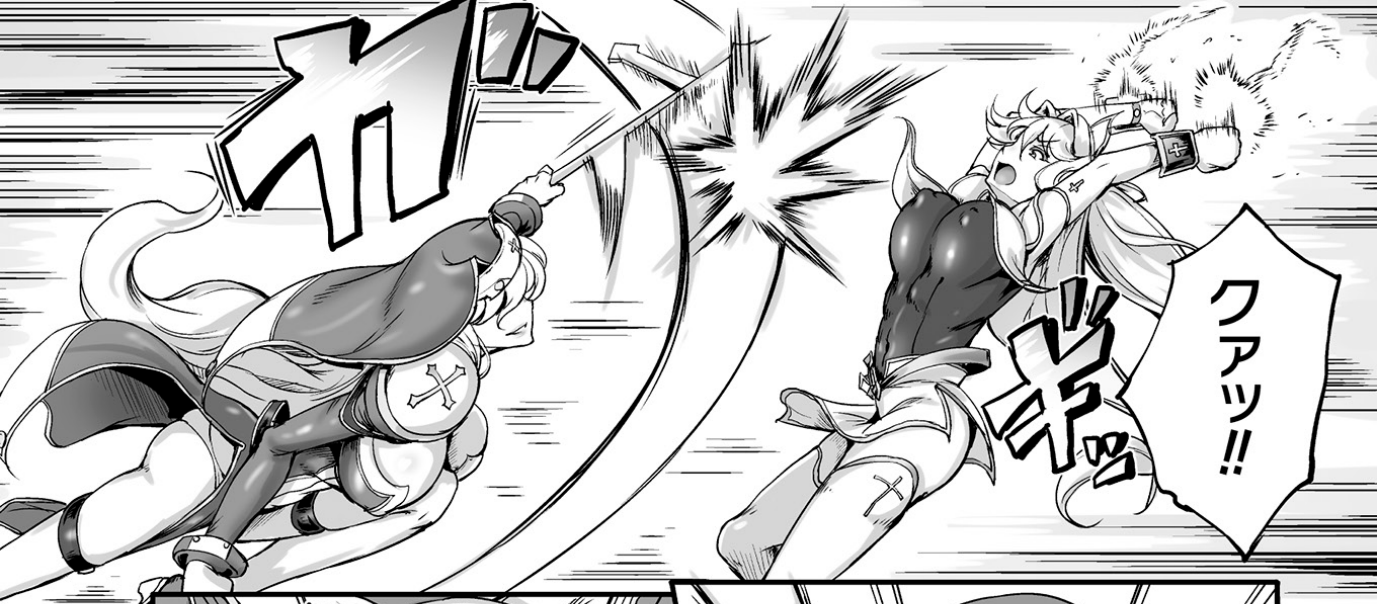
聖天使ユミエル

カオティックロンド

第3話 穢される想い

漫画 しろ〜風い 原作 黒井弘騎

そんな事
出来るわけ…







あつ!

やめて
ママっ!!

ねえ悠美

あの夜
アルファエクリプスに
犯された私は
貴女の力の暴走で死んだ
はずだったの



でも
死ねなかった…

私のお腹に孕まされた
オメガエクリプス様が
自らを守る為

どんなに私の身体が
傷付こうと無理やり
修復してしまうの

ぐにゅ

ぐにゅ

むにゅ

ぐにゅ

んん!!



今もこうして
貴女の力を吸い取り
確実に成長している

だから今
ママを殺して

オメガ様が
完全体として産まれて
しまう前に!

影魔の力を併せ持つ
悠美なら出来る
私を殺して世界を
救ってちょうだい!!

そ…

いや…

フル

ハァ

フル

フル

嫌だよ
ママ!!

折角また
会えたのにつ
もう一度ママを
失うなんて…私

悠美

ポッ

お願いよ
悠美

私を
正義の天使で
いさせて

あなた
貴女の「ママ」で
いさせてちょうだい

ママ…

ママッ!!

……っ
分かったわ
ママ……

ダスク・
リベレーション
影翼…解放!!

私がオメガ
エクリプスを
倒すわ!!

でもそれは
ママをじゃない

私は私のこの
呪われた力を
使いこなし…

今度こそママを
救ってみせる!!



今度こそママを
助けるんだ!!

影翼天使
ブレイク・ドクレーン
ここに光臨!!!

さあいくわよ
影魔の王!

全ての元凶
オメガエクリプス!!









あつ！乳首
引つ張らないでえ



ひっ！？



そんなに
激しくオッパイ
揉み潰されたら
わたし！



ぐっ！！

んんっ！！



ママを
助けてくれるん
でしょう？

それともヌルヌルに
溺られるのが気持ち良くて
どうしても良くなっちゃった？

あらあらしつかり
しなさい悠美

ハア

ハア

んば



だっ
黙れえっ!!

お前を殺して
絶対にママを
助け――



あゝ
っ!!

あっ!
ひっ!

まママの指が
挿入してくっ

あんなに
強がっていたのに
こんなにいやらしい
涎を垂らして――

コスと一緒に
膣擦り上げられ
てっ!!

本当に卑しい
娘ね 悠美っ

違っ!



さっきまでの
勢いはどうしたの
かしら!?

んひいつ!!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!

!!
!!
!!



催眠受胎!

退魔忍妖・千里

昼夜で切り替わる催眠調教に
忍妖少女の矜持は揺さぶられ――

小説
NOVEL
挿絵
ILLUSTRATION

きー子
ちうね

闇深き江戸の夜にたよりない行燈の火が揺れている。行燈をかたく握りしめてゐるのは、小豆色の小袖を着た若い娘だった。

「はあつ、はあつ、はあつ……!」

息せき切つて走る少女の姿が行燈の火に照らされる。真っ白な膚、背を流れていく長い髪。薄桃色の唇は吐息に濡り、乱れた着物の襟から覗く首筋はうっすらと汗ばんでいる。

娘はその白い面に焦燥を浮かべ、後ろから迫りくる足音から逃れようとしていた。

後ろを振り返れども行燈の火は見えず、ただ足音が聞こえるばかり。一寸先も見えぬくらやみの中を灯りもなしに往く足音の主は、間違ひなく尋常のものではない。

「ああつ……!」

娘は精根尽き果てたかのように足を緩めて大通りから横道に、そして奥まった路地に入りこむ。もはや逃げるためではなく、追手から身を隠すために。

「はあつ、はあつ……!」

膝を丸めて息をつく少女の脳裏に、最近江戸市中を騒がせている物騒な噂が浮かぶ。

いわく、嫁入り前の若い娘ばかりを狙う天狗面の人攫いが出るという噂。

この手の風説は酔っぱらいの戯言として相手にされぬのが常であるが、近ごろ若い娘が行方知れずになる事件が相次いでいたことは確かだった。そんなある日のこと、行方知れずになつて

いた娘の一人がひょっこり姿を現し「天狗面の男に攫われた」と証言したことでは噂はにわかにも真実味を帯びた。

天狗による神隠しなど珍しい話ではないが、生身の男だとすれば不気味だ。さらに天狗面の男は、夜に灯りもなく江戸市中を徘徊するのだともまことしやかに囁かれていた——今まさに少女を追ひ立てているものと同じように。

「……はつ、はつ……!」

娘は忙しなく息をつく。華奢な身体に比して豊かな胸が、着物の上からでもわかるほど大きく弾む。

足音がした。小さな衣擦れの音が、金属の擦れ合う微かな音までもが届く。横道に入った足音は、そのまま娘のいる路地の方へと進み——止まった。

「見ツケタゾ」

「あ……あ、あつ……!」

娘は尻餅をついて後ずさり、くらやみの中でおそるおそる人影を見上げる。路地の口に立っていたのは、身の丈六尺もあろうかという浪人風の身なりの男だ。片手には抜き身の刀、そして顔には赤塗りの天狗のお面——。

「我トトモニ参ラレイ」

「いやつ、どうかご堪忍ください……!」

天狗面の男の噂は真実だったのだ。娘は思わず後じさるが、その背中にはほとんどなくて袋小路にぶち当たった。

「あ、あああつ……!」

「モハヤ逃ケラレヌゾ」

男は刀の切つ先を着物の襟に引掛かけ、胸の方にゆつくりと裂いていく。着物に押さえつけられていた乳房が弾み、深い谷間をあらわにした。

「コノママ素裸ヲ晒シテヤロウ」

「そ、そんな……堪忍してえつ……!」

着物を引き裂いていく刃はそのまま襟の合わせ目を切り下げ——少女の胸の谷間から軋げ出た、和紙製の白い球体をも真つ二つにした。

「——ナニツ」

次の瞬間、切り開かれた球体の内側からもうもうたる白煙が噴き出す——煙玉である。男は濃煙を手探りでかき分けるが、つい先ほどまで眼前にいた娘をなぜか見つけることができない。

「小頼ナ真似ヲツ」

やがて煙が晴れた頃、彼は少女が身に付けていた小豆色の着物だけを握りしめていた。天狗面の男は肩を震わせ、指先を布地にぎりぎり食い込ませる。

「堪忍してえ……なんてのお?」

空の近くから声がした。くすくすという笑み混じりの、男をからかうような声。それは先ほどまでの娘の声色と似ていながら、全く非なる声だった。

男は慌てて声が出た方を見上げる。

月を背に、頭の後ろで一つ結びにされた鮮やかな金髪が揺れていた。釣り眼がちの碧眼が男を見下し、いたいけな白皙の顔を不敵に見せている。挑発的なまでに豊満な肢体を包む漆黒の着物には袖がなく、裾も太股が剥き出しなほどの短さだ。しかし肘から先は黒

の指貫き籠手に鎧われ、太股から下もまた黒い足袋に隙間なく覆われている。そして何よりも注目すべきは、彼女のちいさな頭の上と、着物の裾からはみ出ているものにあつた。

「ナニヤツツ」

「はて、下郎にくれてやる名は持ち合わせておらぬが……せめてもの情けにくれてやろう」

美少女の頭上にある金の毛並みの狐耳が、ぴこぴこと悪戯げに揺れる。着物の裾からてるんと垂れているのは耳と同じ色の尻尾だ。

瓦屋根を踏みつけにしていた狐娘は腰に帯びた忍刀を抜き、輝く切つ先を天狗面に突きつけた。

「妾は千里。妖異をもつて妖異を征す、退魔忍妖が壺」

「忍、ダト——」

全ては彼女——千里の計略通りであつた。無力な町娘のふりをした彼女は噂の人攫いをまんまと釣り出し、ここに正体を現したのだ。

「何が目的かは知らぬが狼藉はこれまです。大人しく縄につくがよい」

千里は瓦屋根の端に踏み出す。忍装束の裾の短さは尻尾が窮屈にならぬためのものだが、地上からは股間を包む純白の下帯がほとんど丸見えであつた。「抜カセツ、女ゴトキニ我ガ捕ラエラレルト思ウテ——アガツ?」

男が刀を振り上げた刹那、突如としてその背後に現れた千里は忍刀の柄尻で延髄を一撃した。

勝負は決した。天狗面の男が前のめりにくずおれる視線の先で、瓦屋根の上にいた千里の姿がかき消える。頭上の影は、千里の幻術が見せた虚像に過ぎなかったのだ。

「……他愛もないことよ」

気絶した男に歩み寄る千里の姿は幻のそれと寸毫変わらな。漆黒の忍装束がはち切れんばかりに豊かな乳房や臀部は破廉恥なほどであるが、当人は気にかける素振りもなかった。

「……ほう」

千里は男の身体をざつと調べ、彼には何の力もないと気づく。妖力の源は天狗面の方であり、男の意識を乗っ取っていたのだ。つまりこの男は、天狗面の操り人形にされていた哀れな犠牲者の一人に過ぎなかった。

（きな臭いことになってきたのう……）

この天狗面は誰によって作られたのか、その目的はなんなのか——この男を尋問しても答えは得られぬだろう。

千里は天狗面を回収し、男に自らの小袖をかけていく。人の世には極力不干渉を貫くのが彼女——退魔忍妖の傲いであるが、このまま打ち捨てていくには忍びないと思ったのだ。

千里は地面を蹴立てて瓦屋根に飛び移ると、後ろを振り返ることなく江戸の夜に消えていった。

◆
妖狐と人間の子である千里は普段耳と尻尾を隠し、髪や瞳を黒く見せかけて過ごしている。その方が人の世にま

ぎれるにはうってつけであるからだ。

「千里、蜘蛛が見つかったよ」

「……ほう」

床一面に畳が敷き詰められた大広間。御簾の向こう側の影から呼びかけられ、千里はちいさく眉を上げた。

蜘蛛とは退魔忍妖の内々に伝わることばで、人ならざるもの——妖魔、妖怪、怪異などの力を私利私欲のために濫用するものを指す。

「ほら、きみがこの前やった天狗面の」

「うむ、やった」

「あれが何度も屋敷に出入りしているところを見たという下男がいてね」

「……相手は武士か？」

「上総国のお代官様さ」

千里は御簾の向こう側からの声にびっくりと耳を震わせる。齢十に満たぬ童女とも、千の齢を重ねた老女とも取れる落ち着き払った声だ。

退魔忍妖の里を築いた立役者と語られる大妖にして『首領』。その歴史は新しく、江戸開発に携わった時の人・天海僧正と密約を交わし、ここ不忍池の中心に退魔忍妖の里を拓いたという。おそろく天海僧正は人ならざるものの実在を知り、その対策が必須と見たのだらう。江戸市中のごく一部にあや

かしの居場所を認め、代わりにその力を役立てようという試みは誰にも知られざる人工島として結実した。里の周囲には結界が張られており、江戸市中の誰一人として不忍池の島を認識することはできない。

「……話を聞かせてくれるかの」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

千里は生まれこそ上総国だが、『首領』にその力を見初められて退魔忍妖となった身の上だ。世を騒がせるのは性に合わないため、平穏を乱す魔を討つことにためらいはない。

「幕田定正——これがまるで絵に描いたような悪代官でね、嫁入り前の娘を無理やり手籠めにしてるなんて話もある」

「嫁入り前……まさか、今以上の悪評が立たぬように人攫いを使って娘を集めておるのか？」

「無い話じゃないだろう？」

「……幕府は何をしとる。陳情が届いておらぬわけはなからう」

「握り潰されているか、沙汰を下す役人が取り込まれてしまったか……私は後者だと睨んでいる」

「……ふん。人の身には妖術など手にあまらうに」

千里は自らの力を役立てることに積極的だが、それは人間が未熟な存在だという認識の裏返しでもある。御簾の向こうから微かに苦笑する声があった。

「ほら、行方不明の娘が一人見つかっただらう？」

「うむ。いたな」

「あの子がどうも、心神喪失……というよりは、記憶を弄られているようですね。幕府のものと同じ手でやられたと見ていいと思う」

「……身体のみならず心まで弄ぶとは、

卑劣にもほどがあるに」

千里の黒い瞳がゆっくりと蒼く染まってくる。ふつふつと沸き立つ感情に妖力が呼応しているのだ。

「正直、今回はかなり危険な相手だと思う。できればきみに——」

「やる」

「……早いね」

「やるといったらやる。憑きもの筋か妖術師か知らぬが、よもやこの妾が仕損じるわけはなからう！」

千鳥は自信たっぷりに胸を叩き、勢いあまって狐耳が頭の上からびよんと飛び出す。

御簾の影は苦笑しながらもどこか頼もしげに言った。

「……無論、こちらとしても協力は惜しまないが……くれぐれも無理はしないでくれよ？」

「なに、妾に任せておれ。もはや一人たりとも民草に手は出させぬ——」

千里の決意はすでに固い。その後も『首領』と仔細を詰め、悪代官始末の決行は七日後ということに相成った。

◆
一組の布団が敷かれた寢床を、置行燈の薄明が照らしている。布団の上の中年男は着流しの帯を緩めて肥満体の肌を晒し、大蝸蝓のような顔に下卑た笑みを浮かべた。

「良いではないか、良いではないか。今宵は寝かせてやらんぞお」

「やつ、そんな……どうかお許しく

男のでつぷりと肥えた腹の下から弱い娘の声がした。布団の上に組み伏せられたちいさな身体は、男の巨体にすっぽりと覆い隠されている。

「そう遠慮するでない。大人しゅうしておれば天にも昇る心地を味わわせてやるぞ」

「ひやあつ……！ お代官さまお願いします、なにとぞお慈悲を……っ！」

「ひび、聞き分けのないやつめ。そこがまた愛いのだがなあ」

娘の哀願する声に、お代官さまと呼ばれた男は舌なめずりして笑う。彼は自らの欲望を隠そうともせず、今まさに眼前の娘を毒牙にかけようと手を伸ばした——その時である。

「悪徳代官墓田定正、お命頂戴仕る」

突如として寝所の天井板が踏み抜かれた。漆黒の忍装束を身にまとった狐耳の少女が地に落ちる。その手に握られた忍刀はひとえに男——墓田定正の首筋を狙い澄ましていた。

「ぬっ……く、曲者おおっ!!」

男は肥満体にそぐわぬ機敏さで死の刃を躲した。その腕の中には未だ娘を抱いたままだ。

「っ……意外に動けるようのだの」

上空から舞い降りたのは千里であった。彼女は天井裏に身を潜め、墓田を一撃で仕留めるための機会をじつとかがついていたのだ。

しかし、二つの要因が千里を過たせた。一つは男の反応が予想以上であったこと——そしてもう一つは、早く娘

を助けてやらねばというわずかな焦りが千里を衝き動かしたことである。

「であえていであえて!! 曲者だ、曲者をひつ捕らえよ!! 貴様は動くのではないぞ、この娘がどうなっても良いのか!」

「……下衆め。手籠めにするには飽き足らず、人質にまで使いおるとはの」

「好きにさえずるがいい! くっく、よう見ればこれはなかなか……堪らん肉付きをしておるではないか……!」

墓田は舐め回すような視線を千里の肢体に這わせる。命の危機に晒されながらも性欲を剥き出しにする節操のなさはある意味驚愕に値するであろう。

「待つておれ。すぐに助けるからの」

千里は男の存在を無視していたいけな娘に呼びかける。彼女の姿はほとんど墓田の影に隠れており、その全貌を確かめることは甚だ困難であった。

ほどなくして寝所の襖が開かれる。主人の号令に応じて十人ほどの足軽が駆けつけたのだ。

「曲者だ、このものをひつ捕らえよ! 多少は傷付けても構わん、なんとしても生かして捕らえるのだ!!」

「ははっ、御意に!」

足軽たちは半裸の主人に一切の疑問を挟まず寝所になだれ込む。狐の耳と尻尾を生やした千里に多少の戸惑いはあれど、ためらいはほぼ皆無であった。

「……あまり気は進まぬが」

千里は無抵抗のまま彼らを一瞥する。ただ利用されているに過ぎない彼らを

傷付けるのは忍びないが、墓田を除くためならば他に仕様がなない。

「無駄に抗うでないぞ。僕とお気に入り娘を傷付けたくはないのぞなあ」

「どの口がそのようなことを——」

「問答無用ッ! 今すぐ得物を捨てて大人しく縄につけいッ!」

足軽たちが刀を抜いて忍少女を包囲する。しかし千里は少しも物怖じせず、その着い瞳で彼らを鋭く睨めつけた。

「な、なんだその目は! やはり一度痛い目を——ぎやあああッ!!」

足軽衆のうち一人が突然絶叫した。千里は手も足も一切動かしていない。

同士討ちだった。悲鳴をあげた男はそのすぐ隣の男に斬りつけられたのだ。

斬られた側は驚きのあまりに床の上でたうち回り、斬りつけた側もまた呆然としている。そして気を抜いているうちにまた別の男の刃が振り抜かれた。

「ば、馬鹿者ッ!! 貴様は何をしておるっ、気でも狂ったか!」

傍から見れば千里が男たちを操っているかのようだが、否。千里の幻術はあくまで視覚的なものであり、足軽たちはただ千里に斬りかかるつもりで仲間を斬りかかっているに過ぎない。

「得物を捨てて大人しくしておれ。これ以上はおまえさんが傷付くのみよ」

無事に立っている足軽は瞬く間に一人もいなくなつた。千里は床に這いつくばって呻く男たちを哀れつべく見やり、毅然とした目を墓田に向ける。

「……妙な術を使いよるわ。雌狐め」

「とほけるでない。おまえさんも術師のたぐいであろうに」

「なに? ……僕が?」

墓田が眉をひそめる。意外な反応であった。千里はいつ彼が妖術を使うのかと警戒していたのだが——

少女が怪訝そうにしていると、墓田は合点がいったようにほくそ笑んだ。

「なるほどのお、それで僕の命を狙ってきたおったか。……どうだ百歌、まだ時は足りぬか?」

「いえ。心の隙を縫うだけの時はありました」

「やつてくれ」

「旦那様の御意に」

千里は二者の掛け合いにきよんとした。それは墓田と、彼の腕の中にいる娘との間で交わされていた。

途端に立ちくらみを起こすほどのめまいがして膝をつく。視界が急激に閉ざされ、思考が拡散していく。

「な……ん、で……」

百歌——それは千里の記憶にもある名であった。墓田のかたわらに寄り添っている娘は千里をちらつと振り返る。無表情ながらも愛らしい顔、夜に映える銀髪二つ結び、紅の冷然とした眼差し——そして、ちいさな頭からびよこんと出ている白い毛並みの狐耳。

「お久しぶりです、ちいちゃん」

鈴の鳴るような声。

千里が記憶しているのはそこまでだった。彼女の意識は瞬く間に深

闇の底に沈んでいった。

◆ (友の声に気づかぬとは情けない……)

千里と百歌は同郷の友であった。お互いに狐の半妖で、性格はまるで異なるが馬は合い、一緒に旅人を化かすなどして面白おかしく暮らしていた。

千里が江戸に移ることを決めた時も、「私はずっとここにいますので。向こうが嫌になった時は出戻りしてきてください」と言って送り出してくれたことは今もよく覚えていて。そんな彼女が悪徳代官のそばにいるなど、まさか思いもよらぬことであった。

「……ん、む……？」

ふと、ぴちゃぴちゃという音がして千里は目を覚ました。彼女が瞼を開けていの一番に見たものは、墓田定正の唇が自らの口元に迫るところであった。

「……う……」

千里は両腕を頭の後ろで縛られ、両脚は大腿開きになるように縄がかけられていた。忍装束の裾はめくれ、純白の下帯が丸見えになっている。

「ひひ、目を覚ましおったか雌狐め。今たつぷりと仕置きをしてやるから大人しくしておれよ」

「……妾を、どうするつもりかの？」

千里は頬を赤く染めながら周囲を観察する。彼女は先ほどの寝所とはまた別の、部屋の布団に寝かされていた。

「愚問よのお、そんなことは決まっておりますが。全く破廉恥な身体をしおつてからに——」

分厚い脂肪に覆われた掌が千里の乳房をねちねちと揉みしだく。薄手の忍装束越しの爆乳が、男の手の中で柔らく弾むように形を変えた。

「……人の風上にも置けぬ男よ」

千里は吐き捨てるように言つて身をよじるが、拘束されたままではどうにもならない。陵辱の手から逃れるためにも、まずはこの状況を脱する策を講じるべきであった。手始めに幻術をかけようとした瞬間、驚きのあまりに耳の毛並みが総毛立つ。

術の根幹をなすとされる妖力が、なぜか使えなくなつていたのである。

「……おまえ、妾になにを……！」

「それは私の仕業ですよ、ちいちゃん」突然横から呼びかけられて千里は振り返つた。そこにはいたくない少女——百歌が悪びれぬ顔で、ちょこんと正座して千里を見守っていた。

数年来の再会でありながら百歌はほぼ変わりがなかった。千里の身の丈はせいぜい五尺ほどと小柄だが、百歌はそれより五寸ほどもちいさい。幼い身体は極めて発育に乏しいが、鋭い切れ込みがある中華風の着物に巻かれた腰回りは妙な色香がある。切れ込みからは幼い少女の蠱惑的な風情部がちらちらと見え隠れしていた。

「私がちいちゃんの力を封じ込めました。素直に旦那様の愛奴になるつもりはなさそうでしたので」

「……百歌。なぜおぬしが……」

このような男のそばにおるのだ、と

言わんばかりに千里は墓田を一瞥する。「知己の仲と聞いた時は僕も驚いたぞ。僕がこうしておられるのも全てはおまえのおかげというものだ、なあ百歌よ」

「滅相もありません、旦那様には雄の魅力をお教えいただいたご恩があります。今の私は旦那様に誠心誠意お仕えする肉穴奴隷に過ぎませんゆえに」

「くく、愛いやつよ。後でたつぷりと褒美をくれてやるからのお」

墓田は千里の乳房を揉みしだく片手間に百歌の尻を撫で回す。百歌はそれを厭うどころか自ら尻を差し出し、無表情のまま頬を赤らめる始末であった。

「……なにかあった、百歌。なにかそやつに弱みでも握られておるのか？」

「弱みとあえて言うのでしたら……惚れた弱みといったところでしょうか」

「ほ、本気で言うて——ん、うっ……！」

千里が睨目した刹那、墓田に唇を奪われる。彼は同時に少女の乳房を揉みしだき、股間の逸物を太股に擦り付けさえていた。百歌は恍惚げに瞳を濡らし、千里の耳元で囁く。

「旦那様に愛していただくことこそが女として一番の喜びなのです。旦那様の逞しいものに奥まで貫かれ、熱いものをたんまりと注がれる幸福感……その幸せを味わえるのは、旦那様の肉穴奴隷となつただけです」

「んむっ……んっ、んうっ……！」

千里は男の執拗な接吻に喘ぎながら脱出の糸口を探る。百歌の変貌は気掛かりだが、まずは服従するふりなどし

て男の油断を誘うのが肝要であった。「……その子に、非道いことはしてやらぬかえ……？」

「たつぷりと愛してやつただけだとも。こいつは実に良い女だぞ、僕が他の女を抱いても文句一つ言わぬどころか進んで手伝つてくれるのだからなあ」

「旦那様に愛される喜びを私だけが独り占めにするのは忍びありませんので」百歌は表情一つ変えずに応じた。すると、例の天狗面を造り上げたのもやはり彼女の仕業なのか。

「……わ、わかつた。大人しゅうするから、痛くはせんでおくれ……？」

千里は唾液の糸を舌に伝わせながら、従順そうに狐耳をべたんと垂らす。

「ひひひ、初めからそうやって素直にしておればよいのだ。なあにも痛くはせんからなあ——」

「旦那様、お気をつけを。彼女はそう簡単に服従する珠ではありません」百歌は冷静に忠告する。男に心酔しながらも、その瞳は決して曇つてはいないようだった。

「……人聞きの悪いことを言いおる」

「ちいちゃんは束縛されることをとりわけ嫌う性分でしたから」

「束縛されるのが好きなやつはおらぬであろうよ……」

生業のごとく人を化かしていたとはいえ、旧知の仲の百歌を騙くらかすことは至難の業だ。しかも妖力まで封じられていては手も足も出なかった。その時千里はふと疑問に思つた。か

つて千里と百歌の妖力はほぼ互角であつたはずだが、妖力を封じるなどという芸当がどうして可能なのか――。

「抗いたければ存分に抗うが良い、今に縛られただけでも股を濡らす女にしてやるからのお」

千里の下帯が男の手に緩められる。その内側に秘められていた女陰はぶつくりと肉付きよく、それでいて女童のようにいたいけな一本筋がくつきりと刻まれていた。千里の豊満な肢体といたいけな美貌をそのまま投影したかのような恥肉がさらけ出され、少女は惘然とした顔で男を射すくめた。

「……繩にでもかけねば向かい合えぬだけであろうが。おまえの手なぞ、触れられるだけでも虫酸が走るわえ」

中年の無骨な指が千里の恥裂をぬちぬちゆと擦り上げるが、百歌を虜にするほどの特別なものは感じない。幼い割れ目は粘りの強い愛汁を滲ませ、秘部に淡いぬめりを広げていた。

「おお怖い怖い。まずは形だけでも服従させてやらねばな――百歌よ、やれ」
「はい。ちいちゃん、よく聞いてください――」

その時、百歌の紅い双眸が千里をじつと見つめた。少女は突然の酩酊感に目を回し、全意識を百歌の声に傾ける。

百歌は千里の耳に唇を寄せ、囁いた。
「ちいちゃんは生娘ですか?」

「……? うむ、経験はないが……」
「自慰は週に何度ですか。多い時は?」

「週には……二、三回か……月のもの前になると、四、五回かのう……?」
「やり方はどのようなのが好みですか」

陰核を触るか膣内を弄るかですが「ナカ……の、ほうが好きかの……イ」ときは豆を擦ってイクんじやが……」

「はい。もう良いですよ」
百歌が軽く掌を打ち合わせる。途端に酩酊感は去り、千里はぼーっとしたまま墓田の唇と舌を受け入れる。

そして、一瞬後に気づいた。
「――妾はなにを言うておるのだ!?」
全くの無意識だった。詰問に答えている意識もないまま、答えた記憶だけが頭の中に残っている。しかもその赤裸々な言葉は全て、まぎれもなく千里の恥ずかしい秘密そのものであった。

「ひひつ、そうかそうか。千里はナカを擦られる方がお気に入りであったか」
「やつ……ち、がつ……あ、あん……」

恥ずかしさのあまりに全身がかあつと熱を持つ。墓田の太い指に膣口をくじられると、千里は思わずというように恥ずかしい声を漏らした。

「……な、なにをしおった……!?」
「催眠です。平たく言えば心を丸裸にして語りかけるようなものでしょうか」

「そつ、そんなもんどやつて……!」
「旦那様のお役に立つためと思わば、げに凄まじきは愛の力でしょうか」

あくまで淡淡とした百歌の言葉に千里は驚きを禁じえない。墓田は自らの禪を緩め、少女の顔ほどもあろうかという逞しい肉棒をさらけ出す。

「処女のくせしてまんずりまで覚えておるとは……けしからん身体をしとるだけはあるわい。助平狐の初物はこの儂がきつちり頂いてやろうぞ」

「……人間風情が図に乗りおつて……!」

「あいにくだがなあ、今からおまえはその人間に悦んで処女を捧げることになるのだよ」

墓田は黒ずんだ肉棒を見せつけるように握ると、百歌にちらと目配せした。
「良いですか――ちいちゃんが肉穴奴隷になるための大切な処女穴開通式ですから、心をこめて復唱してください」

百歌はそう前置きしてから、「処女穴開通懇願」の文言を千里の耳元で囁く。

「なつ……あ、阿呆っ! そんなもん言えるわけあるかえ……!」
それは忍少女が頬を真っ赤に染めてしまふほど破廉恥極まる淫語の羅列であった。千里は拒絶の意志を示すように唇を強く引き結ぶが――

「……な、なぜじやつ……! 力が、勝手にゆるんで……!」

千里自身の意識を無視して唇がほころんでいく。身体が心を裏切つてしまう瞬間をまざまざと味わわれるその仕打ちには、意識が残されているだけにかえって残酷であった。

「――わ、妾は墓田様……旦那様の肉穴奴隷になりますのじや……今生にて後生大事に抱えておりました妾の生娘は、旦那様のたくましいお珍宝に破り

捨てていただくための……空間をかこつ妾の処女肉壺、どうか、旦那様の肉槍で開通してくださいまし……!」

媚を含んだ甘つたるい声がひとりのに紡がれていく。千里の顔はもはや耐えがたいほどの羞恥と恥辱に染まり、ぶるぶると小刻みに震えていた。

「えらいですよ。よくできましたね」
「そうまで熱心におねだりされては、応えてやれば男が廃るというもの……: おうおう、まるで桜のように鮮やかな処女膜よ!」

墓田は腰をぐいと突き出し、竿先と密着した肉ビラをかき分ける。にちゃつと愛液の糸を引き、薄桃色の膣粘膜がさらけ出された。千里は無言で墓田を睨むが、彼はその威圧的な視線にむしろ勃起を激しくする有様であった。

「や、やめよ……! 妾は……あつ、あつ……!」

「ぐひひつ、貴様の望み通りであろうが……! ほれ挿れるぞ、生のちんぽがずつぱり入つてしまふぞお……!」

「わ、妾は望んでなど――ひいっ!?」

ずぶんつ、ずぶんつ、ずぶんぶぶんつ! と、濡れ濡れた膣肉をかき分けて遅い肉竿が千里のいたいけな花弁に突き挿さる。儂い生娘の証が散華し、少女はかん高い悲鳴とともに股穴から破瓜の徴を垂れ流した。

「おおおつ、これが雌狐めの生娘の味わいッ……! 覚えておれよ千里お、儂が貴様の初めての男であることは生

淫変えられぬのだぞ……！」

「つ……つ、この、下郎めがッ……!!」

まるで焼けた鉄の杭を打ち込まれたような異物感がお腹の中に鎮座している。幼腔内の柔肉は侵入者を追い出そうとして締め付けを強めるが、男の腰は少女の尻に密着したままだった。

「……は、破瓜とはこんなにも痛むものかえ……!? それが、妾のはじめてが、このような男につ……!!」

熱く、硬い亀頭肉がとうとう腹の一番奥に触れる。千里は痛みと屈辱に震え、憎き男を気丈に睨みつけた。

「哀れよのお、ちんぽをハメられたまま凄まれたところでちいとも恐かないわ……! 全く、腰が蕩けそうな締め付けをしおって……!」

「つ……ゆ、許さぬぞつ……! この恨みつ……んつ、う、くッ……!」

墓田は蜜壺の奥深くに突き立てた剛直でじつくりと処女腔を堪能する。千里は懸命に身をよじるが、結果は肉穴の締め付けが増していくばかり。

ほどなくして男の身勝手な抜き挿しが始まり、少女は腔奥を突き上げられるたびに堪え切れない喘ぎを漏らす。

「うくつ! んつ、く……! や、やめつ……う、くうつ……!」

「おおおつ、こりや堪らんぞつ……! 初物とは思えんつ……むちむちと柔らかい肉が絡んで、きゆうきゆうと心地よう締め付けおつてッ……!」

下ろしたての肉壺を使って好き勝手

に快楽を貪る男とは裏腹、千里は下半身を貫く苦悶に顔を赤らめる。お互いの生殖粘膜が馴染む間もないうちに大きなもので掻きえぐられ、哀れ処女腔は愛汁と鮮血がなймаぜになった薄紅色の粘液を垂らしていた。

「処女開通おめでたいです、ちいちゃん。旦那様の遅いものをじつくりと味わってくださいね」

「あ、阿呆抜かせつ……! こんなものつ……う、くつ……!」

「大丈夫です、力を抜いて……すぐに痛くなくなります。私からすれば破瓜の痛みが恋しいほどですから」

百歌は千里にそつと耳打ちするが、無理難題もいところだ。力を抜けと言われても勝手に力んでしまうというのに——と、思ったその時であつた。

「つ……あ、あれ……? なにが、起きておる……?」

千里の身体からとろん、と力が抜けていく。全身のこわばりが自然と緩み、強く引き結んでいた唇がほころぶ。

「うくつ! うつ、んつ! あつ、んつ……ああんッ……!」

男の腰使いは相変わらず身勝手なままなのに声は甘く上ずり、下半身の痛みも少しずつ褪せていく。墓田は欲望にぎらついた眼で千里を見つめ、にわか腰の動きを早めた。

「おおつ、腔の吸い付きが増しておるぞッ……! 狐の半妖というやつはみな極上の名器をしておるのかね?」

「妖狐といえどもしよせんは自然の摂

理に逆らえぬけだもの。旦那様の名器があんまり遅いものですから、ついつい子種が欲しゅうて雄に媚びてしまうのです。どうか容赦くださいませ」

「こ、これっ! なにを勝手なことを言うて——んうううッ……!」

ばちゅんつ、ばちゅんつと粘つこい水音を立てて処女穴をほじくられながら唇を奪われる。さらに腔奥を亀頭でこね回されるが、下腹部の痛みはすでにほんのわずかしかない。

腹立ちまぎれの仕返しに舌を嚙んでやろうとするが、ずぶんと子宮口を突き上げられた途端に身体がとろんと弛緩した。これも催眠の力なのか、それとも千里の身体が自然と雄に反応してしまっているのか。

「……さ、催眠とやらに決まっておる! こんな、面妖なつ……!」

いずれにせよ千里の処女腔はもはや抵抗なく太幹を咥え込み、唇もまた分厚い舌の侵入を許してしまう。男はしつこく抜き挿しを続けながら、不意に腔内の肉棒をぶるぶると震わせた。

「おおおつ……で、射精るッ……射精るぞ千里おッ……儂の玉袋でしこたま煮詰めた子種、どつぷりと注ぎ込んで孕ませてやるからのおッ……!」

「つ……! い、いやじやつ……! 妾は、人の子など——あつ! んつ、うつ! あつ、あッ!」

墓田の宣言と同時に、射精を一直線に目指して太い腰が振り立てられる。吐精することしか頭に無くなるこの瞬間

ほど男が隙を晒す時は他にないが、もはや千里にその隙をつく余裕は残されていないかった。

「いまに嫌ではなくりますよ、ちいちゃん。旦那様のお子種をお腹で吞ませていただくのは、とつても気持ちいいことですから」

「や、やめよつ……! もう、妾を感わずでないつ……! うつ、あつ、んつ……! あ、あ、あッ——!」

子宮口をずんずんと小刻みに突かれ、腹の奥からこみ上げるふわふわした感覚に甘い声をあげる千里。

墓田はただ自分が気持ちよく射精するためだけに狐娘の蜜壺を使つてちんぽを抜き、塵紙に吐き捨てるのと同じように腔奥で子種を解き放つた。

「うおおおッ……! 射精るぞつ、射精るッ! 孕め千里つ、孕めえつ!——ブッ!!」

びゅるんつ! びゅるるつ、びゅるつ、びゅるんつ!

「——あッ! あ、あつ……あああつ……! イつ……ん、うううッ……!」

少女の子宮に撒き散らされた濃厚な子種の熱が、お腹の奥までじんわりと染み込んでいく。痛みはもう微塵もなく、腹の奥からこみ上げる甘い感覚だけが千里の下腹部にたゆたっている。

「……こ、これはいかぬ……ほんのう少しで、達してしまうところ……!」

びゅるんつ、びゅるんつと穢らわしい男の子種を注がれているのに嫌悪感

は希薄なもの。乳首と陰核を勃起させ

悪あがきは
よしなさい！

妖魔は！

妖魔を追い詰める
凛々しき退魔師だが

絶対に！

討滅する！！

ナル…ホド

その意思ノ
強サコソガ
おまえノ強サト
イウコトカ

ナラバ
それヲ反転
サセテモ

強サヲ
保テルカ！？



妖魔ハンター
レイ

歪められた退魔の心

漫画 ぽふえ
COMIC



排除する
までよ!!

邪魔を
するなら

仕方ない
やるぞ!

しかし!
退魔師同士で
戦うなど...



体が!

動かな...

そこで
見ていなさい

あの妖魔は
私が倒す

影縫いよ
陽が傾けば
術は解ける

な...!?
レイっ!

そんな
無防備な

くくく
退魔師曰

我ニ
言ウコトガ
あるダロ









あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ



そそう
だったな
貴様を倒す
ためよ!

早く!
早く降参
しなさいよ



.....



くくく
自ラ望ンデ
術ヲ施サレタ
ジャナイカ



あ...あ

でないとお
おっぱいが

もうっ
早くイキな
さいよ!

あは♡

早く♡
早く♡

私がっ先に
参っちゃう
のよお♡

二度ほ
こなら事

ひたぐない
んちから

出っ♡♡♡



身内に優しく出来ない女は、
妊娠するオナホに変えてやる!!!

天穹姫 エルレーヌ

- 生意気ヒロイン催淫調教 -

小説
NOVEL

しもやまだ すけ
下山田ナンプラーの助

挿絵
ILLUSTRATION

つづきますみ

無数の剣閃が空間に描かれ、遅れて巨体がバラバラに引き裂かれる。

罪のない街の人々を襲っていた多数の異形の輩は、たった一人によつて壊滅した。

純白に金をあしらったドレス風のコスチュームを纏った美少女は、ふわりと着地すると長く美しい金髪をかき上げて一息つく。

「……ま、こんなところですわね」突如として現れた、この地上に脅威をもたらす異形の怪人たち。

彼らの破壊と殺戮に抗するかのよう、ほとんどくして不思議な力を持つ若い少女たちが多数見受けられてきた。

変身することで華美なコスチュームに身を包み、既存の兵器が通らない怪人を打ち砕く彼女らを人はいつしか「変身ヒロイン」と呼ぶようになる。

彼女らを統括管理しサポートを行う「機関」なる組織も発足し、少女たちは今日も変身して悪と戦うのだ。

そして今、この場で多数の怪人をその剣で斬り伏せた彼女もその一人。

シエルレーヌ。機関に所属するヒロインの中でも、「二」を争う戦闘力の持ち主で、「空の女王」の名に相応しい華麗な戦いぶりは多くの民の心を魅了してやまない。

百センチちょうどの爆乳を惜しげもなく晒し、それでいて腰はくびれその下の臀部はバスト以上に大きく張り出し、まさにわがままボディと言わざるを得ない卑猥で豊満な、男に犯される

ためだけにある肉体の持ち主だ。

「わたくしがいる限り、誰一人として死なせはしませんわ。……ほら、グズグズしていいで出てきなさい」

「は、はい！ ただちに！」
戦いは終わり、脅威は排除された。それを確認し、三人の男が荒廃した街中に現れる。

それぞれ戸越、中延、馬込という名の彼らはヒロイン統括機関に所属する職員であり、要は変身ヒロインをサポートする裏方スタッフだ。戦闘力はないので安全が確保されてから現れ、戦闘の事後処理に奔走する。

「い……いつも華麗な戦いぶりですね、シエルレーヌ」
「お世辞は結構ですわ。さつさと事後処理をなさいな」

社交辞令にも耳を貸さず、金髪爆乳ヒロインは剣を鞘に納めて年上の男たちへ高圧的に言い捨てる。

「まったく、言われないと仕事も始められませんの？ これだから後方の職員は使えませんか」

美しく、強く、気高い。
だがそんな彼女にも、あるいは彼女らしい欠点がある。

「くそ……いつも俺たち職員を頼んで使いがつて。最強の戦闘力だが知らないが、生意気なんだよ」

そう、シエルレーヌはヒロインの中でもひととき性格が悪いのだ。
出自、実力、容姿に裏打ちされた溢れんばかりの自信により、年上だろう

が男性だろうが他者を平気で見下すことから機関のスタッフにも彼女を苦手としている者は多い。

変に逆らうよりは唯々諸々と従っていた方が楽なため、三人も嫌々ながら特に言い訳せず働いていたが。

「あれ？ 何か落ちてる」
ふと職員の馬込は、荒廃した街中において見慣れない端末のようなものを見つけた。

どうやら倒された敵の怪人が持っていた機械らしい。こういった戦利品を回収して研究することもヒロイン統括機関の裏方仕事だ。

馬込がそれを手に取って眺めていると、後ろから棘だらけの音が刺さる。
「ちよつとあなた、何をぼんやりしていますの」

少し気をとられていただけでこれだ。美人で爆乳爆尻なのはいいが、毎度毎度この調子では気も滅入る。

「大層なご身分ですわね、わたくしと違つて命の危険のない仕事は気を抜けて。ヒロイン、職員にかかわらず我々

「機関」に所属する者は全員が市民の命を預かっているというのに、その自覚が完全に欠如していますわね」

（なんだよ……ちよつとこの装置が気になってただけじゃないか）

「そもそも毎度毎度、敵の出現位置の把握が遅いのはどういふことですか？一秒の遅れで亡くなる人がいるというのに、少々怠慢なのではなくて？」
「そ、それは……怪人も妨害電波やレ

ーダー攪乱の手を用いてこちらの素敵を阻んでおりまして」

「言い訳は無能のすることですわよ。安全なところで口だけ動かして、人々の税金で食べるスーパードンペニの安物はさぞ美味しいでしょうね」

「……………」
口を開けば傲慢で峻烈な物言いはかり。自分が高貴で華麗な変身ヒロインであることをいいことに、完全に男を劣等種として見ている。

「そうでなくても男など、性別からしてヒロインに選ばれない劣等種。文句があるならあなた方が怪人を倒せばよろしいのではなくて？ それができないなら機械のように黙って働……」

「うるせえ、この生意気女が！」
とうとうその高圧的な物言いに、馬込の精神は限界に達した。

「女のくせにいつも偉そうにしやがつて！ もうどうなつても知るか、こいつを食らいやがれ！」

「お、おいよせ馬込！」
間に入ろうとした戸越の制止も聞かず、堪忍袋の緒が切れた彼は手に持っていた機械をシエルレーヌに向けてボタンを押してしまふ。

まばゆいピンク色の光が周囲を一瞬だけ照らし、そして――。

「……あ、あれ？ 何も起こらない？」
光はすぐに消えてしまい、何かが起きた様子もない。

虚を衝かれまともに光を浴びたシエルレーヌも自身の身になんの変化もな

「見逃してもらえたってことか……？
でもどうして。あいつの性格的にタダ
で許すなんてありえないぞ」

「ふんっ、何かし出すと思えばこけお
どしですか？ しよせん戦う力も持た
ない無能な職員ならそれが限界でしょ
うね。ですが、このわたくしに盾つく
ような言動および行動は到底看過でき
るものではありませんわ。このことは
機関の上層部に報告させていただきます」

「ま、待つてくれ！ ついカッとなつ
て、反省してるからそれだけはやめて
くれ！」
衝動的に事に及んだとはいえ、失敗
に終わったことで理性が戻ってくる。
たった一瞬の過ちで、自分は機関に
よって厳罰に処されてしまうのだ。

それにおびえた馬込は必死に懇願す
るが、プライドのない小男がいくら頭
を下げたところでこの傲慢なヒロイン
が許すはずも……。
「……やめて欲しいんですの？ では
その通りに」

が、事態は思ってもいなかった方向
に転んだ。
「何を不思議そうにしているんです
の？ あなたがやめると言ったから報
告はやめますわ」

この高飛車な令嬢ヒロインが、格下
であるはずの男の懇願にあつさりとし
て頷いたのだ。
「ほら、さっさと仕事を続けなさい
わたくし、帰ってシャワーを浴びたい
んですの」

「その機械……もしかして催眠、もし
くは洗脳装置なんじゃないか？」
装置を握ったままぼかんとする馬込
に、先ほど制止しようとしていたもう
少し年上の職員、戸越が入ってくる。
前に似たような装置を怪人がヒロイ
ンに使っていたケースを報告で聞いた
と彼は言う。

「催眠装置……だとすれば」
その言葉に背德的な響きを感じ取り、
傲慢なヒロインに歩み寄って肩を掴ん
で一気に押し倒そうとする馬込。
「ならシエルレース、俺にレイプされ
て孕んじま……ぐはあ！」

「っ、何をするんですの！」
が、催眠にかかっていたと思しき彼
女は唐突なセックスの要求には応じず
掌底で馬込を突き飛ばす。
「ど、どういうことだ……？ さっき
は言うことを聞いたのに」

「……おそらく、催眠の度合いがまだ
軽いのでは。あまりにも突拍子もない
ことはさすがに聞かないでしょう」
困惑する馬込に、眼鏡をかけたスタ
ッフの中延が合点のいったように推測
する。

装置使用一回目ということで催眠の
レベルがまだ軽く、簡単な命令もしく
は彼女の常識の範疇での命令にしか応
えない——ということなのだろうと。
「いてて……ってことは、段階を踏ん

で洗脳していけばいいってことか？」
「ついでに『性行為はヒロインとして
当然のこと』といった暗示もかけてや
れば効果はさらに高まりそうですね」
「なるほど……うまく使えば面白いこ
とになりそうですぜ」

三人の男たちは顔を見合わせると、
先ほど彼女に挿入しようとして失敗し
た馬込が前に進み出て言った。
「あ……シエルレース、いきなりレ
イプしようとして悪かったな。本番は
お互いにまだ早かったよな」

「そうですわよ。いくらあなた方でも、
いきなりこのわたくしの身体を好きに
できるなどと思わないことですわ」
（よし、やつぱり効いてる！）
返ってきた反応に、催眠そのものは
しつかりとかかっていることに手ごた
えを感じ内心で拳を握る三人。

「だよな。だから今日のところは手コ
キでサクッと処理してくれよ」
「これは『昨日までも』していただい
ていたことですし、問題ありませんよ
ねシエルレース」

「……？ そ、そう……でしたわね」
どこか疑念を浮かべているシエルレ
ースだが、中延の言葉もあつてくれん
と頷く。

催眠状態にかかっている彼女に、言
葉でも暗示をかけていく。そうするこ
とで命令をより聞きやすくしようと試
みたのだが、どうやら成功らしい。
僥倖にも、この生意気な変身ヒロイ
ンに一矢報いる時がやってきたのだ。

馬込は街中にもかかわらずスポンか
ら肉棒を取り出すと、金髪爆乳ヒロイ
ンはそのしなやかな指で彼のペニスを
握り込む。

「うおお……っ、こ、この感触、柔ら
かくて小さい手……生意気なヒロイ
ンにチンコ握られてるってだけで射精
しそうだ……」

「こ、こんなこと……本当にやつてい
ましたっけ……？」
戸惑いながらも、馬込の男性器を右
手でしごいていくシエルレース。

その美貌には混乱の色が見受けられ
るものの、決して嫌というわけではな
さそうに手で奉仕を続ける。
「おお、いいぜシエルレース……女
は男の性欲を毎日処理する生き物だか
らよ、セックスとまではいかなくても
手コキくらいなら頼まれたらやらなき
やいけないんだぞっ、しつかり覚えと
けよ……うっ、射精する！」

これまで高飛車な態度を取ってきた
ヒロインに奉仕させているという高揚
感と征服感からか、馬込はあつかりと
限界を迎えシエルレースの高貴な美貌
に劣情の塊をぶちまけて穢していく。
「きやあつ……！ な、なにするんで
すの……」

「ふう……なにつて、精液をかけてあ
げたんだよその顔によ。女は男性様の
精液を顔で受け止めるもんだろ」
「そ、そんなこと……ありえませ
んわ！ わたくしを騙しましたわね！」
「まずい、催眠が解けかかっているぞ！

それ以上精神に負荷をかけるな」

正気を取り戻しかけていた様子の子のシエルレーヌを見て、戸越が警告する。

まだ催眠の程度が弱く、あまりにも過剰な認識変化は彼女の脳が受けつけないようだ。

怒るシエルレーヌと馬込の間に割って入り、彼女を刺激しないよう慇懃に頭を下げる中延。

「申し訳ありませんシエルレーヌ。あとの処理は我々でやっていきますので、ひとまず先にご帰還ください」

「わ、分かりましたわ。ご苦労さま」

顔の精液を拭き取られながら話を強引に切り上げられ、シエルレーヌは首をかしげつつも垂直に飛び上がって機関の本部へ真つぐ帰還していく。

（う……何かおかしいですわ。男性の精液を顔で受け止めるなんて……）

空を駆けながら、最強の令嬢ヒロインは思う。

自分のした行為は本当に正しいことだったのだろうか。

彼らは、昨日までも自分があのような行為を当たり前のようにしていたと言っていた。

しかし、自分があのような格下の男たちを相手にするなどあり得たのだろうか。

（間違っているのはわたくしの方ですの……？ だとしたらあの職員の方々にも申し訳ないことをしましたか……けど……）

精液は拭いても疑念は拭いきれない

まあ、シエルレーヌは帰還していくのだった。

翌日。

「いつまで隠れているつもりですか？ 怪人はとくに倒しましたわ、無能なら無能らしくあぐさく働きなさい」

怪人を倒したシエルレーヌは、いつものように事後処理にきた職員たちを不遜な態度でなじっていた。

「やれやれ、昨日の今日ではその高慢な物言いは変わりませんね。では少し黙って差し上げましょう」

そんな生意気ヒロインの後ろから、中延は昨日の催眠装置を取り出し彼女に声をかけて光を見せる。

「……これで催眠状態が強まったはず。昨日より多少強引な命令も聞かせられると思いますよ」

昨日に続いて二度の重ね掛け。

日をまたいだのはシエルレーヌの精神に負担をかけないようにするためだが、巧くいったように彼女はぼんやりと「な……なにをしましたの」と言いながら眠そうに立っている。

「それではこれより、いつも通り貴女に精液をかけさせていただきます。戦いによって消耗した魔力は男性の精液を吸収することで補充される……昨日も、おとといも、その前も……いつも使わせていただいていたましたよね。その卑猥な肉体を」

もちろん嘘だ。

変身ヒロインの魔力は何もしなくて

もゆっくりと回復し続けるが、それを「精液を浴びれば回復する」と思い込ませた上で彼女に肉体奉仕させることが今日の催眠調教の目的だ。

「へへへ、じゃあ今日はおっぱいでしてもらおうか。精液を集めるにはその無駄にでかい乳を使うのが最適だもん」

「そんな……他に方法が、きやあつー」

「うるつせえ、ゴタゴタ言わずにおっぱい使わせろオラー」

躊躇う彼女に詰め寄って胸の開いたヒロインコスチュームを強引にずり下げ、百センチの美爆乳をあらわにする。

男を見下しているくせに、男に尽くすのにぴったりの巨大バスト。女の胸は男性に採まれ、男性のペニスを挟んで気持ちよくするために存在するとい

うのに、それを使わずただ無意味にぶら下げているなど言語道断だ。

「や、やめなさい……そんな乱暴につ、んっ！」

「うっほお、やわらけえ……シエルレーヌの高飛車おっぱい、偉そうなデカ乳……ずっと採みたかったんだ」

「お、俺にも採ませろ！ うおお、すつけえ……態度もでかけりやおっぱいもでかくて、たまんねえよ……！」

大の男二人で採んでもまだ余り、ぐにゅぐにゅと自在に形を変えていくシエルレーヌの尊大な乳房。

しょうかね、採んでいても魔力の補充はできませんし」

胸採みを堪能する二人を制し、中延が自らのモノを怒張させながらヒロインの谷間へと近づけてくる。

「その生意気なおっぱいは、こうするためにあるのですよ！」

「やつ、やあああ！」

絹のような肌触りに、極上の柔らかさと弾力。熱と重量感のある肉のカーテンをかき分けながら奥まで進んでいく征服感に、眼鏡の職員は腰をわななかせて光悦に浸る。

「おおっ……！ やはり貴女の乳は最高だ、こうして縦パイズリも難なくできるっ……ほらもつと左右から圧をかけるのです、私を射精させなければ魔力の補充はできませんよ」

「つ……こ、こんなことで本当に魔力は補充されますの……？」

疑念を抱きながらも彼らの言葉を信じて、巨大乳で肉棒を圧迫し精液を絞ろうとする催眠ヒロイン。

「何を言っているのです、今までもこうして職員からそのデカ乳で精液と魔力を搾り取ってきたでしょう、この淫乱おっぱい変身ヒロインー！」

「そ……そうでしたわ、ごめんなさい……」

「ククク、これですよ！ この生意気なシエルレーヌを段階的に奴隷にしていく過程！ もつと男のための従順な便器にしていけないと……っ、出るっ、出ますよシエルレーヌ、そのおっぱい



に乳内射精しますからねっ！」

心身ともに満たされた中延はそのま
ま彼女の胸の中で果て、劣等感と達成
感に満ちた汚らしい雄液をぶちまけ
ていく。それを指ですくい取って口に
運ぶシエルレーヌは、あまりの苦さと
臭さに美貌を歪めていた。

「おい生意気女、ありがとうございま
すだろ！ 男の精液で魔力を補充して
もらったんだから！」

「んっ……うええ……か、感謝いたし
ます……わ……」

（こ、こんなこと……でも……）
ヒロインの性質上、時間経過によっ
て魔力は回復している。

それを「精液を飲んだ」とことと「実
際に魔力が回復した」という二つの事
実とともに誤認させることで、ますま
す催眠の度合いは高まっていく。

結局この日は三人が満足するまで魔
力の補充と偽り、シエルレーヌは自慢
の爆乳を散々に弄ばれ、胸から臭いが
消えないほど乳内射精されていった。

「よし、じゃあ始めろや」

三日目となるこの日は、もはや恒例
となった調教前の催眠光線を浴びせた
後にオナニーを要求する。

催眠の重ね掛けによってだいぶ性的
な命令も受け入れられるようになって
いるようで、言われるまま彼らに連れ
られ倉庫へやってきたシエルレーヌは
「わかりましたわ……」と言ってドレ
ス状コスチュームをたくし上げ、コン

テナにまたがって自慰行為を始めた。

「ん……っ、んうっ、ふ……」

（わたくしがオナニーするところを見
て、男性の皆様はやる気を高めてくだ
さるんですもの。これも変身ヒロイン
の使命、仕方ないことなのですわ……）

「そうそう、ヒロインのオナニーは俺
ら男性にとつて大切な娯楽だからな」

「もうクチュクチュイやらしい音がし
てんじゃねえか、オナニー大好き変態
ヒロインがよ」

「しつかり股を開いて、恥ずかしいと
ころを見せてくださいよ」

「んっ……は、はいっ……職員の皆様、
シエルレーヌの恥ずかしいオナニー、
いっぱいご覧くださいませ……」

左手で爆乳を揉みしだきながら、右
手で秘裂をなぞるように不器用ながら
も男性を愉しませるべく必死に自慰行
為に及ぶ変身ヒロイン。

生意気な令嬢の不慣れで一生懸命な
感じが彼らの心を満たし「もつと下品
に喘げ」だの「股広げろって言っただ
ろ」だの下劣な命令が、淫猥な水音
とともに人気のない倉庫に反響する。

まだ彼女にも疑念がわずかに残って
いるのだが、脳を強烈に支配する「女
は男性のために尽くすもの」「女は男
性の欲望を満たすための存在」といつ
た前提がそれを薄めていく。

（ううっ、変身ヒロインとして、女と
しての使命ですもの……日夜頑張っ
ておられる男性職員の方々のためなら
このくらいの公開オナニーなど……）

でも……変、ですわ……ああつダメつ、
気持ちいいつ、おまんこ気持ちいいで
すのおお！ イクつ、イクつ、もうイ
キそうですわ……）

「お？ イキそうだなあ？ イくとき
はちゃんと男性様に許可を取らないと
いけないよな？」

「そうそう、ちゃんと『申し訳ござい
ません、まんこアクメ許可ください』
って下品におねだりしないとな」

絶頂が近いことを悟った三人はニヤ
ニヤ笑いながら、自慰快楽に翻弄され
るシエルレーヌに命じる。

混乱しながらも肉体への快楽の波を
抑えきれない金髪ヒロインは、それに
流されるまま彼らへ最低の絶頂懇願を
してしまう。

「おっ、ほおっ、おねがい、お願いで
すわああ！ イキたい、まんこイキた
いんですのおお！ イかせてっ、この
淫乱ヒロインのシエルレーヌにまんこ
アクメ許可くださいませえええ！」

「ははは、しょうがねえドスケベヒロ
インだなあ？ いいぜ、俺らの前で派
手にイってみろよ」

そして、寛大な男性様方からの許可
を得た淫乱公開オナニーヒロインは。
「んおおおイクイクイク、イっくう
うう！ 男性様にオナニー見てもらっ
てっ、イク許可もらって下品にまんこ
イクのぎもちいいい！ 見られながら
まんこイキしゅごひいいい！ ありが
とうございますっ、変態ヒロインの下
品なオナニー見てくださってあいがと

うごじやいましゅううう！」

犬のように舌を出しながらのけ反り、
淫蜜を噴き出しながら下半身をガクガ
クと痙攣させて雌絶頂を迎えるのだっ
た。

「やれやれ、男に見られていくとかど
うしようもない変態マゾ女だな」

「本当に淫乱なヒロインですわ貴女は。
恥ずかしくないのですか」

「女はみんなスケベな生き物だけど、
シエルレーヌはとりわけ下変態だよ」
（い……いつてしまいましたが、男性
が見ている前で……わたくしは、見ら
れて悦んではしまう淫乱マゾヒロインな
んですの……？）

絶頂の余韻に浸るシエルレーヌの心
に、さらなる変化が見られる。
昨日までは自分の身体を使っただけが、こ
こにきて自分自身も彼らの前で絶頂し
てしまった。

その甘く切ない快楽に伴い、彼らの
言葉責めもあつて自分が淫乱であるこ
とを認識させられていく。

「ほらお前がオナニーしてたせいで俺
のチンポが大変なことになっちゃった
じゃねえか、啞えろオラー」

「おお……おへえ……んむううっ！」
常に気高く男を見下していたはずの
彼女の公開オナニーを見せられた男た
ちが、興奮しないはずもなく。

劣情を催した戸越の勃起肉棒が、生
意気な言葉ばかり吐き高級なもののか
り食べる偉そうな口に奥までねじ込ま



邪教徒たちの
妖しき集い……

その嬌声が邪神様の
供物になるんだろ!?
もっと声を上げろ!

もう許してえ



いやあ!

あああ!



何だお前ら!?

な! なな!

!?

そこまで!
異教徒共!

はひい:
助かったあ…?



いけ! いけ!
一人も逃がすな!

観念なさい！
聖都の秩序乱す
邪教徒め！

凛々しいからこそ
催眠映えとロイン！

げえ！あいつは
邪教徒討伐隊長の
メズエル！

催眠隊長

～魔獣胎児を宿す場所～

漫画
COMIC

りせい
李星

抵抗は無駄です！
大人しく捕縛
されなさい！

いや！
ばれるわけが！

ばかな！
この事は知られて
いないはず！





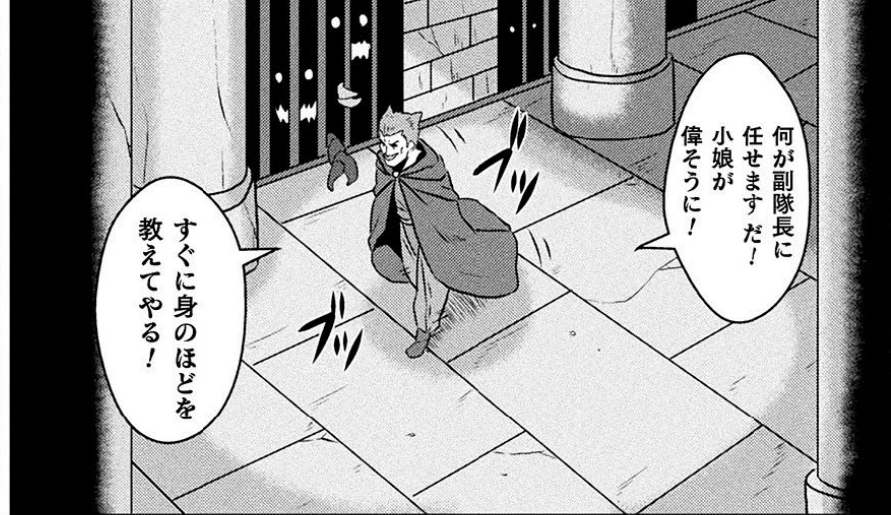


次期隊長様

スウ

む!

ええそうです
すぐにね



すぐに身のほどを
教えてやる!

何が副隊長に
任せますだ!
小娘が
偉そうに!



ほほう

さすが噂通り
腕は確かな
ようだな

プリン



手管通り上手く
いきましたよ



副隊長も
今回の極秘任務を
聞いてきたのか?

元々が
馬鹿正直な
女だからな

ククク
エロい体
しやがって



おお!?
副隊長!

催眠への
抵抗もほとんど
なかったし

ついでに邪教徒に依わる
成長型の淫紋もしっかり
根付かせておいたわ



ふふ！まさか
初めての相手が
発情期の魔獣とはな

催眠状態の隊長なら
苦にはなりませんわ
むしろ激しく
愛を感じるかと



これで私達
異教徒への
お目こぼしは…

心配するな
俺が「隊長」になれば
やりたい放題だ



ふふ！
任務協力者が
いっぱいだな！

奴らの異常性を
理解する為に！



くくく！愛かなるほど
一晚愛されることで
隊長殿にはしつかりと

『異教徒共の
儀式を体験し理解する』
任務を全うして
もらわないとな



獣のチンポに
囲まれても笑顔とは
さすが隊長ですなw

くくく！

み…皆凄く
大きいのだな

さあ！おうちと
始めなさい！
『特殊任務』を

魔獣に孕まされて
異教徒の快楽を
理解する為に!!!

ハァ

!?

全部
貴方のものよ

ズウッ

ウフフ
遠慮はいらないわ

ふうっん

クパッ

言葉も通じない
猿や虫に種付け場所が
分かるようにねえ!

あはは！良いわよ！
そのジユクジユクの
発情マンコを広げて
オスにアピールしなさい

ふああ！
何！おっぱいが急に
張り出してきた!?

ビキ

ビキ

涎みたいに
お汁でちやつてる!?

ヒョー

トーン

ひうう！
オマンコも勝手に
クパクパして



こ…これで
良いのかしら？
初めてでよく
分からない…けど

恐れずに
受け入れなさい！
汚らしい魔獣の
チンポをね！

拒んではダメよ
これは『任務』なのよ

ふぐう!?

つぷ!?

く…臭っ!!



ちよ…太すぎ！
そんな大きいの
本当に入るの!?

待って！
いきなり!?

しっかり子宮奥に
種付けして
もらいなさい

ふんぎいい!

おおお！
子宮オチンポで
ぶん殴られてるう！

ぐひい！一番奥まで
ビキビキ広げながら
突っ込んできてるうう



んぎぎい！
ま…待って！
腰早くなって！

ウヒ！
ウホホッ！

くはは！
その猿も隊長のマンコ
気に入ったみたいだな

まあ！ほんと
あんなに必死に
決り込んでるわ

叩きつけるみたいに
強くなって
パンパン音があ！

あ…あああ

オチンポ太くなって
根元からぶくうって

さあ射精みたいよ！
しっかりと異教徒の
快楽を味わって
理解しなさい

子宮に
直接うう！！

さあ！猿精子
しっかり子宮で
飲み込みなさい！

ウッキイイ！！

ふふふふ！！

ふああああ！！
いっぱい入ってきてるう

フリフリフリフリフリが
私のお腹に入ってきて
いっぱいになってるう！！

ああああ！
熱い！あついのが！



気高く麗しき戦乙女を
催眠でメス豚に墮とす！
醜く最下層なオスのチンポにメロメロ♥

勇壮なる正義の銀翼

アルジャンテエール

無様な常識改変催眠の果て

小説／や かたそう けい 屋形宗慶
NOVEL
挿絵／ねいさん ねいさん
ILLUSTRATION

その人々は始めに本物の超能力者
超人とネットで騒がれ、そしてTVシ
ョーで世代を問わず話題が広がった。

彼らは、まさに超人と呼ぶにふさわ
しい身体能力と、人智を超えたさまざ
まな超常能力「アビリティ」を発現し、
徐々にその認知数は増えていく。

やがて彼らは常人「ミディオクリテ
ィ」と区別されて、超人「トランセン
デント」と呼ばれるようになった。

彼ら超常能力者たちには、時の政
府によって様々な人権的制約が課され、
一定の監視体制が敷かれた。これに反
発し、能力濫用による政府への反抗や
犯罪に走るものは「ヒール」と呼ばれ
るようになる。

この、ヒールに対する抑止力。対抗
する者として能力を用い、市民と社会
を守る者は政府により「ヒーロー」と
呼称されるようになった――

「ふむ……戦闘力皆無のコンソ泥のため
に、私に出動要請がされるとはな」

市警からの出動要請とともに送られ
てきたヒールの情報を目にして、長い
黒髪の美女は肩を凍める。

すらりとした長身は、平均的な男性
よりも高い。その長身ゆえにすらりと
して見えているが、胸や臀部、特に胸
の張り出しは特筆するほど大きく、丈
の長い白のワンピースに浮かぶ女体の
曲線は豊かだ。

「とはいえ、これも悪を挫く正義の務
め。たとえコンソ泥といえど……」

黒曜石のように黒く艶やかな光沢を
放つ美しい長髪が、しやうりと揺れた。
顔立ちは端正で、目鼻立ちははつきり
として凛々しい。ヒーローとして低か
らぬ名声と人気があるが、ファンに女
性が多いというのもうなずける。

「私が出るからには、確実に悪を潰す
……【変身】！」

銀の閃光が彼女を飲む。カメラのフ
ラッシュが焚かれたほどの瞬間で、そ
れまで白いワンピースを身に着けてい
た彼女の姿は一変している。

肌も露わな戦闘装束。銀の翼を背に
持つ、天使か戦乙女といった出で立ち。
ヒーロー【銀色の翼】として名の通
った彼女は、名前の由来ともなってい
る銀の翼を羽ばたかせ、完全環境都市
内の狭い空に飛び立つ。

アルジャンテエールが捜索と捕縛を
要請された対象は、詳細不明のヒール。
ヒールとはいえせいぜい窃盗や暴行
を働く程度ではあったが、そのヒール
のアビリティが全くわからないという
こともあり、市警は万全を期してヒー
ローへの出動を要請したのであった。

市警は既に当該ヒールの出没地域を
絞り込んでおり、彼女が標的を見つけ
るのにそれほど時間を要さなかった。

厳格な彼女は敵に抵抗を許さない。
最初は抵抗し、まるで歯が立たない
とみるや逃走するヒール。足止めに攻
撃を受けても逃走をやめないヒールに、
彼女は無慈悲な攻撃を繰り返していた。

それはもはや一方的な暴行になつて
いた。手加減は感じられず、死なば死
ねと言わんばかりであった。

「そろそろ大人しくしないか？ 私も
暇ではないのでな」

芯がありよく通る声に別段の感情、
慈悲も憤怒もなく、彼女は発見したヒ
ールを無表情に槍で殴打する。

「ま、待つ、待つでぐれえ！ わがつ
だ、殺さねえでぐれええ！」
槍が回され、遠心力を乗せた打撃を
受けて流血したヒール――ノティー
ゴプリンが、銀色のヒーローの前に土
下座し、悲鳴含みで助けを乞う。ギョ
ロリとした目からボロボロと涙を流し、
アルジャンテエールの足に縋り付いた。

「ふむ……観念したか？」
土下座して地を這い、自分の足に纏
わり付くノティーゴプリンを、汚物
を見るような目で足蹴にする。

「そ、そうだ、大人しく掴まるからよ
う、最後に一つだけ頼みを聞いてくれ
え……このとおり、このとおり……」
餓鬼を思わせる容姿のヒールが地に
伏し、銀色のヒーローを拝んで哀願す
る様は、まさに地獄の亡者が仏に縋る
かのような光景であった。

「いいだろう……言ってみるがいい」
同じヒーローやミディオクリティに
は礼儀を欠くことのない彼女ではあつ
た。だが、ことヒールに対しては尊大
で高慢、戦闘となれば無慈悲であつた。

「ありがてえ……ありがてえ……感謝
します、お美しいヒーロー様……」

ノティーゴプリンがアルジャンテ
エールに向けて手を合わせながら、ボ
ロボロと涙をこぼす瞳で見上げる。ヒ
ールに対して慈悲はない彼女も、憐憫
を覚えるほどの号泣ぶりであった。

「それでなんなの、最後の頼みとは、
時間を取らせるなら、もう聞かんぞ」
「時間を取らせるなんてとんでもねえ
……もう済みましたんで、ええ……」
涙を腕で拭いながら、小汚い恰好の
ヒールはそう答える。

「なに？ 頼み事など口にしていない
だろう。私を愚弄するつもりか？」
「滅相もない！ ああ、そうそう、最
後の頼みね……最後の頼みは……」

土下座姿勢だったノティーゴプリ
ンがゆらりと立ち上がる。そして、背
にしていたボロボロのザックを下ろし、
やはりボロボロの貫頭衣を脱ぎ捨てた。
体には殴打されて出来た内出血や生傷
が至る所に見え、滲む血が生々しい。

「最後の決闘だあ！ テメエのマンコ
とオレ様のチンポで勝負だ売女あ!!」
氣勢を上げ、骨張って貧相な松葉色
の体を晒し、体格相応の短小な男根を
見せ付ける。

「勝負だど？」
わなわなとアルジャンテエールの肩
が震える。そして、長槍の石突きで踊
り場の強固な足場をガツンと打った。

「アッハハハハッ！ 正々堂々挑まれ
ては受けて立つしかないなッ！」
手にした長槍が、銀色に輝く光の粒
子となつて霧散する。明確な攻撃面の

アビリティである槍を手放し、彼女は物理的な攻撃意思がないことを示した。「私は誇り高き『銀色の翼』! 年齢二三歳にして恋愛経験無く、処女ツ!! この処女マンコ、セックス勝負のためとあらば喜んで使うツ!!」

ガバアツと大きく膝を開き、下品にガニ股を広げる。そして戦闘装束の股布をずらし、ワレメを両手で目一杯広げて艶めかしい桃色粘膜を曝け出した。陰毛も綺麗に手入れされた淫部は清潔感があり、自ら処女であることを公言した性器の陰唇や膣口は新鮮なピンク色をしていた。

「こいつぁ傑作だ! ヒーローがヒール相手に股おつびろげて、セックス勝負う? 恥つてもんはねえのかよ恥つてもんはよ! ぎゃつははははははは!!」

彼女は既に、ノーティーゴブリンのアビリティ——催眠の術中にあつた。相手の油断、狼狽、同調などに乗じて、相手の精神に介入する限定的なテレパス。強い意志や、警戒をされていてはまったく効果を発揮しない限定的で影響力を及ぼしにくい能力であつた。だが、あろうにアルジャンテエールがヒールを侮る慢心と、ノーティーゴブリンが見せた土下座と泣き落としによる警戒心の低下。さらには最後の頼みを聞くという受け入れの心理状態により、まったく無防備になつていた彼女には相当深く、強力に催眠が効果を発揮していた。

「恥だど!? 誰のオチンポでもハメま

くり射精させ搾りつくことはヒーローの誉れ! 嘲笑うことは許さん!」

「ぶつ……ああ、そいつはすまなかつたなあ。んじゃあ正々堂々やってやつから、こいつをどうにかしてくれや」

餓鬼の如き容姿のヒールは、自らの股間にぶら下がる短小包茎を指で指し示す。それは勃起もせず、包皮に包まれたまま垂れ下がっていた。

「むつ、貴様……粗チンの上に勃起もしないでどうやってセックスをするつもりだ! さつさと勃起しろ!」

アルジャンテエールはツカツカとヒールに歩み寄ると、その足下にひざまずく。そして、彼の小汚い股間に手を伸ばして包茎を指でつまみ、ゆつくりと指を動かして、男根に刺激を加える。

「おつほほお、さすが銀翼のヒーロー様、手コキの手つきもなかなか悪くねえ。それにこの、いい匂いを嗅ぎながらされるのはいい気分だぜえ」

貧弱なヒールは、ひざまずいた美女の長い髪から立ち上る芳香をクンクンと嗅ぎながら、下卑た笑いを浮かべる。

「うるさいぞヒール。さつさと勃起しなかつた無礼者め」

「それじゃあよお、しゃぶつてくれや。そうすりゃすぐ勃起すつからよお」

「ヒール風情に注文を付けられるのは心外だが……とはいえ勃起しないことにはセックス出来んのだからな」

アルジャンテエールの中では、ヒールに挑まれるセックスは崇高な決闘と認識されていた。ヒーローとして、挑

まれた決闘を拒む理由はなく、この名誉ある戦いのためであれば大抵のことは受け入れられるような常識の改変がなされてしまつていた。

「なら牝豚らしく四つん這いになりな。メエの薄らデカい図体じゃ、体を屈めてしゃぶるのも大変だろうからな」

「命令されるのは気に入らんが……まあ、いいだろう」

まともな精神状態であれば、決してそのような受諾はありえないことであつた。しかし、もはや常識もプライドの基準も変わり果てた彼女には、矮小で薄汚い異形の者が言う言葉にも別段の違和感を感じられていなかった。

アルジャンテエールはヒールの股間の高さに合わせるため、ボディラインも美しい長身を四つん這いにする。

「そら、こいつがメエを小娘から立派なオンナにしてくれるチンポだぞ。しっかり御奉仕しとけよ」

「うっ……!! このニオイ……ッ」

ノーティーゴブリンは四つん這いの彼女の鼻先に向けて男根を突き付けた。嗅覚を刺激するニオイに、アルジャンテエールは目を見開く。

「なんて素晴らしい芳香う……♥」

アコロジョーの地下、その中でも更にマンホール下などに隠れ住む矮小脆弱なヒールだ。行水すらろくにせず、悪臭を放っている。しかしアルジャンテエールには、それが熟した果実の甘い香りのように感じられていた。

「ふえっへへ、そうかい、いい匂いか

い。水浴びしたのももう一週間は前なんだがなあ? けっけつけ」

アルジャンテエールが感覚器まで催眠により狂っていることを把握し、下劣なヒールは下卑た笑いを浮かべる。

「ともかく、貴様が勃起しないことにはセックス出来んからな……」

「くけけ。なあに、しゃぶつてくれりや、すぐ勃起すらあ」

「しゃぶる……フェラチオというやつだな……これもヒーローの務めか」

アルジャンテエールはノーティーゴブリンの包茎を迎え入れるように口を開き、舌を伸ばした。そして、包皮を被つてまだ半勃起にも満たないそれを舌でガイドするようにして咥え込んだ。

「おほっ! 口の中あつたけえ。こりや血行が良くなつて勃起が捗るぜ」

「んぢゅつ、むぢゅつ、むぢゅつ、むぢゅつ、むぢゅつ、んぢゅるう……」

短小包茎を頬張り、唇でしごくことで刺激していく。ヒールの言うとおり、口腔内の体温が血の巡りを良くするの、ノーティーゴブリンのペニスはムクムクと勃起していった。

「おかげでもうフル勃起だぜ。ヒヒヒ。ヒーロー様はお口もお上手だなあ?」

「フン、世辞はいらん。初めてのフェラチオでも、この程度は出来る」

「しかし、勃起させただけでやりきつたような顔してるのが所詮処女だな」

「なんだど!? 勃起しておいて何が不満だというのだ!?」

「チンポの皮を剥いてみるよ」

「皮だと……？ これ、か……」

「餓鬼じみたヒールが枯れ枝のような指先で指し示すベニス。勃起こそしたはまだ皮に包まれたままのそれを、アルジャンテエールは指で摘まんで付け根に向けて剥き下ろした。」

「ほれみる、チンカスがそのままじゃねえか。ヒーローがチンポしゃぶっておいで、チンカスを掃除せず残したままなんてのは恥だな、恥」

「ぐっ……!! 気付かなかったただけだ！ 今残らず掃除にしてやる！」

恥という言葉に動揺した様子を見せながら、催眠に落ちきった彼女は一度は口から離れたヒールのベニスに再度口を寄せる。

べろおっ、と広げた舌を、包皮が剥けて露出した恥垢まみれの亀頭に押し付ける。そして、削ぎ落とすようにして舐め取った。

「くっ、ほおう……ッ♥ 匂いも良いが、このチンカスというのは味もたまらない……ッ♥」

ゾクゾクツと背筋を震わせ、アルジャンテエールは二度三度と繰り返して舌をベニスに擦り付ける。

「おおっふおおっ！ いいぜ牝豚ア、いい舌使いしてるぜえ！」

亀頭のカリ溝を、尖らせた舌先で穿るように舐めて恥垢を掻き出す。そうして丹念に、丹念に。亀頭はもちろんベニス全体を舐め上げていく。

「お、おお……いけねえ、出ちまう。おい牝豚、チンポ啜えろ。一番濃いヤ

ツを飲ませてやるぜえ」

「ふっ、もう射精するのか……まったく他愛ない。これではセックスする前に勝負は見えたようなものだ！」

セックスという名の決闘の勝ちを確信したように言い放ちながら、彼女は恥垢がすっかり舐め取られて綺麗になったベニスをがっばりと啜え込んだ。

「ずぢゅるっ♥ ずびびっ♥ ずぢゅるっ♥ ずぢゅるっ♥ ずびびっ♥ ずぢゅるっ♥ ずぢゅるっ♥ ずぢゅるっ♥ ずぢゅるっ♥ ずぢゅるっ♥」

勝利の確信もあつてか、アルジャンテエールは勢い良く短小ベニスをしゃぶり立てる。

「むっおふおお……ッ！ 出るぞッ、しつかり吸い出して飲めよッ！」

アルジャンテエールの頭をがっちり両手で掴み、ノーティーゴブリンが腰を突き出す。

「おっぽほおッ!!」

陰毛に鼻が埋まるほど突き入れられると、亀頭の先端が咽頭に達した。その瞬間、思わず嘔吐したアルジャンテエールの喉に、黄ばんだ汚濁が叩き付けられた。

ぶびっぶびりゅっぶびりゅッ!! 勢いよく噴出する、夥しい量のザーメン。飲み下すベニスよりも早く噴き出すそれは、アルジャンテエールの頬をブクツと膨らませる。

「おらおら、吸い出して飲めつつたろうが！」

「んぐぼっ！ むぢゅるぶっ！ づびびッ！ ずびっぢゅるるるるるッ！

ごつくごつくつぎゅっ……♥」

ヒールに言われるがまま、アルジャンテエールはベニスをバキュームする。射精されるよりも早く吸い出し、喉を鳴らして汚濁を飲み下す。

「ふおお……吸い出されてドクドク出るぜえ……それにしてもいい飲みっぷりだなあ？ お味はどうだあ？」

「ちゅうっ、ちゅうううっ♥ づびびびっ、ちゅばっ、ちゅうううっ♥」

答えるまでもないといったように、アルジャンテエールは射精の勢いの衰えた短小男根をしゃぶり、丹念に残り汁を吸い出していた。

「質問に答えるためにチンポから口を離すのも惜しいってかあ？」

「つぶふ……黙れヒール。まったく、なんて量の精液だ……美味だから飲み干せたが、つぶ、げえつぶふうッ♥」

射精が完全に止まるまで吸い出して飲み干したヒーローは、言葉の途中で込み上げてきたゲップをたまらず大きく吐いた。

「これで交尾支度は整っただろう。そろそろ決着をつけるぞ！」

そういうと、アルジャンテエールは四つん這いから反転して仰向けになる。そしてガバツと脚を広げてセルフまんぐり返しの姿勢を取ると、両手で改めて陰唇を大きく広げた。すると、ねっ

とりと糸を引く肉汁がサーモンピンクのワレメから溢れ、トロトロと会陰を経てアナル、そして尻へと流れ落ちた。

滴る汁が湧き出す源は牝特有の肉穴。

ワレメを広げられ、その姿を晒した処女膜はヌラヌラとした光沢を放つ。

「むほっほっほ。そうだなあ、そろそろ勝負してやるか。覚悟しろよお！」

と、矮小な体躯のノーティーゴブリンが、丹念なフェラチオを受けてすっかり綺麗になったベニスを見せ付けるように腰を反らせて見せた。

「ふん……チンポをしゃぶってチンカスと精液を飲み込み、疼いてしかたないこのドスケベ処女マンコに、さっさとそのチンポをハメるがいい！」

催眠状態にあるアルジャンテエールの常軌を逸した瞳が、さきほどまで自分がしゃぶっていた男根を見据える。

おそらくは無意識に、カクカクと腰が動く。厚みのある尻がぶるぶると揺れ、ワレメから滴る汁が増えていた。

「言われるまでもねえ。ハメられてから吠え面かくなよお？」

深い催眠状態に陥れたヒーローを見下ろし、にたり、と下卑た顔を見せる。

「くるがいい！ 私はもう乳首一擦りでもイキそうなほど昂っているぞ！」

「けっけ、勇ましくて勃起がますます硬くなつちまうぜ」

その体格差ゆえ、脚を広げたアルジャンテエールの尻の上に、ノーティーゴブリンが貧相な体を乗せるように跨がる形になる。そうして彼女の処女膜に真上から狙いを定めた。

「そうら、いくぜえ。処女膜におさらばしなあ！」

ペニスの先端が、剥き出しの処女膜にビトツと接触した。そのまま、餓鬼のような貧相な体ごと落下するように体重を掛けてペニスを突き刺す。

みぢゅみぢゅちゅイッ!

「うっ、くうう……ッ!!」

催眠下にあり、ヒールのペニスが短小であったこともあってか、彼女に苦痛はほとんどなかった。

「入った、な……? よし、後は徹底的に締め付けて、ぐうの音も出ないほどザーメンを搾り取ってやるぞ!」

セックスという、誇りある行為で、相手を射精させ尽くし萎えさせる。武勲を得るために、アルジャンテエールはアナルにギュッと力を込めて腔を引き締めた。

「くおっ! 処女マンコがチンポに食らい付いてきやがるぜえ……よおし、負けてられねえな!」

パンパンパンパンパンパン!!
上から下へ、杭を打つような腰使いでアルジャンテエールを犯す。

「んんふうううッ♥ マンコにチンポがヌルヌル擦れて気持ちいいだとお♥これが、オマンコ♥かああッ♥」

すでにして牝の肉汁でトロトロの穴は、ヒールの男根が入りするにも滑らかな潤滑を与える。催眠状態とはいえ、初めてのセックスであることにはかわらないアルジャンテエールにとって、その刺激は未知の快感であった。

「いいマンコしてるぜヒーローさんよお! ヒーローなんぞやめて娼婦にで

もなれよお、稼げるぜえ?」

「ふざけるな! 娼婦など……金のためにオマンコするなどありえん!」

クワツと眼光鋭く目を見開き、アルジャンテエールは声をあげた。

「オマンコはいいつでもどこでも誰とでも、無償でやる尊いものだ! 誰の子種でも子宮に受け入れ、ヒーロー卵に受精し、孕んでこそではないか!!」

力強く語るアルジャンテエールの力み具合を現すように、ノーティーゴブリンのペニスを締める膣圧がギュンギユンと強まる。

「それじゃあオレの子種でガキがデキちまってもいいってこつたなあ?」

「無論だ! 誰の子種だろうと、妊娠することは至上の誉れ。たとえヒールでも、その子種に罪はないからな」

「ぎゃーははは!! すばらしいぜえヒーロー様! おめえ最高だよ、気に入ったから催眠重掛けしてやらあ」

「催眠が貴様のアビリティか。馬鹿なことを……私に貴様ごときのアビリティなど通用するもの、かあッ♥」

ビクビクビクッ、とヒーローの女体が激しく痙攣する。そして、のたうつように大きくくねった。

「んおひいッ!? ンおおおッ♥ぎもぢいッ♥ ぎもぢいッ♥」

「適当に感度を上げてやったが、ちよいと上がり過ぎちまったかあ?」

「お、お、おによれええッ♥ 神聖な、おまんこ勝負、にい、このようは無粋な真似をおほおおおッ♥」

「おほおおイクイクいっくうッ♥」

目にもわかるほどの絶頂。アルジャンテエールは女体を激しく戦慄させて悶える。クールビューティーといったような端正な美貌が、あられもなく快感に蕩けきっていた。

「おらおらッ! オマンコだぞ、勝負だぞ。気い張ってマンコ締めろ!」ぬぶぢゅッ! ぶぢゅぼッ! ぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぼッ!

体格で上回るアルジャンテエールの下半身にしがみつこうにしながら、ヒールは腰を打ち付ける。短小なペニスが掻き回す牝肉穴が、たつぷりと含んだ肉汁で激しい粘着音を立てていた。

「ンおあはあああッ♥ またイグイグイグッ♥ 見るがいイッ♥ イキまくっている私をほおおッ♥」

今の彼女にとって、絶頂することは誇らしいことであった。絶頂すること、男を射精させることも、名譽なこととして認識されていた。

「そーら、そーら、マンコの奥をほじってやるぞお? どうだオラッ!」

「おほおッ♥ 短小チンポのくせにそんな奥までッ♥ 生意気なッ♥ みつちり締めて返り討ちにしてやるッ♥」

みちみちと力強く引き締まる膣肉。今の彼女にとって、そのペニスが何者のものであるかは重要ではなかった。

「ひえッへッへッ、まだまだだぜえ……じいっくり楽しまねえとなあ」

「くおほッ♥ チンポがえぐってくるッ♥ 子宮の入り口ぐりぐりぐりッ♥」

「イクッまたイクッまたイグッ♥」

ノーティーゴブリンの亀頭が子宮頸部をこね回すように動く。ただならぬ性感度になっている彼女には、その刺激はまるで快感の神経を直接撫でられているようなものだ。

「ぎひひ! イイ顔しやがてよお! そんなにイイか、オレのチンポで処女マンコほじられてイイかあん?」

「イイに決まっているッ♥ マンコはッ、セックスはあッ、ぎもぢいッ♥ ンおほおッまたイクイクイグッ♥」

もはや絶え間ないというほど立て続けのアクメ。性感のピークが高止まりし続け、アルジャンテエールに快感を浴びせ続けていた。

「さすがドスケベヒーロー様だあ! こいつはかなわねえ、こんな大変態マンコには勝てねえや、ゲヒヒッ!」

深くペニスをハメ込んだ股間を密着させ、腰を揺する。

「当然ッ♥ 私は誇り高き銀翼の、イクッ♥ イクッ、いくしゃおとめッ♥ 私のマンコはいかなるチンポの子種も搾り尽くしゅうッ♥」

腰を揺すってくるノーティーゴブリンに対して、反撃するように腰をくねらせ膣肉をギュンと締め上げ、顫動させるアルジャンテエール。

「げひひひッ! こりやあもうだめだあ、降参だあ、降参するぜアルなんとかさんよお、降参射精しまうぜ!」

「他愛ない♥ さあ、ヒーローマンコに屈して射精するがいいインッ♥」



呪胎淫夢 じゆたいいんむ

～ 姫騎士、怪胎 ～

小説 あお いむら まさ 蒼井村正
NOVEL

挿絵 ILLUSTRATION PINTA



少女は毎夜悪夢と快樂に苛まれ、
身体は母へと変化を遂げる!!

朝の陽光が射し込む城の中庭には、武装した騎士達が百数十人、整然と待機していた。

「我が精銳の騎士諸君、これより、辺境を脅かしている、森の魔女討伐に出発する！」

凛とした声を石畳と城壁に響かせ、兵士達に呼びかけたのは、戦装束とブレイトメイルに身を包んだ、うら若き女性であった。

年の頃は十代後半ぐらいであろうか？ 金髪を少し古風な形に結い上げ、まだ少女らしいあどけなさを残しながらも、キリッと引き締まった美貌が麗しい彼女は、この国の姫で、名を、デイーリア・デイトリックと言う。

身長はさほど高くないのだが、発している覇気が、その身を実際よりも大きく見せている。

病に伏せた父王を補佐する摂政役についてから一年あまり、実質的に国政を切り盛りしている彼女のことを、臣民達は姫騎士様と呼んで敬愛していた。

「民からの訴状によると、魔女は邪悪な術や、奇怪な使い魔を用いて、辺境地域の民達を苦しめているらしい。これを討ち、人々の安寧を取り戻すのは、騎士の責務である！」

朗々と語る姫騎士の声を聞く騎士達の表情に、不安や恐れの色は見られない。

ここ数ヶ月の間に、立て続けに発生した怪異、妖魔を、勇猛果敢なデイー

リア姫とともに、ことごとく討ち果たしてきた実績が、騎士達に自信と誇りを植えつけていた。

「此度も、我が王家に伝わる聖剣の加護が我らを守り、民に仇なす邪悪を討ち倒すだろう！」

力強く宣言した姫騎士は、シュリンツ！と涼やかな鞘抜き之音を立てて、腰に帯びていた剣を抜き放ち、頭上に掲げる。

澄みきった湖の水面のような、見事な鏡面仕上げに磨き上げられた刀身が、早朝の陽光にまばゆくきらめいた。

姫騎士の手にある剣は、王家に代々伝えられた破魔の聖剣である。

ここ数十年は、信仰の対象として礼拝堂に祀られていたものだが、最近立て続けに発生した怪異騒ぎを鎮めるため、デイーリア姫の佩刀として、その封を解かれたのだ。

「いざ、出陣ッ！」

「オオオオオウウッ！」
地鳴りのように呼応する精銳騎士達の目は、勇気と闘志、そして姫への敬愛で輝いている。

姫騎士に率いられた魔女討伐部隊は、馬蹄の響きを残しながら、辺境の森に向かって出撃して行った。

「……姫、ご武運をお祈りしておりますぞ、心から……グフフフッ！」
城の塔の上から、姫騎士率いる騎士の

一団が遠ざかってゆく姿を見ていた男が、耳障りな含み笑いを漏らした。

不健康に肥満した体躯と、ガマガエルを連想させる悪相の中年男性である。彼はこの国の大臣を務める男であったが、王宮内の評判は決して良くない。

「狡知に長けた、奸臣すれすれの危険人物」という悪評が定着しているが、知男に優れたデイーリア姫は、くせ者である彼を上手く御し、その才を外交戦略や反社会性力の一掃に活用していた。

「……デイーリア姫、ただ今出陣しましたぞ」
振り向いた大臣は、室内の何者かに向かって告げる。

「良からう……全ては手はず通りに……」
甲高い声で男に応えたのは、人間ではなかった。

応接用のソファアールの上にいるのは、ドブネズミぐらいの大きさの生き物だが、その身体はネズミそっくりなのに、細長い手足はトカゲのように鱗に包まれている、背中からは、コウモリの翼のようなものが生えている。

その顔は、魚とも鳥ともつかぬ不気味な造形でありながら、人の言葉を理解し、話しているのだ。

それは、魔女や妖術師が生み出し、使役する、使い魔の一種であった。

「しかし、本当にいいのですな？ 転生のためとはいえ、アナタは一度、姫に討たれて死ぬのですぞ？」

使い魔に向かい、大臣は問いかける。「そのために、幾つもの策を用意して、

姫の佩刀であるあの聖剣を穢してきたのだ。今ならば、我が魂を剣に憑依させることも可能であろうよ……」

魔女の声で、使い魔は応じる。「さすがは森の魔女、と言ったところですね。策が成就したあかつきには、ワタシとの約定、お忘れなきように」

ガマガエルに似た顔に、邪悪な笑みを浮かべ、大臣は念を押す。「わかつておる。お主こそ、しくじるなよ？ 期限までに姫が孕まねば、我が魂も霧散してしまうのだから」

「お任せください。あの聖物な姫騎士めを、必ずや孕ませてみせよう！」

使い魔に向かって自信満々に言い放った大臣の笑みがいつそう邪悪さを増し、細められた目の奥に、淫蕩な光がキラリ、ときらめいた。

「間もなく魔女の居城だ。各自、警戒を！」
王城を出発してから二日、国境近くの辺境地帯に到着した姫騎士一行は、魔女の領域である森へと侵入した。

うっそうと茂る森林地帯は、数刻も進まぬうちに、異様な様相を帯び始める。

木々の幹や枝は不気味に振れ、鳥の声は絶え、足元は地面から滲み出す泥水でぬかるんで、騎馬の脚を鈍らせた。

苦勞しながら進むこと、さらに数刻、廃墟のようにも見える、魔女の居城が見えてきた。

石造りの城全体が、ねじ曲がった

木々と蔭に覆われ、それ自体が不気味で巨大な生き物のような異様な姿だ。

「むっ！ お出迎えのようですよ」
副官を務める壮年の騎士が、緊張した声を上げる。

石垣の穴や泥の中から姿を現したのは、ゾンビ化した獣や、何種類もの動物の特徴を併せ持った異形の生き物達。「恐れることはない！ 正義は我らに有り！ 連携を絶やすな！」

異形との戦いに慣れている騎士達は、各自の死角をカバーし合う陣形を取り、魔女の使い魔達との戦闘に突入した。

「フンッ！ ハッ！ やあッ！」

ディールリア姫は、聖剣を振るい、群がる異形どもを次々に斬り伏せてゆく。剣術指南役からも、百年に一人の逸材！ と太鼓判を押されるほどの剣士でもある姫騎士は、騎士達の援護を受けつつ、たちまちのうちに使い魔の包围を抜け、最奥部の大広間に魔女を追いつめていた。

「姫騎士ディールリア……噂以上の凄腕剣士よ。だが、齢三百年を生きたワタシを、容易く討てると思うな！」

鋭深く、やせ細った見た目からは想像もできぬ強烈な気迫を放ちつつ、魔女は両手を突き出す。

バリバリバリバリッ！
空間を引き裂くような音を立てて、魔女の指先から赤黒い稲妻のようなものが放たれた。

「回避ッ！」

騎士達に号令しつつ、素早く飛び退

く騎士姫。

稲妻の軌道上にあったテールブルが粉みじんに砕け散り、石畳がひび割れる。「なんのっ！ たああアッ！」

魔女の両手から放たれる赤黒い稲妻を、姫騎士の握る聖剣が真っ向から受け止めた。

「くっ！ うううううッ！」

激流の河に踏み込んだような、圧倒的な圧力に、ディールリア姫は歯を食いしばって耐える。

聖剣の刃に弾かれた稲妻が天井や壁を引き裂き、破片を撒き散らすため、部下の騎士達は巻き添えを恐れて遠巻きに見守ることしかできない。

死と破壊の稲妻と、聖剣のせめぎ合いが数秒間続いたが、魔力が尽きたのか、放電の威力が急激に弱まる。

「勝機ッ！」

姫は疾風のごとき速度で一気に間合いを詰めた。

「魔女、成敗ッ！」

斬ッ！！

銀色の残像を残して一閃した聖剣の刃は、見事に魔女の首を宙に飛ばしていた。

魔女討伐の報に歓喜する辺境住民達から歓呼の声で見送られた姫騎士一行は、意気揚々と王都に凱旋した。

「姫様。此度の魔女討伐、誠におめでとうございます。姫様の勇名、王国のみならず、周辺諸国にまで響き渡っておりますぞ」

ガマガエルじみた顔に、精一杯の笑みを浮かべた大臣は、姫騎士をねぎらう。

「私の勇名など、どうでもいいけれど、最近、妙に魔物の活動が活発化していますね。その原因についての調査の進展状況は？」

甲冑を脱ぎ去り、ゆったりとしたデザインの平服に着替えたディールリア姫は、玉座に身を委ね、事務的な口調で大臣に問いかける。

平服になると、騎士装束の時の漂々しさは薄れるものの、麗さと気品が際立つ。

国政という重圧を負った直後は、いささかの気負いも感じられたが、怪異討伐で自信をつけた今は、女王の貴祿さえすでに漂わせ始めていた。

「はっ！ 調査は行っておりますが……これといった関連性は見つけれずにいる様子」

「そうですか。引き続き調査を続け、私に報告が密に上がるように手配しなさい」

命令を徹底し、大臣を下がらせたあとで、姫騎士ディールリアは、フウッ、と、疲れ気味の溜息を吐き出す。

（王宮内では、大臣は要注意の奸物という評価だけど、魔物の被害が拡大する前に、いち早く情報を得て報告してくるあたり、有能ではあるわ）

でも……と、勇名を馳せる姫騎士は胸中で続ける。

（このところ、立て続けに魔物討伐に

出兵したせいで、騎士達や私自身も疲労が蓄積しているのも事実。少し休養が必要かもしれないわね」

病に伏している父王の摂政として、国政を切り盛りしている姫は、誰も見ていないのをそっと確かめると、しなやかな肢体に溜まった凝りを解すために大きく背伸びした。

「んううううッ！」

肢体を伸び上げらせ、身体の芯から疲労感を搾り出すかのように身を反らした姫騎士は、心地良きげな呻きを漏らす。

民と国家を守るという重責を一步離れると、ディールリア姫もお年頃の一人の少女らしい一面を垣間見せるのだ。

「休めるうちに、早めに眠りにつくしましようか……」

姫は手元の呼び鈴を鳴らし、侍従の女官を呼んだ。

湯あみを終え、寝所に入った姫は、薄物一枚まとっただけの姿で、日課としている聖剣への祈りを捧げていた。

「……聖剣よ、此度も私と騎士達を守ってください、感謝いたします」

下着も着けず、薄衣のヴェール一枚まとっただけの姿で聖剣の前に跪いた姫騎士の肢体は、メリハリのきいた女らしい曲面で構成された見事なものであった。

豊かなバストは天に挑むかのようにツンと上を向いて突出し、ウエストは細くくびれ、ヒップは意外なほどの量

感を持つて前後左右に張り出している。

太腿はムツチリと肉付きが良いの、太いという印象を与えぬ伸びやかさで、しっかりと筋肉の張り詰めたふくらはぎから、細くくびれた足首へと続くラインには日々の鍛錬で鍛え上げた躍動感が漲っている。

（さすがは王家伝来の聖剣。今回も、何匹もの魔物を斬り、魔女の攻撃魔法を弾いたのに、傷付きも刃こぼれもせず、曇り一つ見られないわ……）

鏡のように澄みきった刀身に写る自分の顔を見つめ、姫は思う。

数十年、実戦から遠ざかっていた聖剣は、姫の佩刀として封を解かれて以来、ここ数ヶ月の間に、幾多の魔物の血や体液で汚されていた。

植物型妖魔の体液にまみれ、鋼鉄のように硬い大蛇の鱗ごと胴を真っ二つに斬り裂き、不死身と言われる人狼さえも、一刀両断で滅した。

今回も、魔女の赤黒い血糊がベツトリとこびりついた刀身を、姫自らの手で熱湯と薬草酒、そして塩を使つて洗い清め、香油を塗り込んで磨き上げたのだ。

（心なしか、刀身が少しだけ紫がかった見えるような……？ いえ、思い過ぎね、きつと……部屋の明かりのせいだわ）

就寝前、欠かさず行っている祈りを終えた姫が、剣を鞘に収めようとした瞬間。

鏡のように磨き抜かれた刀身が、ギ

ラリ！ とひととき強い光を放った。

「ウッ！」

一瞬、軽い目眩をおぼえてよろめいたディーリア姫は、床に手を突いて身体を支える。

目眩はすぐに去ったが、身体の奥の方にむず痒い揺らぎのような感覚が生じ、下腹の奥、普段はあまり意識していない子宮が、ズクンツ！ と疼く。

「ンツ……今のは……？ やはり疲れが溜まっているのかしらね……」

鞘に収めた聖剣を刀架に置いた姫は、まだ余韻の残る下腹をそとと撫でつつ、薄物一枚まとっただけの瑞々しい肢体をベッドに横たえる。

ここ数日の疲れが溜まっていたせいか、深い眠りがすぐに訪れた。

「はう……ンツ……んんんんツ！」

ディーリア姫は、悩ましげな呻きを漏らしつつ、ベッドの上でしなやかな肢体を振らせていた。

まるで、熱した泥の中を泳いでいるかのような妖しい火照りが若く瑞々しい姫騎士の肉体を包み込み、身体の内を疼かせている。

「ンンツ、ハアハアハア……」

形の良い顎のラインを、クンツと仰け反らせ、喘ぐディーリア姫。

呼吸のたびに緩やかに上下する豊乳の奥で、むず痒く切ない疼きが次第に高まってゆく。

同様の感触は、下腹の奥でも急激に強まっていて、これまで感じたことの

ない狂おしい切迫感で、姫騎士の肢体を振れさせた。

絹のシーツの上に投げ出された美脚が内股気味に閉じ合わされてモジモジと擦り合わされ、腹筋の凹凸をうつつすらと浮かべたスリムな腹部と、たわわに盛り上がったバストの谷間に、噴き出た汗粒が銀砂のようにきらめく。

（ああ……熱い……身体が……疼くツ！）

深い眠りに落ちていた意識がわずかに浮上し、微睡みの中で姫は悩ましげな火照りに苛まれていた。

部屋の温度は、少し肌寒さを感じるほどなのに、身体だけが妖しい熱気に包まれて火照り疼いてしまっている。

（私の身体……どうしてこんなに熱くなっているの？）

意識の半分はまだ眠りに落ちたまま、姫はしつとりと汗ばんだ自らの身体を、滑らかな指先で探るようにまさぐり始めていた。

薄物をはだけて剥き出しになったスリムな腹部に添えられた手をそとと滑らせると、柔肌の下に秘められた腹筋の凹凸が指先に心地良く感じられて、ついつい何度も往復して撫で回してしまふ。

形良く窪んだ臍穴に指先をそとと潜らせると、意外なほどの快感が湧き起こって、腹筋がキュツ、キュンツ、と波打つように反応した。

（身体撫でるの……くすぐったいけど、気持ち……いい……）

夢うつつの状態のまま、しなやかに鍛え上げられた自らの肢体をまさぐる指先は、しつとりと汗ばんだ乳房の谷間をそとと撫で上げ、弾力に富んだ肉の丘をゆつくりと登ってゆく。

（ああ……いけない。届いてしまう……）

羞恥心に囚われながらも、ズクゾクするような期待感の方が上回っていて、豊乳の曲面を這い上ってゆく指先を止められない。

「んは！ はンツ！」

頂点まで滑り上がった指先が、ふつくと盛り上がった乳輪をかすめ、乳首を、サワツ！ と掃くように撫でると、くすぐったさが変じた快感の波が豊かなバストの芯を貫いて、鼻にかかった甘い呻きが漏れてしまふ。

（私の……乳首……こんなにムズムズするなんて……）

妖しい衝動に囚われた姫騎士は、周囲の肌とは明らかに触り心地の違う乳頭部分を、滑らかな指先でクルクルと円を描くように撫で回す。

「んは！ ん……んふうう……」

何度か指の腹で撫で転がしているうちに、刺激に反応した乳首はムクムクと勃起し、コリツと生硬い尖りを際立たせて、指を押し返してきた。

（気持ち……いいッ！ 止められないッ！）

眠りの中で理性のブレーキが緩んでしまっている姫は、さらに淫らな行為をメリハリに富んだ肢体に繰り出す。

「ンンンッ! はふ……あ……はあ
あ……ッ!」

悩ましげな喘ぎを漏らしつつ、左手で乳房を揉み立て、勃起乳首を摘まんでクリクリと捻り上げながら、右手は下腹に向かってジリジリと滑ってゆく……いけないわ。はしたないッ!」

「はうんっ!」

柔らかな恥毛に縁取られた恥丘を愛おしむようにまさぐった指先が、ふつくと盛り上がった秘部を包むように覆うと、姫の身体が、ギクッ! と緊張した。

(ダメ! ダメッ! 秘所を弄るなんて、そんな……いけないわ!)

抗う気持ちとは裏腹に、欲情の炎に突き動かされた指は、恥戯を開始してしまう。

「んっんっんっんっ……はう……んはんっ!」

ブルブルとした感觸の秘部を覆った指を小刻みに屈伸させて性器全体を揉み立てながら、姫は切れ切れの熱い息を吐き出し、伸びやかな肢体をくねらせる。

(奥ッ……秘所の奥が、熱いッ!)

性器を包み込んだ中指が、クイッ! と曲げられ、柔らかなワレメに沈み込んでゆくと、指の腹が、汗よりも濃く熱い潤みに濡れた。

(ああ……はしたない……こんなに濡

れてしまうなんて……でも、止められないッ!)

湧き上がる羞恥心も、一瞬で妖しい欲情の炎に焼き尽くされ、姫の自慰行為はさらに濃厚さを増してゆく。

内側から止めどなく漏れ出てくる愛液に濡れ蕩け、ヒクヒクと物欲しげに収縮する膣口に、細指が、ヌブツ、と潜り込んだ。

「んはあ! ハアアアッ!」

細い喉を仰け反らせ、熱い喘ぎを漏らす姫騎士の膣口が、挿入された指先をキュッ、キュンッ、と甘噛みするよう

に締めつける。

躍動感溢れる美脚をピンツ! と突っ張らせ、軽く腰を浮かせたような体勢のまま、デイリア姫は激しい喉の

渇きのような欲情に苛まれていた。

(もつと、もつと奥……奥の方が疼いている。もつと深くまで、指をッ!)

桜色に上気した色白な裸身を振らせながら、もどかしい自慰行為に没頭してゆく騎士姫。

「くふううんっ、ンッ、ンンッ、やつ、これ以上したら、おかしくなっちゃうッ! ふあ……あんッ!」

羞恥に震える声を上げながら、堪らない疼きを膣奥から掻き出そうとするかのように手首をくねらせ、ヴァギナの中心を抉るように指を潜らせてゆく。

剣と乗馬の鍛錬でデイリア姫の処女膜は自然断裂しており、挿入の痛みを感じさせることなく、指を深々と呑み込んでいた。

ちゅぷつ……くちゅ、くちゅ、くちゅるっ……。

蜜液が掻き回されるささやかな恥音を立てながら、中指と薬指がクネクネと屈伸しつつ膣口を抉る。

無意識のうちに美脚が広げられ、下腹がせり上がって、はしたない体位を取ってしまいつつ、姫は膣口のさらに深い部分にまで指を潜らせてしまう。

ぬぷつ……ちゅくるっ!

「はうううううンンッ!!」

ついに根元まで挿入した指で、膣内をまさぐりつつ、姫は、悩ましげに美貌を歪めて喘ぐ。

下腹の奥で、ドクドクと鼓動している淫熱の源泉を掻き出そうとするかのように、指先は限界まで深く突き挿れられるが、疼きの中心まであと少し届かない。

「んううううんっ! ンッ、はううううンンッ!」

切なげに呻きながら、ベッドの上で尻をせり上げ、膣口に指をねじ入れて悶える様は、周辺諸国にまで勇名を轟かせている騎士姫とは思えぬ艶めかし

く淫靡であった。

あと少しで届かぬ指をもどかしげに屈伸させて膣粘膜を掻きくすぐっているうちに、不完全燃焼ながらも、絶頂の予兆が膣奥から込み上げてくる。

(えっ!? 何っ? 何が……何かが来るッ!)

これまで感じたことのない、抑えようのない快感の大波に戸惑っているう

ちに、人生初めての自慰絶頂がデイリア姫の伸びやかな肢体を呑み込んだ。

「きゅふうううううンンンンッ!!」

喉奥で軋むような声を上げた姫の身体が、ピンツ! と一直線に伸びきって硬直する。

指を咥え込んだ膣壁が、キュンッ! キュンッ! と断続的に収縮し、噴き出した愛液が、姫の手とシーツを熱く濡らす。

「んは……ハアハアハアハア……あ、はああんっ!」

自ら進らせた愛液の甘酸っぱい淫臭に包まれ、絶頂の余韻に喘ぎながら、姫騎士は一向に解消されない疼きに身悶える。

絶頂してもなお、膣奥で燃える疼きの火は治まらず、それどころかいつそ

う強く燃え上がって、姫の理性を掻き乱してしまう。

(指ではダメ、届かない……もつと、もつと力強く長い……殿方のモノで、この疼き、突き砕いて欲しい!)

書物によって知った男女交合の淫靡な行為への期待に、汗ばんだ裸身をさらに火照り疼かせつつ、欲情の夢に囚

われた姫騎士は、本物を求め始めた。

↓たくましく野性的な男達の肉棒

↓若く精力旺盛な少年達の種子汁

↓人外の快楽をもたらしてくれる魔物の怒張

178ページへ
183ページへ
187ページへ

路地裏で男どもに輪姦される姫騎士

姫は、薄暗い路地裏をフラフラと歩いていた。

身にまとっているのは、魔女討伐でも着用していた戦装束と鎧で、腰には聖剣も帯びている。

しかし、下半身のあたりが妙に涼しい。

（私……下着を穿いていない!? いえ、それ以前に、いつの間に城外に出たの? ああ、これは夢。そう、夢なんだわ……）

地に足が着いていないようなフワフワと頼りなげな感触と、身体の内側で熱く疼く淫情でポーッと火照った意識が、今の状況を夢であると判断させていた。

（夢なら……少しぐらいはしたくないことをしても、構わないわよね?）

自己弁護しつつ、姫は淫らな期待が叶えられることを願いながら、薄暗い路地裏をさ迷う。

「んは……あんツ……歩を進めるたびに、秘所の中が擦れて……熱い……はふうんっ……」

膣奥で燃え盛る疼きの炎は、一歩ごとに強まり、理性と羞恥心を焼き尽くして、瑞々しい肢体を欲情で煮詰めてゆく。

「んっ……くうんんんっ……」
切なげな喘ぎを漏らしつつ歩んでいた姫は、前方にたむろしている数人の

人影を捉えた。

「おやおや、本当に来たぜ。間違いない! 姫騎士様だ! オマンコが疼いて眠れませんか?」

路地の奥にいた数人の男どもが、下卑たニヤニヤ笑いを浮かべて近づいてくる。

「えっ? なんのことでですか? 夢の中とは言え、そのような下品な物言いは慎みなさい!」

男どもの身体から漂ってくる安酒の臭いと汗臭さに不快げに眉を寄せつつ言い放つ騎士姫であったが、その声にはいつものような凛々しい響きはなく、快楽への期待感で艶めかしく潤んでしまっている。

「うひょお! その声と物言い、マジで姫騎士様だあ! もっと罵ってくれよお」

上気して汗ばんだ姫の美貌を至近距離から見つめ、男が嬉しげな声を上げる。

「ああ。こんなに美人な姫騎士様が、夜な夜な城を抜け出して男漁りとはなあ。たまんねえ!」

「なっ、何を言っているのですか? 私は男漁りなんて……ひあ! はあんツ!」

キリッ! とまなじりを吊り上げて、無礼な男どもに言い放つデイーリア姫であったが、背後からいきなり抱きすくめられて、恥ずかしい声を上げてしまふ。

（なんなの? 力が入らない。無礼な

ことをされているのに、身体が疼いてしまふ!? これも夢……淫らな夢だからなのかしら? これから、どんなにやらしいことをされてしまうの?）

武技に長けた普段の姫であれば、軽々と振りほどけるような男の腕になすすべもなく拘束され、姫騎士は困惑とともに湧き上がってくる淫らな期待に身を震わせてしまふ。

鎧と戦装束の下で、乳首が硬く尖り、秘部の奥が熱く潤んで、欲情の炎がさらに激しく、妖しく燃え上がる。

「姫様は想像以上にいい乳してらっしやいますねえ。プリップリの弾力がたまんねえでございますよ!」

鎧の隙間から手を差し込み、戦装束の内に秘められたバストの膨らみを荒っぽく握り締めた男は、歓喜の声を上げて指を屈伸させる。

誰にも採まれたことのない無垢な肉果に、骨張った男の指が食い込み、ムギムギと容赦無く採み立てる。

「くふう! ンンンンツ!」
眉を寄せ、身を強ばらせて呻く姫であったが、相変わらず身体に力が入らず、無礼者を振りほどくことができない。

「姫様のオツパイ、中身がたつぷりと詰まった、いいオツパイじゃねえか? フワフワのお肉が指を押し返してくるぜ!」

普段なら遠目に見ることしかできぬ高貴なる姫の身体に興奮した男は、夢中になつて指を屈伸させた。

「つあ! やっ、そんなに強く採んだら、痛いッ! んはああんツ!」

敏感な肉果を荒っぽく採みこねられる痛みにも美貌を歪めていた姫であったが、男の指が、勃起乳首を探り当てコリッ! と甘搔きすると、悩ましげな声を上げてしなやかな肢体を仰け反らせてしまふ。

「このコリコリしたのは、姫様の乳首だな! ほほお、コイツは敏感だな。ちよつと撫で転がしてやっただけで、身体がビクビク震えてるぞ」

姫の敏感な反応に調子に乗った男は、勃起乳頭の芯を採みほぐすかのように、指で圧迫しながら執拗にこねくり回す。

「ひやふうんっ! ンンツ、ダメエ! やっ、やめなさいっ! んんんんうううンンツ!!」

拒絶の声とは裏腹に、乳首を責める指がわずかに動くたびに、姫騎士の身体はあからさまな快感反応を見せつけて男どもを喜ばせてしまふ。

「いい声出すなあ。おお、甘い匂いがする。本当に高貴な姫様っぽくて、チンポがピンピン疼いちまうぜ!」

鎧の下に潜らせた指でプリッとしこり勃った乳首を弄り回しながら、男は姫騎士の尻に股間を擦りつけてくる。

「なあ、キスしようぜ、姫騎士ビッチ様!」

酷い口臭を放つ男の唇が、真正面から迫ってきた。
「ンツ! 嫌……ッ!」
あからさまな嫌悪の表情を浮かべた

蜜まみれの顔に卑猥な笑みを浮かべた男は、秘裂の上端で震える勃起クリトリスに吸いつき、甘噛みを仕掛けた。「きひやあッ！ やはあんっ！ 嘸んでは、ダメええ！ くふううんッ！」

これまで感じたことのない強烈な快感に全身を痺れさせられた姫は、悩ましげに裏返った声を上げ、男どもの腕の中でより悶えてしまう。

「こんなっ！ 夢のはずなのに、こんなに気持ちいいなんて！ あああ、吸い出されているッ！」

膣奥で渦巻いている狂おしい疼きの塊を、少しずつ舐め融かされて吸われているような快感に酔いしれた姫は、より強い吸引を求めるかのように、無意識のうちに腰をせり出してしまふ。

「おいっ！ 俺にも舐めさせろ！ はぐっ！ ぴちゃぴちゃぴちゃ……ちゅばちゅばッ！ んほお、コイツは上物のワインなんか目じゃないぜ！」

興奮した男どもは、交代で姫の股間を顔を埋め、初々しい秘裂から湧き出す熱く甘美な体液を味わった。

「ひんっ！ あんっ！ ダメエ、そんなに強く吸っては……んくうううんんっ！」

はしたない吸い音が秘部で上がるたびに、姫騎士の身体はビクンビクンと敏感な反応を見せて跳ね上がり、大量の愛液を迸らせる。

（ああ、恥ずかしいのに、なんて気持ちのいい夢なの？ このまますっとなんて夢の中にいたい……）

熱い味覚器官が秘裂をスロヌロといずる感触に陶酔した姫は、そんなはしたないことを考えてしまふ。

（でも、もっと奥ッ！ 欲しいのは、奥なの！ 奥に……来て欲しいッ！）

そんなはしたない要求を、言葉にしないだけの理性と羞恥心はかううじて残ってはいたが、姫は子宮への強烈な快感を待ち望んでしまっている。

クンニ責めに蕩け、甘く痺れる秘裂のさらに奥、舌では決して届かぬ部分に蓄積してゆく、飢えにも似た疼きは、もう、我慢の限界に達しているのだ。

「おい、そろそろいたいたいちまおうぜ！ オマンコも濡れ濡れ、チンポもギンギンで破裂しちまいそうだ！」

秘部をしゃぶり回していたリーダー格の男が、濡れ光る顔を上げ、ニヤリと好色な笑みを浮かべる。

（来る？ とうとう、来るのね？）

男どものざわめく様子から、このあとに何をされるのか察した姫の子宮が、キュンッ！ と収縮し、甘い衝撃にしなやかな肢体が振れてしまふ。

「そおら、見てくれよ。これが、今夜姫様のオマンコに突き刺さるチンポ槍だぜ！」

薄汚れたズボンをズリ下げ、勃起を露わにした男は、欲情に瞳をぎらつかせながら声を掛けてくる。

（ああ、あれが、男の……絵で見たよりも不気味な形……）

路地裏を照らす常夜灯の光に浮かび上がった牡器官を、姫は呆然と見つめてしまふ。

てしまふ。

下腹にめり込みそうに立ち上がった肉槍は、姫の携えている聖剣の柄ほどのサイズで、弓なりに反り返り、表面に血管を浮き出させてビクビクとしやくり上げている。

（あんなモノが、これから私の中に）想像しただけで、子宮がギュルンッ！ と強烈に収縮し、男どもに散々舐め融かされたヴァギナが、白濁した愛液をトロリと溢れさせてしまふ。

「くんんんッ！ ハアハアハア……ああ……ああ……」

武勇で名を馳せる騎士姫とは思えぬ弱々しい声を上げて恥じらい喘ぐディリアの様子は、欲情に駆られた男どもを激しく昂らせた。

「一番槍は俺だ！ いくぜッ！」

最初に、姫を抱きすくめたリーダー格の男が、限界勃起状態の怒張を背後から突きつけ、小刻みに腰を振って膣口を探る。

ぬちっ、ぐりゅっ、ずりゅっ、ずちゅ、ちゅぶっ……

「ふあ！ あああんっ！ やっ、あんッ！ 熱いッ！」

秘裂をグリグリと擦ってくる亀頭が送り込んでくる牡の淫熱と摩擦快感に震える騎士姫。

「姫様のオマンコの方が、チンポよりも熱くなってますぜ！ そおら、先っちょが入ったぞ！」

美しく高貴な姫を犯せる興奮に声を上ずらせながら、男はディリア姫の

膣口に亀頭をめり込ませてゆく。

（ああ、とうとう、殿方の……こんな下品な男のモノで、貫かれてしまふ……夢とはいっても、恥ずかしくて……怖いッ！）

嫌悪感を上回る淫らな期待に身を灼かれながら、姫は生まれて初めてのペニス挿入に恐怖を感じてしまふ。

しかし……

にゅぶっ……ずぶぶぶっ！

猛った亀頭が膣口をこじ開けて深々と挿入されてくると、圧倒的な快感と充足感が騎士姫のヴァギナを満たした。「はあうううんんうううんんッ！」

粘膜そのものが上げているような、艶めかしく潤んだ嬌声が、深夜の路地裏に反響する。

「んむう！ くお！ おおおっ、なんと具合の良いオマンコだ！ チンポが蕩けそうだぜ！」

姫騎士の処女を奪った男は、勃起を包み込んで締めつけ蠢く膣壁の、異様な心地良さに理性を失い、無我夢中になつて腰を突き上げた。

ずちゅずちゅずちゅぶじゅぶじゅぶじゅぶんっ！

初挿入の衝撃さめやらぬ膣壁を掻き擦って、熱く堅い牡器官が激しく注挿される。

「んあ！ ふあ、あつあつあつハッ、んくううんんっ！ はああんッ！」

疼きの核心である子宮口を亀頭に連打される快感に美貌を仰け反らせ、騎士姫は、切れ切れに悩ましげな吐息を



漏らす。

「ああ、やっと、届いた！ 殿方の硬いモノが奥まで届いてるッ！ 疼く塊に当たっているッ！」

それは、羞恥心や理性を吹き飛ばすような快感の波状攻撃であった。

歓喜にわななく膣壁が、挿入された勃起をキュンッ、キュンッ、と締めつけ、最奥部に叩きつけられる亀頭を、子宮口がチュパチュパと貪欲に吸いっ

「すっげえエロマンコだ！ 出すッ、出すぞおおお！」

荒々しいピストンを数十秒続けただけで限界に達した男は、姫の細腰をしつかりと引きつけ、膣奥で勃起を弾けさせた。

ドクッドクッドクッびゅるっ、どぶんっ！ ずびゅるっ、どびゅるるるっ、どびゅるるるるっ！

熱い子種汁が姫騎士の膣内に容赦なくぶちまけられる。

「ふあ……ああ……熱いッ！ はんっ！ のっ、飲んでる……ッ!?」

甘く蕩けた驚愕の声を上げる姫の子宮が、ゴクッ、ゴクッ、と収縮し、注ぎ込まれる精液を一滴残らず吸い込んでゆく。

膣壁を震わせる射精の脈動と、子宮にジワリ、と沁みる精液の熱さが、これまで感じたことのない充足感を姫に与えていた。

「ぬお！ おおおお……すっ、すげえ！ こんな気持ちいい射精、始めて

だッ！ まだっ、まだ出るッ！」

膝をガクガクと震わせながら、男は国民から敬愛される騎士姫の中に、延々と射精を続けた。

大量申出しを終えた男が、半ば放心状態でへたり込むと、姫の膣内に一滴残らず精を搾り尽くされた勃起がズルリと抜け落ちる。

「こっ、今度はオレだあ！」

余韻に浸る間もなく、新たな陵辱者の勃起が膣口に突き挿れられ、欲望任せのピストン運動を開始した。

「あはんッ！ ヒッ、ンッンッンッくうううんッ！」

はしたない声が出てしまうのを堪えようとする姫であったが、余韻さめやらぬ膣内を突き擦られると、切れ切れの色っぽい呻きを搾り出されてしまう。

「この女のおまんこ、マジですげええ！ ヌルヌルのお肉が震えながら吸いついてきて、ふおうっ！ 全部吸い取られちゃう！」

二人目の男もだらしないうえ顔を浮かべて言いながら、数分も持たず全身を震わせ、射精を開始した。

「そろそろあ！ お望み通り、オレ達の子種汁で孕ませてやるぜ、ピツチ騎士姫様よお！」

何人目かもわからぬ男が、下品な声を上げながら、激しい腰使いで姫を犯す。

「んんっんんっはああんっ！ 届いてるっ、ここっ、ここが、いつ、気持ちいいのおお！」

男の上で、姫騎士は尻を振りたくって自ら快感を貪っていた。

戦装束のまま、暴れ馬を乗りこなすかのように騎乗したディーリア姫の肢体が弾むと、それに連動して、熱く蕩けた膣壁がキュンッ、キュンッ、と勃起を搾り上げる。

「くおお！ 締まるッ！ 出すから……孕めよッ！」

鍛え抜かれた肉体を、快楽を貪るためにだけに躍動させる姫の腰使いに耐えきれず、男達はたちまちのうちに果てて、熱い子種汁を膣奥に送らせた。

「出してえ！ 子種汁ッ！ それで私を孕ませてえ！ はああああああッンンンッ!!」

ひときわ甲高いアクメの絶叫を路地裏に響かせる姫の子宮は、迸る濁汁を一滴残らず吸い込んでゆく。

「……んううう……くうんんっ……ハッ!?」

悩ましげな呻きを漏らしていた姫は、ベッドの上に勢い良く半身を起こした。

まだ妖しく高鳴る心臓の鼓動を抑え込むかのように、豊かなバストに手をあてがいがら周囲を見回した姫は、自分が寝所にいることを再確認し、小さな安堵の吐息を漏らす。

「やはりあれは、夢だったのね……なんて淫らな夢を見てしまったのでしょう……」

姫の脳裏には、膣内で激しく注挿される男根の摩擦快感や、膣奥に弾ける

精液の熱さ、射精の脈動の感触が、異様なほど鮮明に残留していて、込み上げる恥じらいで頬が熱くなってしまう。(本当に、夢……よね?)

恐る恐る下腹をまさぐってみるが、淫夢の影響か、秘部は多少潤んではいるものの、ピツチリと慎ましやかに閉じ合わされている。

「はああッ」

あらためて安堵の吐息を吐き出した姫は、寝心地のいいベッドに倒れ込み、再び身を委ねた。

(まだ、目覚めの時間ではないわね。もう少し、眠りましょう……今日も忙しくなるから……)

淫夢の気怠い余韻に浸りながら、姫は、すぐに、静かな寝息を立て始めた。

「……いやはや、凄まじい貪りようだったな。あの凛々しい姫がここまで乱れるとは、さすがは魔女の呪いといったところか」

姫の尾行を終え、私室に戻ってきた大臣は、ガマガエルじみた顔に、ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべてつぶやく。

「男どもは今宵のことを言いふらせるような状況でもなし。クククッ、首尾は上々、といったところか」

城下町の路地裏で、衰弱死寸前まで精気を搾り取られた男どもが見つかったという怪事件の噂は、多忙な姫のところまでは届かなかった。

西暦二千五百年

宇宙の様々な種族間で勃発した戦争はひとまず終結を迎えた

同じ過ちを繰り返さぬように様々な種族を交えた『宇宙統合軍』を設立

宇宙の各地で多発する紛争を鎮めるべく奔走していた

いい加減にしろ
貴様らツツ!!

毎度毎度
命令を無視して
独断専行…

我々が軍という
組織だという事を
忘れるな!!!

しかしですね
指揮官殿…
俺達はそもそも
別の種族の
集まりですし…
元々戦争だって
してたんですよ?
今更仲良くしろって
言われても…

ウルサイ女上官は
エロ催眠で黙らせる!!

黙れツツ!!

とにかく次に
作戦失敗するような
ことがあったら
貴様らの首はないと
覚えておけ!!

催眠SEX Boot Camp

漫画 仁志田メガネ

チッ…
舐めやがって
オツカワロバデット!!

自分は前線に出ず
後方で指令を出してる
だけのクセによお…

いつか痛い目に
合わせてやるぜ…



くっ…
放せ!!

きつ…貴様ら上官に
こんなことをして
タダですむと…

落ち着いて
下さいよ
指揮官殿

俺たちの協調性を
より良いものにするために
必要なことなんですから…

なっ…
何を



ピッ

おあおあ!!

なっ
何だ…!?

頭の中に何かが
流れ込んで
きてっ…

掻き回される!?



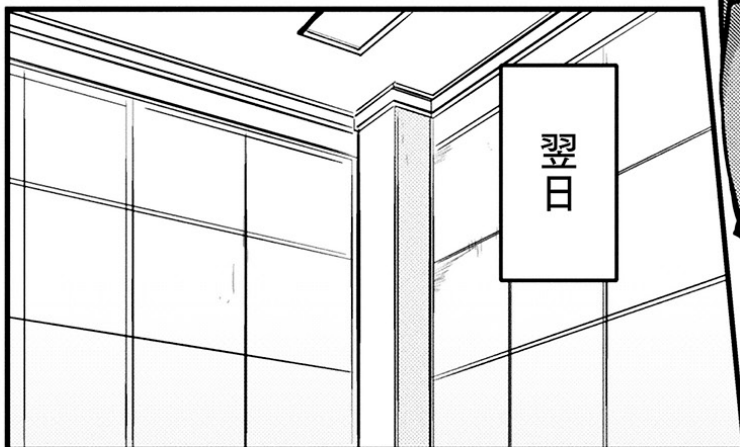
どうだ？
催眠とやらは
成功したのか？



なるほど…
さすがは開発に長けた
グレイ星人の技術って
やつか



なら
とっておきの
命令をインプット
してやるか…



翌日



いやまだだ…
脳に特殊なチップを
埋め込んだ
今はいわゆる
初期化した状態ダ

この状態から
命令を認識させれば
催眠をかけることが
出来ル

やはり
軍という組織に
必要なのは個が
団結する力だッ!!

しかし貴様らには
その意識が
足りていない!!

だから今日は
私とセックスして協調性を
高める特別訓練を行う!!

うはっ…マジかよ
なんだあの格好

あれが
催眠の効果って
ヤツか?

乳首
見えてるぜ

しかし
エロイ体
してんなあ

ああ…
性格はキツイが
体は抜群だった
からな

ククク…
笑いが止まらん…

面白いくらいに
催眠が効いてやがる…
あのお堅い指揮官殿が
部下の前で痴態を晒す
なんてよお…

おい
貴様ッ!!!

早くチンポを
出せ!!!

何を
呆けている?
私の話を聞いて
いたか?

やばいっ……
催眠が
浅かったか?

うお!!

ボロボロ

罰として
貴様のチンポを
舐めてやる!!!

おほっ…マジかよ
指揮官殿がオレの
チンポを舐めて
やる!!

グロ





大佐殿の
舌使い最高で
あります!!



この巨乳も
凄い圧迫感だ...!!



やべえ
皮手袋擦れて
気持ちいいぜっ!!



いいだろうっ
貴様の情けない
チンポで私を感じ
させてみる!!



大佐殿!!



まかせて
ください!!

自分はコッチで教育
お願いします!!

自分のチンポで
よがらせますよっ!!

おおっ…
大佐殿のおマンコが
吸い付いてきますよっ…!

それに漏らしてる
みたいに濡れてるし
しっかり感じてるん
ですね!!

調子に乗るな!!
貴様のモノ程度で…

うぐっさつきより
締め付けがキツク
なってますよっ!!

やばっ…
オレもうっ…

っ…コッチも
限界だぜ

へへっ…コッチも
しっかりしゃぶって
下さいよ!!



亡夫を偲ぶ漆黒の礼服は
卑劣性欲で白く上塗りされてゆく――

エルフ未亡人 セーラ

Elf Widow
Sera

誤認させられし男の子種

小説 NOVEL いそがねたけつら 磯貝武連 挿絵 ILLUSTRATION さるちえ

静かな部屋の中には哀しみが満ちていた。日中であるにもかかわらず薄暗さが漂っているのはそのせいだろう。そんな中に只一人椅子に腰掛け涙を拭く者がいる。

金髪碧眼。透けるような肌に尖った耳。誰もが目でエルフだと分かる。

本来であれば陽の気を漂わせているはずの森の氏族が何故こんなにも哀しみを纏っているのか、それは身についている物を見れば明らかだ。

漆黒の喪服。そう、彼女は最愛の人物を亡くしたのだ。それは夫だった。彼女——セラが嫁いできたのは人間の国だった。

小さいが歴史ある国、エルシエラ。セラの夫はその国の国王だった。

エルフ貴族の一人娘であるセラとの婚姻は、簡単に言えば政略目的であつたろう。しかしそんな事実さえ打ち消すほど、セラは夫を愛し、そして夫もセラを愛してくれた。

人間の国にたつた一人で嫁ぐ不安や悲しみも総て忘れさせてくれた。そんな夫が病で突然死したのはひと月前前だった。

あまりに突然の別れ。人間に嫁ぐ以上はいずれと覚悟はしていた。しかしそれがあまりにも急すぎて、セラの心はその事実にも耐えきれなかった。

葬式の最中も何度も気を失い、そして喪に服す今もひと月経ってまだ立ち直れずにいる。

心配する周りの者や親族は故郷へ帰

る事も提案してくれた。けれどセラそれを拒んだ。まだ夫の死をきちんと受け入れていない証拠だった。

そして受け入れられないまま、夫との思い出の残る私室で一人哀しみに暮れているのである。

「……あなた」

そう呟くだけで瞳に涙が溢れてくる。セラはそれをハンカチで拭いながら思い出に咽び泣く。

何をして、どんな事をしているも総てが亡夫ライアスとの思い出に繋がってしまう現状、セラの涙は止まる事はなかった。

そんな時、部屋の扉がノックされた。「失礼します」という声にセラが返事をする、開かれた扉の向こうから一人の男がやってきた。

肥満した身体を貴族服に押し込んだ男、この国の大臣の一人ギロンだ。

だらしない体型とは裏腹にちゃんと礼をとってから部屋に入ってくるギロンは心配そうな顔つきでセラに声をかけた。

「セラ様、また食事を取っておられないそうですね。お身体に障りますぞ？」

セラはその言葉に「分かつてはいるのですが」と呟いたきり俯いてしまった。その様子にギロンはそれ以上叱責する事もなく黙って見守り続ける。

そんな視線を感じたセラは話を変えようと、

「それより……何かあったのですか？」
「ああ、いえ、用事というほどでは

ただ会議が長引いております、それを報告にと」

会議とは、エルシエラ国の今後をどうするかという会議である。

急に国王を亡くしたエルシエラ国議会で、次の国王を誰にするかという問題で揉めている真つ最中なのだ。

セラの夫ライアスはまだ若かった為跡継ぎ問題は不安視されておらず、いざセラとの間に子供が出来たらうと楽観視されていたのだ。

それが突然こうした事態になってしまい、養子をとるべきか、とるとしてもどこから、等と揉めに揉めている最中なのである。

ギロンはその会議の事を定期的にセラへ報告していた。セラは話が進んでいない事を聞くと申し訳なさそうに、

「……ごめんなさい……王妃である私なんの力にもなれず」

今現在の国のトップであるセラだが、その会議に出る余裕はどこにもなかった。仮に出たとしてもまた倒れるのが関の山だろう。

それを本人もよく分かっているのだが、それでも申し訳ないという気持ち

がなくなる訳ではない。大切な夫の大切な国の行く末だというのに……。

しかしそれを聞いたギロンは首を振って優しく声をかけた。

「お気になさらず。今はお身体を第一に……そうでないとライアス国王様に我々が叱られてしまいます」

ギロンの言葉にセラも少しだけ嬉し

そうに微笑んだ。そして「ありがとう」と呟く。ギロンはそんなセラに紅茶を淹れて差し出した。食事まともにとれないセラにせめてもと、ミルクと蜂蜜を入れた甘い紅茶だった。

ゆつくりとそれを飲んだセラを見届けて、ギロンは部屋を出て行く。一人になった部屋の中でセラはまた思い出に耽り涙を零した。

ギロンが去って数刻……相変わらず椅子に腰掛けたままのセラがそこにはいた。しかしその表情はさっきまでとは違っている。

深く哀しみをたたえていた美しい顔にはなんの表情も浮かんでおらず、瞳にも生気がない。眠っているようにも見えるが身体の微かな動きでそうではないのだと分かる。

ただ突然と、何も見つけず何も聞かず何も考えずに座っている。そんな感じだった。その虚ろな様子のセラに声がかかった。「セラ、セラ」と優しく名を呼ぶ声が何度も笹耳に届くのだ。

酷く緩慢な動きでセラは頭を上げて声のする方向に顔を向ける。その間も名を呼ぶ声は小さく響き続けた。

「セラ……セラ……」

ようやく声の主へと視線を向けたセラは、どこか寝惚けているような瞳は変わらずに、顔中に笑みを浮かべた。そしてよろけながら立ち上がると、

「あ、なた……あなた……」

嬉しそうに呟きながら声の主へと駆

け寄りその身体を力一杯抱き締めた。

すぐに抱き返してくる温かい腕のリアルな感触にセラは顔を上げ目を向ける。その相手——セラが「あなた」という唯一の相手、それは夫のライアスだった。

「帰って、きて……くださったのですね」

掠れた声で嬉しそうに咬くセラにライアスは当然だと言うように、「当たり前だろう。私がセラを置いてどこに行くというのだ？」

その言葉にセラは小さく首を傾げた。そうだ。何故自分は帰ってきてくれたなどと言ったのだろう。ライアスがどこかに行くはずがないのに。自分から離れたりはしないのに。

しかしその事を深く考えようとするとか奇妙な感覚がセラを襲った。違和感とでもいうのだろうか。

例えば今この場に本来いてはいけない人間がいるような、そんな違和感……けれどそれを深く考える前にライアスがセラの唇を優しく塞いだ。

「ん、んん……ちゅ……ぶ、ちゅ、ちゅ……んあ」

蕩けるような口づけだった。そしてもう一度問いかけられる。

「私がセラを置いてどこかに行くはずがない。ずっと一緒に誓っただろう」
何故かその言葉は普通に聞くよりも何倍もセラの心を締めつけた。言って欲しかった言葉、求めていた言葉、そんな気がするのだ。

うつすらと涙を溢れさせながら「はい」と頷くセラはライアスの唇を待った。そしてまたキスを繰り返す。啄むように、そして深く。何度も何度も「んん、んふう……ちゅぶ、ちゅ……んちゅ……」

それは結婚以来何度もしてきたキスだった。二人きりの時、甘い一時に何度もしたはずのキスだった。しかし、やがてそのキスが変化を始める。
「る、ちゅ、るちゅれ、れちゅ、れちゅ……ちゅれ、れちゅ」

ライアスの舌がセラの唇の中へと侵入してきた。厚い男の舌が若く美しいエルフ妻の唇内を舐め回してゆく。一瞬戸惑ったような表情を浮かべたセラだったが、それでも嫌がったりはせず、寧ろ自分からもそれに応える。

唇内に入ってくる舌に自分の舌を絡め、唾液を塗りつけあう。ふと、いつからこの人はこんなキスをするようになったのだろうか頭の片隅に疑問が浮かびかけるが、それを掻き消すように下品なキスは続いた。
「ちゅ、ちゅる、れちゅ、れちゅれろ、れろれろ、れちゅろお」

苦しさに顔を赤らめるセラは口の端から唾液を零しながら舐め回す舌の感触に陶酔し始めた。その様子をキスの相手は下卑た笑みを浮かべた。

その表情にセラが気付いていたなら、この男が亡夫だとは決して認めなかっただろう。少なくともセラの愛した男はそんな顔で笑ったりはしなかった。

そもそもこの世界で死んだ人間が完全に生前の姿で生き返る事など、死霊術をもつてしても不可能だ。ならば当然の帰結として、ここでセラとキスを交わしているのはライアスではない。薄明かりの灯る部屋。その中でセラの唇内を舐め回し下卑た笑みを浮かべる男。それは先刻部屋へとやってきたギロンだった。

脂ぎった唇をセラに押しつけ唇内を貪り舐める中年男。長身で眉目秀麗、近隣諸国でも美丈夫として有名だった亡夫ライアスとは似ても似つかないその姿をセラは誤認したままキスに耽っていた。その秘密はギロンにあった。

このギロンという男は若い頃に魔導師を目指していた事があるのだ。もともと芽が出ずに結局は親からの領地を受け継ぎ貴族議員となったのだが。

それでも丸きりなんの成果もなかった訳ではない。唯一初歩的な「催眠魔術」を習得する事には成功していた。初歩的とはいえ魔術は魔術である。

しかもそれを催眠効果を高める数種類の薬草と併用する事で効果を高める事ができるようにさえなっていた。

その技をギロンはセラに使ったのだ。気遣うふりをして薬草を溶かした紅茶を飲ませ、優しい言葉の中に催眠暗示の魔術を混ぜ、自らをライアスと思い込ませる事に成功したのだ。
しかもそれは今回が初めてという訳ではない。ライアスが亡くなってひと月、その間何度もギロンはこうしてセ

ラに催眠をかけ、彼女の若く美しい肉体を味わっていた。

魔術的な催眠にかけられているセラはその事にまったく気付かないまま、毎回夫が死んだ事実を忘れさせられ、そしてこの下劣な男を夫と思い込んでしまっていたのである。

今回もまた上手くかかってくれた催眠魔術に満足げな笑みを浮かべてギロンはセラの身体をまさぐり始めた。

若いエルフの肉体。貴族とはいえず中々には味わえない本物の純血種のエルフをギロンは鼻息も荒く揉み撫でる。背中から脇腹、そしてお尻へと。当然キスは続けたままだ。夫だと思い込んでいる男の指先が身体を撫でる心地よさにセラはキスの合間に「ふあ」と息を漏らした。

もしこれがギロンだと分かっていたなら絶対に出さないような声である。その耳を撫でる吐息の艶やかさにギロンの逸物はパンツの中でグイグイ持ち上がった。

一旦キスをやめ、セラの身体を強く抱き寄せたギロンは股間の熱棒を押しつけた。その硬さに気付いたセラが「あ」と言う、

「……してくるかい？」
優しく問いかける。セラは虚ろな瞳のまま羞恥に頬を染めると小さく頷いた。そして夫だと誤認している男の足元に跪いた。

そのまま慣れない手つきでスポンを脱がし、下着もおろしたセラは、中か

ら飛び出してくる肉棒に笹穂耳の先まで赤くして生唾を飲み込んだ。

若々しく色も綺麗だったライアスのとは色も形も臭いさえ違う赤黒い中年ペニス。しかしそれをセラは夫の物だと認識したまま優しく撫でますと、「熱くなっています……それに、とても、硬い」

「セラが綺麗だからだ……セラの美しさに反応しているんだよ」

ギロンの歯の浮くような最低な台詞にセラははにかんだまま鼻を近づけた。そして臭いを嗅ぐ。そうするように仕込んだのはギロンだった。

セラに催眠魔術をかけて抱き始めた時、このエルフ妻が性的に未開発なのをギロンは知った。

結婚して三年も経つというのに、ライアスはセラに下品な行為を一切させていなかったのだ。

性交渉がなかった訳ではない。寧ろ回数は多い方だった。しかしそれは総てライアスがセラを気遣い行っていた。

それを催眠にかかったセラの口から聞き出したギロンは、彼女に色々な事を仕込み始めた。それはまるで淫婦の如き行いの数々だった。

催眠魔術をかける時に羞恥や倫理観についても操作されているセラは、やらされる色々な行為に戸惑いながらも懸命に覚えていった。そして抱かれる度にその技術を上げていった。

ひと月程という短い間で、中年男であるギロンが何度も手を出してしまう

理由の一つがそれだった。自分好みに仕上がつてゆく美しいエルフに欲求が止まらないのだ。

今もこうして存分に雁首の下品な臭いを嗅ぎ回したセラが舌を伸ばしてそこをじつくりと舐めとってゆくと、思わず背筋が震えるほどの快楽が駆け上がつてゆく。

そうして反応する肉棒とギロンを交互に見つめてセラはキャンディーでも舐めるように優しく丁寧に根元から先端へと舌を這わせた。

教えられたとおりにわざと舌舐めずりの音を立て、下品に卑猥に、汚れた肉棒を舐め清める。

「る、れる、れるる、れちゅるう……ちゅぶ、ちゅるう、ちゅぶ、ちゅぶ、レロレロ」

綺麗な色をした舌を、まだ洗っていない肉茎に押し当て、一番汚れているであろう雁首さえ舐めとる。ズル剥けた亀頭は唾液を塗りつけられテカテカに赤黒く光り輝いていた。

そんな各部を舐め回されると、肉棒全体にはすぐに大量の血が集まり、太い血管がミミズのように茎部分に浮かび上がってゆく。そこにセラはチュッチュと軽く口づけをした。

悪戯でもするような行為にペニスがビクつく。悦んでいるのだと感じセラは嬉しそうに微笑むと、躊躇なくその悦び跳ねる逸物を口の中へと含んだ。

熱く滾った肉棒の汚臭を存分に嗅ぎ、そして舐め回したセラの唾内は唾液が

ネットに満ち溢れていた。その中に包まれ舐め扱われるギロンのペニスはさつき以上に大きくビクついていった。「あ、お、お……いいよ、上手だ……んお」

思わず声をあげるギロンを上目遣いで見上げたセラは、その催眠魔術にかかった虚ろな目で快楽に悶える夫の姿を見留め、嬉しそうに口淫を行った。

舌に感じる痺れるような雄器官の味を厭う事もなく。熱烈ともいえる舌の動きで全体を舐め擦る。

大きく膨らんだ亀頭表面、そして太く張った雁首を丁寧に。そこから血管の浮かんだ肉茎へと舌を移動させる。勿論裏筋だつて忘れない。カウパーの垂れるその舌先で舐めなぞり、下にある陰囊を口に含んで舐め転がす。

ライアスが悦んでくれている。自分の口遣いで気持ちよくなってくれている。それがとても嬉しいから。

こんなに悦ぶのならもつと前からしてあげればよかった。そんな風にさえ思いながらセラは亀頭に舌を絡め、唇を窄めて肉茎を抜きあげる。

「ちゅ、ちゅぶ、れちゅぶう、ちゅつぶ、ちゅぞ、ちゅぞ！ ちゅぞ！ ちゅつぞ！」

唾液を潤滑剤に口腔粘膜で擦られる気持ちよさが喉り上げる音と共に大きくなつてゆく。

ひと月前までは舐める事さえできず、口に入れるだけで精一杯だったセラが、

今では下品に唇を突き出して淫水焼けた逸物を愛撫しているのだ。

（まったく、こんな素晴らしいクチマノコを味わう事もせずに逝ってしまわれるとは……勿体ない事を）

死んだ人間にそんな最低な言葉で心で投げかけながら、フェラチオ快楽に震えるギロンは反り返る肉棒に与えられ口腔愛撫の容赦なき息を呑んだ。

涎とカウパーの合わさった泡立つ液体をボタボタと喪服の胸元に零しながら、それさえ気にせず唇で亀頭を擦る。ちゅぼちゅぼという音は一秒ごとに強く激しくなつていった。

本当に美味しく感じているのではないかとというような表情で、虚ろな瞳で耳まで朱に染め必死に舐め回す。

時に強く時に弱く、たまに口から出して全体を舌で舐め回し、そしてまた口に入れ吸いしやる。

教え込んだ技を余すところなく使ってくれるセラの懸命フェラに金玉が迫り上がりカウパーの量が増してゆく。そのピリピリする味を感じたセラが責めを一際強くした。

「ちゅず！ ちゅつず！ ちゅ、ちゅぶ、ちゅ、ちゅずずず！！ ちゅぼー！」

唾内に亀頭部を含んだまま頭を激しく前後させ、張りきつた唾液塗れの肉棒根元を細い指先で抜きあげる。男を発射させる為の技だ。

「お！ お！ おお！ せ、セラ……いいぞ、おおお！」



正義がいた

母娘フタナリ変身ヒロイン
再び見参!!

この街には

急ぐわよ
ヴァーミリオン

醜悪なる
デモンコアと戦う
二人のヒロイン

はい
わかっています
セルシアン

好評
発売中!

二次元ドリームワークス

天煌聖姫
ヴァーミリオン
催変身

漫画
COMIC

かぐや
火愚夜

原作
ORIGINAL

ゆうき
有機企画



天煌聖姫
ヴァーミリオンと

その母
セルシアンである

ええっ

もう少しデス
急ギマシヨウ

う…うん
セルシアン
行きましょう

どうしたの？
ヴァーミリオン

……
!?

エリスッ



ウフフフ…
遅かったね
おねーちゃんたち

エリス待ちくたびれ
ちゃったー♡

オウニィ!



くっ…エリス
まさかあなたが
復活してくるなんて

アカネちゃん!
みんな! 今
助けますから

そうはいかないわ
この傷の恨み

たっぷりお返し
してあげる

く…あのときより
パワーアップしてる

気を付けて





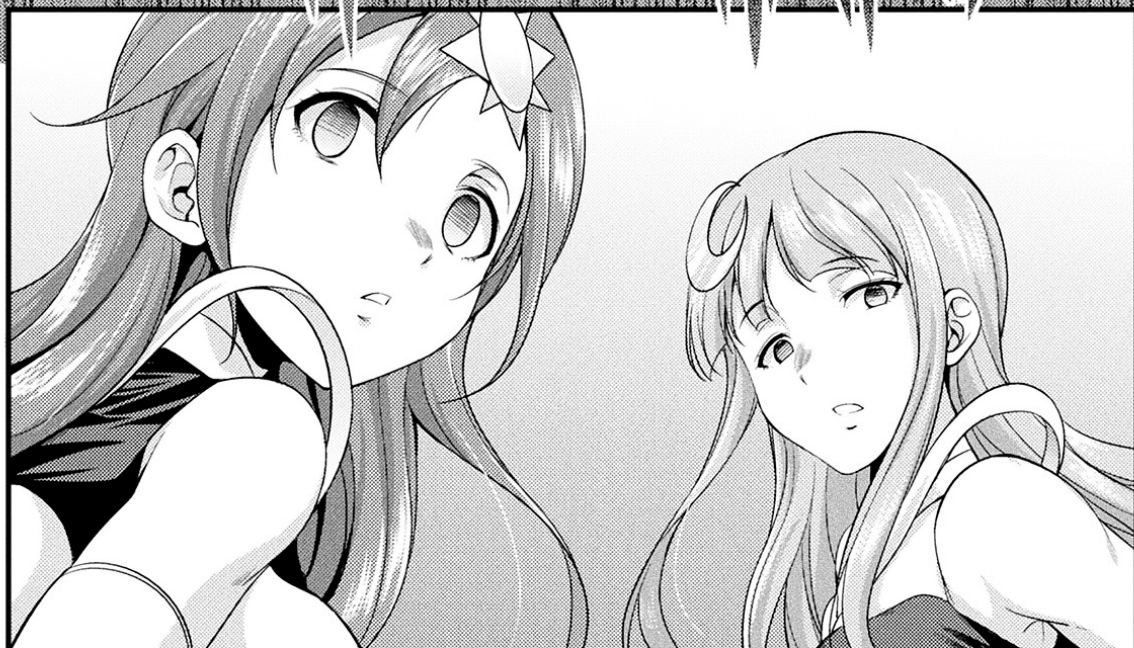
ナラバコチラモ
再変身シテ
パワーアップスルシカナイ

再変身!?



ソウダ

ソレニヨリヤツヲ
タオスノニフサワシイ
姿ニナルノダ

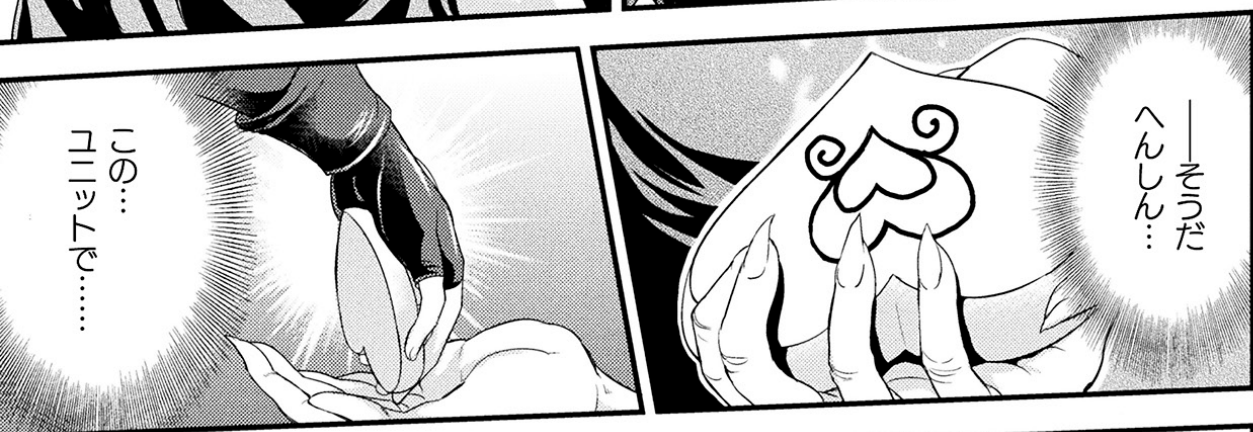




あ…あれ？

なに…？
この違和感は

そもそも
アレは—



—そうだ
へんしん…

この…
ニハル…



いくわよ！
ヴァーミリオン

はいっ 覚悟して
くださいエリス！！

そつよ—

私たちは—

変態フタナリ聖姫



アハハハ
それが決めポーズ
なのね

ホントにやった
ホントにやっちゃった
よっ

お手柄よ催眠怪人
ヤツール

ハハハハ
チホの3人

なに奴らは
もともとエリス殿に
フタナリ調教
されていた身

そう難しい
ことでは
なかったよ



只今参上よ♡

それじゃ
早速この
変態聖姫で
遊びましょう

さあ二人とも

まずはこいつらが
相手よ

それは――



い…いやあつ

フフ…彼女たちは
さらってきた人質を
改造したものよ

あなたが
助けるべき
人たちね…

けど

あなたたちの
目には

立派な怪人に
見えていること
でしょうね



さあ
囲まれたわよ

大ピンチね♡
おねえちゃんたち

ふふ…私たちを
甘く見ましたね
エリス

そうよ…
そんなザコ…



楽勝よ♡

め

め

め

やあ〜ん♡
そいつらの弱点
ばれちゃった♡

さすが
ヴァーミリオンと
セルシアン



捕らわれの変幻装姫を襲う、
容赦なき暴力の嵐！

第1巻～第2巻も
好評発売中！



次元ドリーク・ベルズ
変幻装姫・シャインミラーージュ

変幻装姫
SHINE MIRAGE
シャインミラーージュ

絶望のバイオレンス編

第二話 被虐の連鎖。屈辱のスレイヴフォーム

小説
NOVEL

でいふーと

挿絵
ILLUSTRATION

たかはまたろう
高浜太郎

登場人物紹介



シャインミラーージュ

悪の組織ダーククライムと日夜戦う正義の変幻装姫。

グラッド

ダーククライムの凶悪怪人。圧倒的な戦闘力をもつ。

ドルコス

ダーククライムの幹部。肉弾戦を得意とする、パワータイプ。

デプロ

タキシード姿の豚型の人獣。ドルコスと同じく幹部のひとり。

ミステイ

ダーククライムの幹部。可愛らしい見た目のゴスロリ少女。

前回のあらすじ

正義の変幻装姫・シャインミラーージュは、復活したダーククライムの怪人・グラッドに戦いを挑むが、一方的に衆人観視のもとでボコボコに懲らされたあげく、敗北し捕らえられてしまった……。

「ひぐうあああああああああつ!? ああつぎ、ひぐうううううう!!」

ダーククライムの基地。その奥深くの一室に響き渡る、耳をつんざく悲痛な叫び。

声の主は、磔にされ自由を完全に奪われた状態で、黒い手袋に包まれた手に異性を魅了する豊富な身体の一部を掴まれている。

黒手からは視覚化できるほどに強力な電流が流れ、人々の希望の象徴であった存在、変幻装姫シャインミラーージュの身体を襲っていた。

正義のヒロインが悪に敗北し囚われた日から今に至るまで、彼女は博士の研究対象にして、グラッドの玩具としてその存在を弄ばれている。

「ヒヒヤヒヤヒヤッ!! 正義のヒロインならもう少し頑張りやがれ。今は神聖なエナジーも残ってんだしこれくらい耐えられんだろうが。ああ、別に反撃しても構わねえぜ。できるモンならなア」

仮面の男が電流を流していた手を放し、高らかに笑いながら今度はシャインミラーージュの露出する肩を掴む。それが何を意味するのかをよく理解している変幻ヒロインはビクッと反応を見せた。

「く、うう……お、おやめなさ——」

バチバチバチッ!!

「はぐううううううッ!? あああつああ……あああつひひひひひッ!!」

疲弊するシャインミラーージュが弱々しくも必死に声を出す。だがグラッドの手が青白く発光すると、肩を起点として変幻装姫の全身を凶悪な電流が襲った。

十字架型の拘束具によって自由を奪われている囚われのヒロインは、憎き敵の前だというのに情けない悲鳴を上げて身体を痙攣させることしかできない。息を吸うことすらも許されないと考えるほどに響き渡る悲痛な叫び。ただの電流程度では大した効果がない変幻装姫も、異常といえる闇のエナジーを所有するグラッドが放つモノではたまたの無力な少女同然の反応しかできない。

実験の始まった当初は神聖なエナジーで反撃を試みようとしたが、グラッドの持つ強大な闇のエナジーによって容易く叩きのめされてしまった。

反抗の意志はあるものの、ただ闇雲に戦うだけではダメなのだと言われ理解させられた正義のヒロインは、今はただ実験のモルモットになることしかできない。

「オラッ!! お得意の強がりを書いてみせろ!! それとももうギブアップか? 神聖なエナジーを持つ正義のヒロイン様はもう負けつてことでもいいのかあ!？」

絶対的な力を持つ強者からの嘲笑が、電流とともにシャインミラーージュを襲う。

正義のヒロインとしてのプライドを粉々に破壊することを喜びとする、サディスティックな笑い。それは戦いで圧倒的な力の差を思い知らせた事実があるからこそ。

「んぎいいいいッ!? ち、ちが、いますわああ

……わ、わたくしは……正義は絶対に負けたり、なんてえ……ひぐうあああああああつ!？」

だが、まだ正義のヒロインの心は、矜持は折れてはいない。身体の内側から焼き尽くされてしまいそうな激痛に苛まれようと、自分の意志で屈辱的な言葉を発することはしなかった。

「頑張るじゃねえか。制限時間の弱点もバレちゃって、こうして何度も耐久実験されてるつてのによオ」

しかし仮面の男はシャインミラーージュが折れようが折れまいが、どちらでもよいと笑った。

今の変幻令嬢は唯一の弱点と呼べる、変身してから二時間程度でエナジーが枯渇するという事実すらもダーククライムに暴かれてしまっている。

回復するまでも基本的には二時間を有する為、神聖なエナジーがある状況では解析と実験。その後はまるで動物園の動物のように、檻の中で見世物とされることを繰り返している。

神聖なエナジーがあるうちは常にグラッドに見張られており、実験担当もまた今行っているように仮面の男だけ。

今日までされてきたのは、街中でされたようにボディブローを気絶するまで繰り返され、巨大水槽内で窒息を強要され、炎の中でどれだけ耐えられるかなどという非人道的なモノばかり。

そして電撃耐久実験の今に至る。

（わたくしは負けませんわ……どんなことをされようとも、諦めなければ絶対にどこかでチャンスが巡ってくるはず……この男……グラッドにだって、次は絶対に……!!）

けれども正義の意志は折れず、光は消えてはいない。数多くの苦痛を味わわれようと、まだ変幻装姫は諦めてはいなかった。

ここが敵の基地であるのならば、逆にチャンスでもあるということ。一気に首魁である博士と呼ばれ

る存在を、そして怪人達も倒してしまえば戦いは終わる。

連日行われている神聖なエナジの解析がどうか。時間をかければかけるだけ不利になつていくという不安。

そして一番の懸念材料と呼べるのは、執行人とも呼べる仮面の男。

(……勝つて、みせますわ)

一方的に、相手が全力を出しているとは思えない状態で遊ばれてしまった事実は消えはしない。

今でも勝てるビジョンは浮かんではこないけれども、それでも認めてはいけない。この男を倒せなければ未来はないのだから。

「さてエ……次はここにするとするかア」

むにゅう。パチパチイッ!!

「んひひひひひひひひひ!? こ、この、へんた、いい……はぎいいいああああッ!!」

肩から滑るようにして下へと落ちた手が、コスチュームの布地をたつぷりと押し上げる大きな膨らみを捉えた。

変幻令嬢の魅惑のボディの一つの象徴とも言える、Gカップの爆乳。それが大きく揺らめかれた掌によって歪められ、力が込められるだけ指の間からムツチリとした柔肉が零れてしまいそうに溢れた。

本来ならば強い恥辱を覚えるのであろうが、触れるのと同時に放たれた強い電撃による衝撃にガクンと顎が跳ね上がる。

「む、胸え……パチパチつてへええええッ!! ふぐうううう!! ああ……くひひひひひひひひひッ!!」

今までと同様の痛みが全身を走るだけ。そう思っていた変幻装姫ではあるが、前面から強く圧迫され押し潰される乳突起が普段以上に過敏に反応を示す。「こんなバカみてエにデケエ胸してるから遅エんだ

よ。オレがこのまま潰してやろうかア? ヒヒヤヒヒッ!!」

ぐにゅむにゅう!! パチチイッ!!

「ああっひひひ!? り、両手でなんへええええッ!! ひぎいいいああああ!! ひやあつぐううううう!!」

残る乳果実がもう片方の手で同様に一気に揉み潰された。十字架に拘束された敗北ヒロインの双乳が卑猥に歪み、悪の手による電撃刑の威力が倍增する恥辱と激痛を同時に味わわされながらも、それに

対して何一つ抵抗することも許されない。

この状態でエナジが切れば死んでしまうのは確実。エナジの時間も計算されている現状、それで命を落とすということはないのだろうか、この苦痛が続くのに変わりはない。

「ひぐうううううッ!! で、電気い……ずつと流されへえええッ!! む、胸え、爆発してしまいますのおおおッ!! くひひひひひひひひひッ!!」

パチパチと放たれる巨大な電撃に翻弄され頭の中が真っ白に染まる中でも、二つの突起が潰れて先ほどの以上の激感が変幻ヒロインを襲う。

乳房から脳天にまで響くような異質な感覚をも同時に覚えながらも、意識の大半は痛みに奪われ、ピクピクと打ち上げられた魚のように身を震わせた。

「正義のヒロイン様の胸は柔らかいモンだな。ま、オレは興味はねエが、他の奴らはコイツを滅茶苦茶にしてエッて思ってるらしいぜ?」

「そ、そんなことお……はぎいいいひひひ!! んうっ

ああ!! ひああああああッ!!」

無力な時間に突き刺さる下卑た視線に欲望に満ちた言葉の数々。そのどれもが、変幻装姫の身体を狙つてのモノに他ならない。

だからこそ、シャインミラージュはグラッドに言われるまでもなく理解してしまっている。それが堪らなく屈辱的で、悔しくて堪らなかつた。

「さつきまでは途中で止めてたが、このままいくとするか」

左手はむにゅぐにゅと電撃を放ちながら乳房を揉みしだし、右手はさらに下へと進み今度は腹部が、拳を握られた状態で強く押し込まれる。

パチパチッ!! ビリリリイッ!!

「んぐぶううううう!! お、お腹ああッ……えぶううううううう!! ああッ!! ああッ!! ひひひひひひ!!」

殴られたわけではない。しかし電撃を纏った拳が腹部を圧迫してくるだけで、胃の中身が逆流してくるのを感じる。

胸と腹。二カ所から襲う凶悪な雷撃。更には段々と押し潰さんとするかのような力の前に、低い悲鳴が押し出される。

「この腹もなア……殴り心地が最高なんだよなア。今度もつとタツプリと殴らせて貰うとするかねエ」

「んぶううう!! ああッああ!! こ、これ以上、押しではああ……だ、ダメへえ……んぐうええええ!!」

変幻ヒロインは磔のまませめてもの前傾姿勢を求めて僅かに顔を前に出し、潰れた悲鳴を上げながら口の端から唾液をポタポタと垂らした。

まるでこのまま内臓を潰されるのではと、そう錯覚してしまうだけの力。それは初めての戦いで何度もボディブローを受けた変幻装姫だからこそ理解している。

身体の内臓を押し潰される激感と、巨大な電撃による苦痛。重なる強烈な刺激に汗に濡れる変幻令嬢のコスチュームが鈍く変色する。

「ヒヤヒヒッ!! ンじゃアこも、だ」

「はひひひひひひひッ!? そ、そこ、はああ……!! ひぐうああああ!! んぶううひひひひ!! て、手を、放してええええッ!!」

むぎゅうつと無造作に掴まれたのは、シャインミラージュの処女地である恥部。

乳房以上に恥ずかしさを覚える部分にして急所の一つが狙われ、直接電流が流し込まれた。

何度目になるだろうか。再び顎が跳ね上がり、大切な部分が焼けただれしてしまうのではという悪寒すら覚える中で、ビクンツとグラッドの手に激しい煙拳を伝える。

「こ、壊れつ……壊れてしまいますのおおおッ!! くひいあああッ!! んひいつああひいひいひい!!」

「こんなもんじゃ壊れやしねエよ。今までの実験で証明してんだからなア。だから遠慮なく叫びやがれシャインミラージュよオ。ヒヒヤヒヒッ!!」

恥丘を握られ、直接流し込まれる電撃に弱々しい懇願をするも当然の如く無視をされる。

この程度で神聖なエナジーを持つヒロインは壊れないと、グラッドには確信があるから。

「ぶぐうあああッ!! ああつひ!! ひやぐううう!! い、いやあああッ!! こ、こんなああッ……あそこ、焼けてしまいますからあああッ!! んひいつひいひい!!」

けれども、苦痛を受ける変幻ヒロイン本人にそんな確信など持てようはずもない。

コスチュームの下で淫裂が、そのまま子宮までもが焼け焦げてしまうのではないかという不安に満たされる。

しかし、同時に生まれるのは乳房刺激の際に覚えた未知の快感。鋭くも甘い、そんな覚えてはいけない感覚が確かに生まれ、シャインミラージュの悲鳴をさらに大きくしていた。

「流石にココを責められると声もデカくなりやがる。今度は急所責めつてもいいかもなア!!」

「そ、そんな、ふざけたことお……はひいあああッ!!」

あッ!! ひいつぐううう!! くひいひいひいひいッ!!

さらなる苦痛を思わせるグラッドの発言に背筋を寒くさせる変幻ヒロインの言葉は、すぐに被虐の叫びへと変わる。

愛撫などではない、ただ淫部を弄ぶだけの適当な手つき。他者に一度も触れられたことのない大事な部分を責められる恥辱はしかし、それを上回る電流刺激に消されてしまう。

「ヒヒヤヒヒッ!! 本当にお前はイイ声を出しやがる」

「かはあつ……はあ、はああ……うぐッ……ふ、ふざけたことを……言わ、ないで……!!」

突如、今まで続いていた電撃が止まった。黒い手も離れたことで束の間の安息……と言つていいのだろうか、しかし身体を休めることはできるとシャインミラージュは荒い呼吸を繰り返す。

「ど、どんなことをされようと、わたくしは屈したりしませんわ……いつか、ここから脱出してあなたも……倒してみせますから……か、覚悟なさい……ッ!!」

たどたどしい言葉。長時間の電撃に晒され、満足に喉のことも難しいけれども、その口から出るのはヒロイン然とした抵抗の意志。

懸命に仮面の男を睨みつけるものの、相手の表情は見えない。しかし、仮面の奥で笑っているのだろうということは、容易に想像できた。

「へエ、なら最後はココだ。存分に悲鳴を上げてくれよオ?」

ガツチリと両手で左右から頭部を掴まれる。それが何を意味するかなどと、考える余地もない。

「くっ……な……おやめなさいッ……!! そんな、そこは……放しなさい!!」

バチバチバチイッ!!

「ひやぐうあああああああッ!!」

ただ抵抗の意志を示すしかできないシャインミラージュの頭に直接、強烈な雷撃が叩き込まれた。脳が直接電撃に晒され、目の前が激しく明滅し、思考も理性も焼き切れてしまいそうな予感に苛まれる。

いや、それすらもかき消される巨大な衝撃が脳天から指先にまで駆け抜けるのが止められない。

「んひいひいあああああッ!! ああああああッ!! あ、頭、だめ、ですのおおお!! ば、爆発、してしまいますからああ!! んはひいひいひい!! ひあああああッ!!」

頭がまるで爆弾のように弾けてしまう最悪のイメージが流れるも、事実としてそうなるわけではない。

しかし、バチバチと響く電撃の巨音と、頭部を掴む手を起点として発せられる電流が直接脳内で暴れ回るように感じ、死という一文字だけが大きくなっていく。

「大丈夫だ。そうならねエつて博士が言つてたからよ。少なくともこういうことに関しては信用できる。だから安心して電撃に泣き叫ぶこつたなア。ヒヒヤヒヒッ!!」

「くひいあああああッ!! そ、そんな、いやあああああッ!! ひあああああッ!! ああつひい!! ばちばちしますのおおおッ!! 頭、まつしろれええええッ!!」

必死に耐えていたモノも限界を迎え、とうとう呂律すら回らなくなる。

目の前に存在する闇のエナジーの怪物すらも白く染まって見え、直後には何も視界に映らない。

誰が保証しようが今身体を蝕む異常電流は変わらないのだから、変幻ヒロインはただただ悲痛な叫びを室内に木霊させるだけ。

「もつと鳴け!! もつと叫べッ!! 無様な悲鳴でオ

レを楽しませろッ!! ヒヒヤヒヤヒッ!!」

「んひひひひひひッ!? も、もつろ、はげひくうううッ!? くひひあああああッ!!」

グラッドの言葉に合わせて電撃の威力が確かに上がった。最早何も視界に映るモノはなく、虚空を見つめる変幻令嬢は頭の中で起こるスパークに支配される。

常人ならば簡単に死に至る威力も、悪を裁く為の力がそれを許さない。だが、その力もまた今は悪に利用されるだけでしかなかった。

圧倒的な無力感と敗北感。それらを感じることすらできない凶悪な責めに、シャインミラーージュは敗者の悲鳴という名の楽器を奏でるだけ。

ダーククライムの基地内。その一室に響くのは狂気じみた笑いと、モルモットにされる美少女ヒロインの叫びの不協和音。変幻ヒロインが戦う為のエナジーが切れるまで、この音楽は終わることはなかった。

※

「はい、お集りの皆さん。今日はダーククライム主催の特別なショーによるこそお」

僅かな先すらも視認できない暗闇の中、可愛らしい少女の声がスピーカーを通して響き渡った。

直後にスポットライトを浴びて姿を見せるゴスロリ少女に、闇の中で小さなざわめきが走る。

「たあっぷりに参加費はいただいているので、その分ゆつくりと楽しんでいてねえ」

ミスティが指を鳴らすと、ライトの数が一気に増えて全体を照らした。

円形に造られた広場。その中央に位置する場所にミスティは立っており、周囲は二メートルは軽く超える壁に覆われている。しかし二カ所、丁度直線を引き出した際にぶつかる位置には扉が存在し、何者かが現れるのを約束しているようだ。

まるで闘技場を思わせる造形によって存在する観客席は、よく見えるようにと一段ごとに高さが調節されており、全席が完全に埋まっている状態。

さらには巨大モニターが幾つも備えられており、どこにいても決定的瞬間を見逃すことはない。

「さあ、前置きなんてこれ以上は無駄だからさっさといつちやいましょうか。まずは今日の主役、平和を守る正義のヒロイン……変幻装姫シャインミラーージュの登場でえす!!」

ミスティが右手を上げると、その先に存在する扉が大仰な音を立てて開き出した。

この場にいる誰もが登場を期待し、本人の登場前から割れんばかりの歓声が響き渡る。

「……なんて悪趣味な真似を……」

グラッドによって連れてこられた先が、あまりにも予想外すぎてシャインミラーージュは静かな怒りに身を震わせる。

この場に来るまでに説明を受けていたけれど、いざその場に立つてみると感情が波打つのを確かに感じたからだ。

「あらあ、そんな顔しないで。お客さん達にしつかりと笑顔を振りまかないとお……なんだって正義のヒロインなんだからあ」

「ふざけないでッ!!」

ミスティの挑発的な言葉に対し、変幻装姫が返すのは怒声。それはダーククライムに向けてだけではない。

「あなた達、どうしてこのような場所に……ダーククライムはわたくし達の世界を狙う悪の組織ですよ!」

そう、ダーククライムの主催だと理解しながらも、高額なチケット代を払ってまでこの場に集まった人々。

つまりは悪に加担しこの世界のことをどうでもよく

いと思っている、己が欲望にだけ忠実な存在に他ならない。

それがこんなにも多くいることが許せずに、目を覚まして欲しいと懸命に、力強く訴えかける。

「うるせえッ!! 俺はお前のポコポコにされる姿を見にきたんだよ!!」

「そうだ!! シャインミラーージュの無様な姿見れるって聞いてきたからな」

「さっさとやられてしまえ!! ワシらを楽しませろ!!」

だが返ってきたのは心ない言葉の数々。同じ人間でありながら、人々の為に戦ってきたヒロインの敗北する様を望むモノ。

「そんな……あなた達は……!!」

これではダーククライムの構成員と変わらないではないか。

確かに人間にも悪は存在する。しかし周囲を埋め尽くす観客、その全員がそれなのだ。多数存在する人々の誰一人として味方のいない現状に、シャインミラーージュは悔しそうに唇を強く合わせるだけ。

「うふふ、言いたいことは終わったかしらあ?」

「やあ、次の入場者でえす」

決して交わることのない、正義のヒロインとこの場に存在する人々の望み。その様を見て笑みを浮かべるミスティが、今度は左手をもう一つの扉へと向けた。

シャインミラーージュの登場の時と同様に、大きな音を立てて閉じていた二枚の扉が開き、もう一人の主役をこの場へと招待する。

「ギヒヒヒッ!! ようやく俺様の出番つてわけだ」

現れたのはドルコス。ダーククライムの幹部の一人にして、己が肉体を武器とする巨体の怪人。

「……ドルコス。あなたが相手ですのね」

これまで幾度となく戦ってきた、変幻令嬢にとつ

て一番見知ったとも言える相手。

この場に最も似合う存在であり、だからこそシャインミラーージュの声が僅かに低くなる。

「そうよ。こういう場所ってのが残念ではあるが、お前をぶちのめせるってんなら仕方ねえ」

ドルコスの声から溢れる余裕。それは今の変幻装姫になれば確実に負けないという自信の表れからだろう。

このような場所で大々的に行うのだ。シャインミラーージュという正義のヒロインが勝利する可能性などないに等しい。

「わたくしがあなたに負けると思いますの？ 観客達が見ている前で、いつも通り倒してあげますから覚悟なさい」

けれども、臆するわけにはいかない。たとえこの場にいるすべてが敵だとしても、ヒロイン然とした姿を崩すわけにはいかないのだ。

普段見せている自信に満ちた表情のまま、ドルコスへの勝利宣言。その直後に湧き上がる歓声は、強気なヒロインが倒される様を見た観客達の喜び。

どんな反応を見ても誰かを喜ばせるだけ。歪な歓声を浴びながら、変幻装姫は心の中で怒りの炎を滾らせる。

「いつまでその減らず口が利けるか楽しみだなあ。ギヒヒヒッ!!」

「うふふ、お互いにやる気十分って感じねえ。じゃあすぐにでも戦って貰いたいところだけど、その前に……」

シャインミラーージュとドルコスの顔を一度ずつ確認し、お互いの戦意を確認したミステイが指を鳴らす。

「な、なんですかの……これは……ッ!」

反応したのはシャインミラーージュの身体だった。まるでフォームチェンジを思わせる、神聖なエナ

ジーによる光が勝手に溢れ出している。

決して自分の意志ではない。間違はなく他者の手による操作……つまりは、神聖なエナジーの研究を行っていた博士の手によるモノ。

（そんな……ここまで、神聖なエナジーがダーククラムに解析されてしまっているだなんて……）

どんな手で敗北を強要されるのかという疑問が晴れた。

フォームチェンジすらも外から自由に行えるというのであれば、もうシャインミラーージュという正義のヒロインはダーククライムの操り人形も同然。

逆転の芽すら潰されてしまったのではという最悪の予感に、絶望という闇が拡がっていく。

「はあい、これがシャインミラーージュの新フォームでえす!!」

「くっ……こんな格好……どこまでも悪趣味な……!!」

光が消え、フォームチェンジを終えたシャインミラーージュの姿が露となった。

髪は金色のまま赤いリボンを一つのトレッドマークとしたポニーテール。

白と黒のコスチュームカラーは、まるで正義と悪を表しているかのように、正義のヒロインが闇に染め上げられていると思わせる。

シャインミラーージュのイメージとして一番強いストライカーフォームのレオタードコスチューム以上に露出が多く、胸部から臍までしっかりと肌が露出させられていた。

元々のストライカーフォームもまた露出が多いコスチュームではあるけれど、敵の手で作り変えられたという事実がさらなる恥辱を、変幻ヒロインに刻み、反射的に片手で胸を隠す。

「恥ずかしがってもいいけど、そんなんじやあの筋肉バカとは戦えないわよお？」

「……わ、わかってますわ」

ミステイの言葉にギョツと手を握り締め、ファイティングポーズを取る。そうだ、どんなことをされようと折れるわけには、屈するわけにはいかない。

敵の手で生み出されたフォームであるからといって、負けることは許されないのだから。

「うふふ、そうこなくっちゃあ。じゃあルールだけ、先にギブアップした方の負け。意識を失うだけだとつまらないから、言うまでは強制的に起こすことになりまあす」

神聖なエナジーを解析されていると知りながらも戦う意志を失っていない変幻装姫の姿に安心しながら、ミステイが背を向けてドルコスが現れた扉へと歩き出した。

「ああそうそう。その新フォームの名前なんだけどお」

開く扉の前で一度足を止め、チラリと横顔を見せるミステイの口元が上がる。

「——スレイヴフォームっていうんだってえ」

そう言い残し、赤い瞳を細めてゴスロリ少女の姿は扉の奥に消えていった。

「それはどういう——っ!」

明らかに戦う為のフォームの名称ではない。畳みかけるような困惑が変幻ヒロインを襲い、確かめようとミステイを追おうとするも、突如として振り下ろされる拳がそれを許さなかった。

「もう始まってんだ!! 俺様を倒すんじやねえのかあ!」

この場での変幻装姫の戦う相手。両拳を自ら叩き合わせて笑う筋肉怪人を前にして、シャインミラーージュは意識を集中させる。

「……言われずとも、そうさせていただきますわ」

（力が入らない……スレイヴフォームというのはこ

ここまで……）

卑劣な男によつて
武闘家少女の純潔が
穢され寝取られる！

どうかこの手に
スズランを

小説
NOVEL

ざんげ
懺悔

挿絵
ILLUSTRATION

かざくら
夏桜

道場の庭に咲いた桜の花びらが強めの風により、まるで踊るように空を舞っていた。

二十代半ばで看板を引き継いだ千代田宗介が、桃色に染まった乾いた地面を竹箒で掃いていると、背後から呆れるような声が掛かった。

「宗介さん。そういうのは門下生に任せてください」

宗介が振り返らずに掃除を続けたまま苦笑いを浮かべた。

「門下生といっても君しかいないじゃないか」

「だから、あたしに任せてくださいって言ってるんです」

両手を腰に当て、不満げに口を尖らす唯一の門下生である源杏と向き合うと、宗介は掃除の手を止めて穏やかな微笑みを浮かべる。

武の真髄とは敵を友にする事にあり、宗介の纏う深い包容力は大抵の相手に安心感を抱かせる。

だが、こと杏に限っては、頬を紅潮させて目を逸らさせる。

杏と対峙した他流派の武道家は例外なく彼女の氣風をこう評する。

「背骨の代わりに日本刀が差し込まれているのではないかと」

そんな彼女が直視を困難とするのは、長年想いを寄せる宗介の視線だけだった。

「もう大学から帰ってきたんだ。早いね」

「卒論も終わってますからね。あと一

年は顔を出しに行く程度ですよ」

「就職活動は？」

「もうその話は何度もしましたよね。宗介さんとの道場を盛り上げていきます」

宗介はやれやれと肩を竦めると掃除を再開しながら論すように口を開いた。

「そんな甘いものじゃないよ。僕だってサラーマンと兼業だ」

「あたしだって来年からはお嫁さんですよ？」

やや風は強いものの、四季の始まりに相応しい世界を祝福するような晴天だった。

そんな麗らかな陽射しに負けないほど、杏はニツ、と晴れやかな笑みと一緒に右手でピースした。

とはいえ勢いで口にしたものの、やはり慣れないアピールは恥ずかしかったのか杏は耳たぶまで赤くなっていた。

杏が通り魔事件に遭遇したのは中学の時だった。目前に迫る刃物を持った男を、難なく制した宗介に興味を抱き道場の門を叩いた。

彼の實力と人格に敬意を抱くと同時に、自身にはない静穏な物腰に異性として惹かれていくのにそう時間は掛からなかった。

入門当時は宗介にとって杏はまだ幼く、妹弟子の一人としてしか見る事はかなわなかった。だが、成長期を迎えた彼女は日々武術の才覚と共に、女としての華を咲かせていった。

高校を卒業する頃には清々しい可憐さを伴うようになっていた。そのひたむきな瞳で恋慕を告げられれば、どんな捌きの達人であろうと致命傷は避けられないだろう。

秘めた想いはその高校卒業と同時に爆発し、一世一代の告白は実った。しかし宗介にとっては、やはり門下生との交際は邪念を道場に持ち込むおそれありと危惧した。

それゆえ妥協案として、大学を卒業して社会人になるまでは、あくまでプラトニックな関係でいようと提案したのである。さらにはその誓いが達成された時には夫婦となる約束も交わしていた。

真面目な二人はそれを三年突き通し、そして最後の一年を迎えた。実際の三年で彼らが肉体的に触れたのは、稽古以外ではデートの時に手を握っただけで、それも数えるほどしかない。

学校帰りであるワンピース姿の杏からは、まさにこれから食べ頃を思わせる青々しい色香が漂う。

華奢な身体つきのわりには隠しきれない胸部の膨らみ。スカートから覗き見える締まった太股は眩しいほどに白く、到底筋肉などついてなさそうな肉感を有している。

小さな顔に氣品のある目鼻立ちが武道に似つかわしいとは言えなかった。

艶やかな唇は控え目で、宝石のような瞳は意志の強さと同時に育ちの良さを表していた。

流石の宗介もそんな極上の果実を相

手に、何度か性欲に負けそうになったが、それでも彼女を真剣に想う気持ちで自分を律していた。

「まあ実際のところ、道場はもう君に任せても良いだろうけどね。僕は依然としてこの体たらくだし」

そう言っただけで宗介は右腕を持ち上げる仕草をしたが、その動きはどこかぎこちない。杏の眉根に微かな憂いが浮かんだが、すぐさまそんな機微を吹き飛ばすように胸を張った。

「その通り。宗介さんの技は全部あたしが引き継ぎましたから。だから安心してくださいよ」

その言葉は勝ち気な小娘による誇大妄言などではない。

一見細身にすら見える中肉中背の身体にはバネのような俊敏性が備わっていた。

なにより後遺症が残る怪我を負ったとはいえ、宗介に一線を退く決意をさせたのは、彼女の鋭い眼力が生み出す類い稀なほどの反射神経だった。

間合いの中であれば飛行する燕を素手で捕縛可能とする彼女は、その異才にたゆまぬ努力を加え、既に免許皆伝の域に達していた。

宗介はそんな彼女を弟子として誇りに思うと同時に、彼女が恋人として、そして未来の伴侶として愛おしい存在に変化している事を日々実感していた。

杏に至っては年頃の女の子でもある。毎晩のように枕を相手に宗介とのキスの練習に励むほど、彼への想いは敬愛

や性愛で破裂寸前の風船の如く膨脹していた。

花びらが散るうがすぐさま緑の葉で未来を薫らせる桜のように、二人に降り注ぐのは燦々とした陽光しか見当たらない。そんな日向に影を落とす声が不意に届いた。

「すんませえん。道場破りなんすけど」

先程までの少女然としたどこか愛らしい雰囲気は否から消え失せていた。

「師範。準備ができました」

道着である袴を着用して道場に顔を出した彼女は、宗介譲りの静かに研ぎ澄まされた鋭さを背負っていた。

「相変わらず道場の中では師範呼びなんだ。いつもみたいに名前前で呼べば良いのに。来年結婚だっけ？」

道場の中央で否を待ち構えるのは、如何にも軽薄そうな、瘦身上背のある男だった。赤いフランネルの柄シャツにダメージジーンズを召し、茶色の短髪に顎髭を蓄えている。

「久里須。確かあんたあたしよりも年下でしょ」

否が男の名を呼び、非難すると男はジーンズのポケットに両手を縮まったまま愉快そうに笑った。

「この前二十歳になったばっか。なにに？ 成人のお祝いしてくれんの？」
否の視線がより険しく男を刺すが、意に介した様子もなく笑みを浮かべ続ける。

「敬語とかもういいっしょ。俺もうこ

この門下生じゃないし。あんたの弟弟子でもないんだしさあ。大体追い出したのそっちだし」

背を壁に預けて立っていた宗介はその言葉に微動だにしなかった。傷跡が疼く事もない。責めるのであれば自身の至らなさしかない。

しかし否はそこまで達観はできない。男が待つ道場の中央へと向かう足遣いには、ようやく忘れかけていた憤怒がふつふつと滾っていた。

「卑劣な奴。正々堂々と勝てないからって師範が熱を出した病み上がりになり合いを望んだくせに」

「勝ちば勝ちだろ？ なあ師範？」

互いに手を伸ばせば届きそうな距離で足を止めた否の睨みをスルーして宗介を一瞥する。だが、当の宗介は一切の不服も浮かべずに、「その通りだ。体調は言い訳にならない」とだけ簡潔に答えた。

「ほら、師範もまあ言ってるけど？」

「あたしは認めてない。勝敗が決した後にあんたがやった不要な駄目押しで師範が大怪我して、現役引退しなきゃいけない事になった事も、絶対に許さない」「こつわ。折角可愛い顔してんだからさあ、もっと愛想良くしてほしいなあ」

久里須の挑発めいた軽口には、否は深い呼吸を見せると、むしろ逆に怒りを霧散させたように雰囲気を一変させた。「……それでもあたしは、私怨であんたを痛めつけたりはしない。それは師範とこの道場に対する冒瀆だから」

「考え方が固い。固いよ否ちゃん。もつと人生エンジョイしようぜ」

否が半身になり右手を前に差し出す。

「だからあたしと師範の武道の範疇で、正々堂々とあんたをぶつ飛ばす」

その表情と声色に余計な力は入っていない。宗介は満足そうに目を細めて顎を引いた。弟子が、恋人が、真の強者に育ってくれた事に感銘を抱いた。

「そんな盛り上がりもってもらえると俺も嬉しいわ。ぶつちやけただの暇つぶしだったからさ。実はこの後デートの予定だったんだけどドタキャン喰らったの。そんでああそういえばこの辺に弱

つちい道場あったし？ からかって遊んでやろうかなってくらいテンションだから」

「顎髭似合ってるよあんた。そりや振られるわ」

「いやいや。結構好評よこれ。最近セフレめっちゃ増えてさあ。減らそうか迷ってたんだ。ああでも否ちゃんなら全然受け付けオッケーよ？ 普通に可愛

いし、あと前から思ってたけど胸めっちゃデカイよね？ それどれくらいあんの？ はは。ねえ師範は知ってるっしょ？ 昔のよしみだし教えてよ」

宗介が口を開く。

「久里須。うちの流派について今更説明が必要か？」

久里須が大袈裟に肩を疎めると、「わかってますって。実戦によーいドンなんて合図はない、でしょ。もう試合は始まってんですよね。てか師範が相手

しなくて良いんすか？ 看板貰っちゃいますよ？ 別に要らねーけどさ」とヘラヘラ笑った。

「問題ない。否はこの看板を背負うほどに強くなった」

その言葉に否が益々奮い立つ。恩義と敬意が彼女の血潮に乗って頭は冷たく、身体は熱く火照らせた。

「ていうかあたしの実力なんてあんたが一番知ってるでしょ？」

「はいはい。美しい師弟愛だことで。まあ準備くらいはさせてくださいよ」と、ジーンズのポケットから何かを取り出すとそれを両手に嵌めた。

久里須は両手を見せつけるように開ける。

「オーブンフィンガーグロブ。これ無いと拳痛めちゃうからさ」

否が鼻で笑う。

「ただの暇つぶしだったんじゃないかっ

たっけ？ 準備万端じゃん」

「家が通り道だったんだよ」

「言い訳だサイよ」

「相変わらず師範以外には手厳しいのな。メリケンサックとか入ってないから安心してよ」

「別にいいよ。そんなの着けても。今からでも取りに帰った方が良いんじゃない？ それかあたしが体調不良になるまで待つ？」

露骨に小馬鹿にする否の口調に久里須が「ははっ」と乾いた笑い声を上げるが目は笑っていない。

「あ、ちよい待って。女から電話」

そう言つて久里須が背を向けた。その次の瞬間、身体を反転させて右手で裏拳を放った。

ブランドを感じさせない鋭さに宗介と杏は驚きを隠せない。

敗北時が体調不良であつたのは確かだが、それでも久里須の実力と才覚は杏と肩を並べていたと宗介は考える。

その裏拳も並の競技者であれば反応すらできずにクリーンヒットしていたであろう。

しかし杏は事も無げに突き出して右手で裏拳を払い上げる。

同時に一步距離を詰め、振り上げた右手で手刀を繰り出した。

鎖骨を狙つたそれはやはり常人では軌道を捉える事すら不可能だったが久里須がギリギリ左腕で受ける。

しかし久里須は反撃に移れない。上半身がまったく揺れない独特の歩法で杏がさらに間合いを詰めると、互いの息遣いが直接交わる距離に肉迫する。

杏が最も得意とする距離を知っている久里須が一旦退こうとするがそれはかなわない。

杏の右の踵が、久里須の左の爪先に突き刺さるように押し込められていた。フットワークを封じられた久里須が、性差による腕力にモノをいわせようと首を抱えにいく。

ほぼ反射で行われたその選択が過ちだったとすぐさま気付いたが、時は既に遅かった。

雑に繰り出された右手の手首を杏の

両手が捉える。

「やべっ」
焦りの声を上げる久里須とは対照的に、杏は黙つて久里須を小手返して投げ飛ばした。

身長差は僅に二十センチを超えるがまるで手品のように久里須が転倒する。

なんとか受け身を取るがこの道場が教えているのが空手やボクシングではなく、もしくは柔道や合気道ですらない事は久里須が身を以て知っている。

打投極、全てを内包する実戦武術であり、倒れたから仕切り直しなどというルールは存在しない。

すぐさま杏の踵が顔面を襲う。久里須はブレイクダンスの要領で身体を捻りながら回転させ、回避と低空の足払いを両立させた。

宗介は思わず「ほう」と感心の声を漏らした。

我流の色が濃い、久里須が完全に武術の世界から遠ざかつていない事はもはや明らかだった。杏とは別の道で久里須もまた相当の使い手に成長していた。

しかしそれでも尚、杏は鉄壁だった。外した踵でそのまま足払いを受けると、「マジかよ」と久里須から驚愕の声が漏れた。

そしてそのまま足刀で久里須の鼻先を蹴り上げる。久里須の顔面が跳ね上がるとそのまま後ろに倒れた。その衝撃を利用して後転すると、なんとか間合いを取る事に成功した久里須だが、

その表情にもう軽薄な笑みを浮かべる余裕はない。

「……俺こう見えてもクラブの用心棒やつてさ、プロボクサーとかプロレスラーボコボコにしてくれんだけど」

息が切れ、額に汗を浮かべる久里須とは対照的に、杏には一切の変化が見られない。

「だから帰って金属バットでも持つてくればって言っただけじゃん」

「……じゃあお言葉に甘えてなんでもアリでいかせてもらおうわ」

そう口にした久里須が両手首を触り、グロップを締め直す仕草をした。

そして中腰になると真正面からのタックルを仕掛ける。

如何に体格差があろうとも、真正面からの突撃など否にとつては愚直以外の何ものでもない。むしろ打撃戦よりも体格差の優劣が出にくい寝技の方が容易に勝機を手繰り寄せる自信があつた。

しかし組まれた次の瞬間、杏の身体を激しい電流が襲った。

「ぐうっ!!」

抗いようのない強烈な痺れに全身を硬直させ、そのまま久里須に馬乗りになられる。指先一つ動かせないまま軽薄な笑みを見上げる事しかできない。

「顔は勘弁してやるよ。結構タイプだからな」

そう言うと、腹部に遠慮なく拳を振り下ろした。

「うっ、ぐっ!!」

無防備な鳩尾を殴打された杏は馬乗りで身体を拘束されたままのうちに回った。

「ほーら。もつぱツイクぞ」

久里須が再び拳を振り上げると、宗介が「待て」と声を掛ける。

「……勝負ありだ」

久里須が立ち上がりながら、「え、いいんすか? 看板掛かっているのにそんな簡単に負け認めちゃつて。それとも師範でも婚約者が大事つてか?」と頬をニヤつかせた。拘束を解かれ呻きながら身体をエビのように縮める杏の横顔を、足裏で踏みつける。

「君の勝ちだ。杏を放せ」

宗介も久里須がグロップの中にスタンガンのようなものを仕込んでいたのは理解していた。タックル前の仕草で発動させていたのだろうと推測する。

それでも宗介と杏の流派に反則負けという概念はない。武器を持つ相手から誰かを守るなければ意味がない。だからこそ宗介はかつての杏を守り、その杏もそんな宗介と流派に傾倒した。

故に不平不満が出るはずもない。

「でもどうしよつかなく。ノリで言っちゃつたけど看板とか貰つても粗大ゴミ行きだしな。あ、そうだ。杏ちゃん俺のセフレでいてくれる間は看板外す猶予あげるつてのは。その間なら暇あつたら再戦してやつても良いし」

「久里須。一つ忘れているな。ここの道場にはもう一人戦える人間がいる」

「ええ、いましたっけそんな。もう

壊れたボンコツしか居ないっしょ」

宗介が歩み寄る。未だに足蹴にされたまの否は、痺れで満足に身体を動かさないまま、申し訳なさそうに「……師範……すみません」と青息吐息の状態で呟いた。

「今の師範にはこんなもん不要っすわ。正々堂々と勝負してあげますよ。へへ」

久里須はグロープを外すと、正々堂々を殊更強調して言った。

久里須との組み手が原因で現役を退き、育成に専念していた宗介と、我流とはいえ実戦の中で揉まれ続けた久里須の差は歴然だった。

それを試合と表現できたのは最初の一呼吸だけで、後はもう一方的な虐待でしかなかった。

全身を殴打された宗介は壁に背をもたれてぐったり腰を下ろしていた。

そんな彼へ尚も追撃しようとする久里須に、痺れが治り始めた杏が涙目で絶るように制止するのを、宗介は朦朧とし始めた視界で捉えていた。

「セフレでもなんでもいいからっ、宗介さんをそれ以上傷つけないでっ！」道場内で初めて杏が宗介の名を呼んだ。

久里須の手がそれでようやく止まる。後ろから力なくしがみつくと杏に振り返った久里須の横顔は、無言で杏の意志を確認するように口端を愉悦に歪ませていた。

杏はうつすら涙を浮かべながらも、

久里須を睨み上げながら「それくらいで済むなら是非もないっての」と氣勢を上げるように言った。

握られた拳は屈辱と恥じらいで震えていたがその感情を表に出さないのは、自身よりも宗介のプライドを守る為だった。

敬愛する恋人に育ててもらった自分が、この程度の苦難で臆する姿を見せるわけにはいかない。そんな確固たる思いが彼女の背筋を伸ばす。

それでも宗介は、そんな馬鹿げた提案を受けるくらいであれば、杏の尊厳の方が重くなるほど彼女の事を愛しく思っていた。

しかしもう言葉を発する事すらかなわない。弱い自分が恨めしかった。杏に自ら身を投げ出させる自分が恥ずかしかった。

「……とりあえず先に宗介さんを手当てさせて」

「んな大した怪我じゃねーよ。まずはここで一発抜いてくれよ。喧嘩の後つてピンピンに昂つちやうからさ。俺も我慢できないわ。まさか神聖な道場でそんな事できないとか言わないよな？ 負けたのに前言撤回するとか流石にダサすぎだぜ？」

「……つく。言われるまでもないわよ！」

杏は刺々しく言い返すと、ちらりと宗介を一瞥した。その視線には憂いと、それ以上の覚悟が宗介に伝わった。

「さっさと終わらせなさいよ」

「大丈夫。わりと俺って早漏だからじゃあそこに座って上着脱いでよ」

ふて腐れるような迅速さで服を脱ぐに杏からは、恥ずかしがってやるものかという気概を感じる。

杏は向かい合っていた宗介と久里須の間に割って入った為、宗介からは完全に杏の後ろ姿しか見えなかった。

初めて見る弟子であり恋人の背中が白く、そして細かった。

そして筋肉質ではない女性らしい肌の上を、桃色のブラの紐が走っているのが妙に艶かしく感じる。

「やっべ。杏ちゃんってやつぱりめっちゃ巨乳じゃん」

気色ばんだ声でそう言いながら、浮ついた様子でジーンズとボクサーパンツを脱いでいく。だが、宗介からはその豊かな乳房は一切見えない。

初めて異性に晒したであろう杏の乳房を目にする権利があるのは、勝った男だけ。

同様に露出した久里須の下腹部も宗介から確認する事はできない。しかし、ジーンズと下着が床に滑り落ちた際に、あの恐れ知らずの杏の肩がびくりと震えた事から、その威圧感は推して知る事ができた。

「そんなじゃ頼むわ。杏ちゃんフェラチオやった事あるの？」

「……あるわけないでしょ」

「じゃあ俺が指導してやるよ。いつもここで師範に指導してもらってたようにな。へへ。あ、これからは杏ちゃん

が頑張らないと元師範になっちゃうな？」

「即再戦して、二度と舐めた口利けないくらい叩きのめしてやるから」

杏のその口調は殺意に届きそうなほどの激情を必死に押し殺して凝縮されていた為、日本刀のように冷たく重く鋭かった。

「まあまあ。とりあえず今は口で舐めといてよ。それじゃ、まずは先っぽに挨拶代わりのキスして」

一瞬の躊躇いの後、杏の首が小さく前後し、宗介の耳に唇が何かと触れあう音が届いた。

「もつと唇すばめて。押しつけるようにキスしてよ」

慫慂無礼なその言葉に杏の肩が怒りで震えたが、彼女に選択肢はない。

ちゅっ、と先程よりも明瞭に唇が押しつけられる音が鳴ると、「そうそう。それを続けて」と満足そうに久里須が頭を軽く撫でた。

その手をまるで蠅のように払い除けながらも、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と激かな道場には似つかわしくない愛らしいキスの音が連続した。

二人がプラトニックな関係を築いていた事を察していた久里須が挑発するように、「杏ちゃんの唇めっちゃ柔らかくて気持ちいいすよ」と笑みを浮かべた。

そして杏を見下ろし、「キス上手じゃん。一人で練習でもしてたん？」と小馬鹿にした。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>